

宮城県文化財調査報告書第 164 集

# 高田 B 遺跡

- 第2次・3次調査 -

平成 6 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会  
宮 城 県 道 路 公 社



上：楕円形圓式期の水田跡(東より)

下：楕円形圓式期の水田跡の拡大(B区南部中央)

## 序 文

世紀末という多様で歴史的な時代変化の中で、宮城県では、産業経済の新時代に向けての基盤強化や、国際化・情報化のための諸施策を、新国土軸の理念の下に推し進めております。県下各地の均衡のとれた経済社会の熟成と東北における本県の中核的存在性の立場から、ヒト・モノ・文化を運ぶ高速交通ネットワークは、その理念実現のための基幹的施策であると認識されております。

こういった中で、仙台南部道路は東北縦貫自動車道と太平洋海岸線を通る常磐自動車道・三陸縦貫自動車道との連結を果たすものとして、来るべき新世紀に向かって重要な使命を負っていると言わなくてはなりません。

この仙台南部道路は、東北縦貫自動車道と国道4号を結んでいたこれまでの仙台南道路の共用区間を延伸して、仙台湾岸道路の呼称の下に実現した仙台東部道路と接合し、仙台湾・仙台空港に直接結ばれた高速道路として多くの期待をあつめています。一方、この延伸工事の着手によって新しく発見された高田B遺跡の埋蔵文化財は事前調査の進む段階で極めて大規模な遺跡であることが分かつてきました。この先代の人々の文化の上に造られる道路が、古い文化と未来文化を結び付ける掛橋という認識の上に立って、大がかりな文化財の調査が、県市両教育委員会の全面的なご協力により多くの労力と時間と費用を投入して行われました。

高田B遺跡の調査では、縄文後期・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・江戸時代の幅広い幾層にもわたる多くの遺物や貴重な資料が収集されました。これらは、古からの人々の生活様式やその移り変わりを知る上で非常に貴重な文化遺産であると考えます。この地域が、多くの先人達によって開かれ築かれた歴史的価値の高いところであることに深い想いを寄せながら、日の目をみた文化財と道路が新時代の社会形成に大きく役立つのであれば大きな幸せと思ってあります。

この調査は、宮城県文化財保護課・仙台市文化財課及び関係の皆さん・そして多くの地元の方々の努力によって成し遂げられました。あらためて深甚なる敬意を表し感謝を申し上げる次第です。

平成6年3月

宮城県道路公社理事長 高橋 準一

## 序 文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していくといった考え方を持つところが多くなってきています。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな郷土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにつながります。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成4・5年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成6年3月

宮城県教育委員会教育長 鈴鴨清美

## 例　　言

- 1 本書は宮城県道路公社が担当する仙台南有料道路建設計画に伴う高田 B 遺跡の第 2 次・第 3 次調査の報告書である。
- 2 . 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
- 3 . 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った。（以下敬称略）  
太田昭夫、小川淳一、斎野裕彦、荒井格（仙台市教育委員会）  
須田富士子（宮崎町教育委員会）、菊地芳朗（福島県立博物館）  
日下和寿（東北大学大学院）、檜山泰貴（中新田町東北陶磁文化館）  
仙台市教育委員会
- 4 . 石器の石材鑑定については須田富士子氏に御教授頂いた。
- 5 . 弥生土器の植物茎回転文の図化方法については『南小泉遺跡- 第 12 次発掘調査報告書』（佐藤：1985）を参考にした。
- 6 . 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖（1973 年）』を利用した。
- 7 . 本書の第 1 図は建設省国土地理院発行の 1/25,000 「仙台東南部」を複製して使用した。  
また第 2 図は 1/2,500 の仙台市都市計画図を複製して使用した。
- 8 . 本書の執筆は調査員全員で協議、検討し、I、古代、中・近世の事実記載および考察は古川一明、石器の事実記載および考察は須田良平、歯牙製垂飾品の事実記載は菅原弘樹が行い、その他は高橋栄一が行った。また、編集は高橋が行った。
- 9 . 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

## 目 次

I	調査に至る経過.....	1
II	遺跡の位置と環境.....	1
III	調査の方法と経過.....	5
IV	調査の成果.....	6
1	層序 .....	6
2	発見された遺構と遺物.....	9
(1)	弥生時代.....	9
(2)	古代 .....	52
(3)	中・近世.....	58
(4)	その他の遺構.....	63
V	考察 .....	69
1	遺物について.....	69
2	遺構について.....	80
VI	まとめ .....	87

## 調査要項

遺跡名：高田B遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 01440：遺跡記号N P）

所在地：宮城県仙台市若林区日辺字高田

調査期間：第1次調査 1990年（平成2年）5月22日～6月2日

                  第2次調査 1992年（平成4年）8月31日～12月14日

                  第3次調査 1993年（平成5年）4月7日～7月20日

調査面積：第1次調査 事前調査 200 m<sup>2</sup> 確認調査 1400 m<sup>2</sup>

                  第2次調査 事前調査 2800 m<sup>2</sup>

                  第3次調査 事前調査 4200 m<sup>2</sup>

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：第1次調査 白鳥良一・阿部博志・菊地逸夫・近藤和夫・吾妻俊典

                  第2次調査 小井川和夫・後藤秀一・大和幸生

                  第3次調査 小井川和夫・後藤秀一・古川一明・高橋栄一

## I 調査に到る経過

高田B遺跡は、仙台南有料道路建設工事に先立って宮城県文化財保護課が行った分布調査により新たに発見された遺跡である。分布調査以前は北側の自然堤防上に立地する高田遺跡のみが周知の遺跡として登録されていた。有料道路計画路線がその南側の隣接地を通過することになったため、この部分について試掘調査を行ったところ当遺跡が発見されたものである。

試掘調査の成果を受け、宮城県文化財保護課、仙台市文化財課は開発の原因者である宮城県道路公社と遺跡の保存問題についての協議を行った。しかし有料道路の計画路線は西側の既存のインターチェンジと、東側の仙台東部有料道路との接続部（ジャンクション）双方の位置が固定されており計画路線の変更は困難であった。このため、計画路線に関わる遺跡の範囲について事前に発掘調査を行うことが決定された。

調査対象地は約二万平米と広大な面積であったため、その西半を宮城県文化財保護課が、東半を仙台市文化財課がそれぞれ分担して調査することとした。両地区的調査はいずれも二ヶ年によろび、宮城県文化財保護課が担当した西半部では1990年（平成二年）に第1次調査、1992年（平成四年）に第2次調査、1993年（平成五年）に第3次調査を行いすべての調査を終了した。

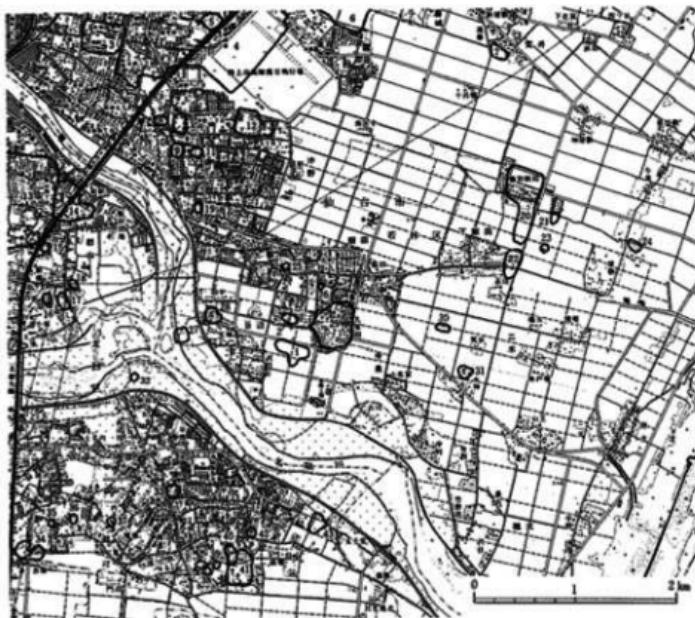
今回の報告は宮城県文化財保護課が担当した高田B遺跡西半部の第2・3次調査の発掘調査成果についてのものである。試掘調査および第1次調査の成果については既刊の調査概報（近藤；1991）に詳述されているのでそちらを参照されたい。また、仙台市文化財課の調査成果は別途に報告される予定である。

## II 遺跡の位置と環境

高田B遺跡は、仙台市東南部の若林区日辺字高田に所在し、JR東北本線長町駅から東南約3.5kmに位置している（第1図）。標高は約4mである。遺跡の南約700mには名取川が蛇行しながら東流しており、一方北側には自然堤防上に立地する高田遺跡が隣接している。

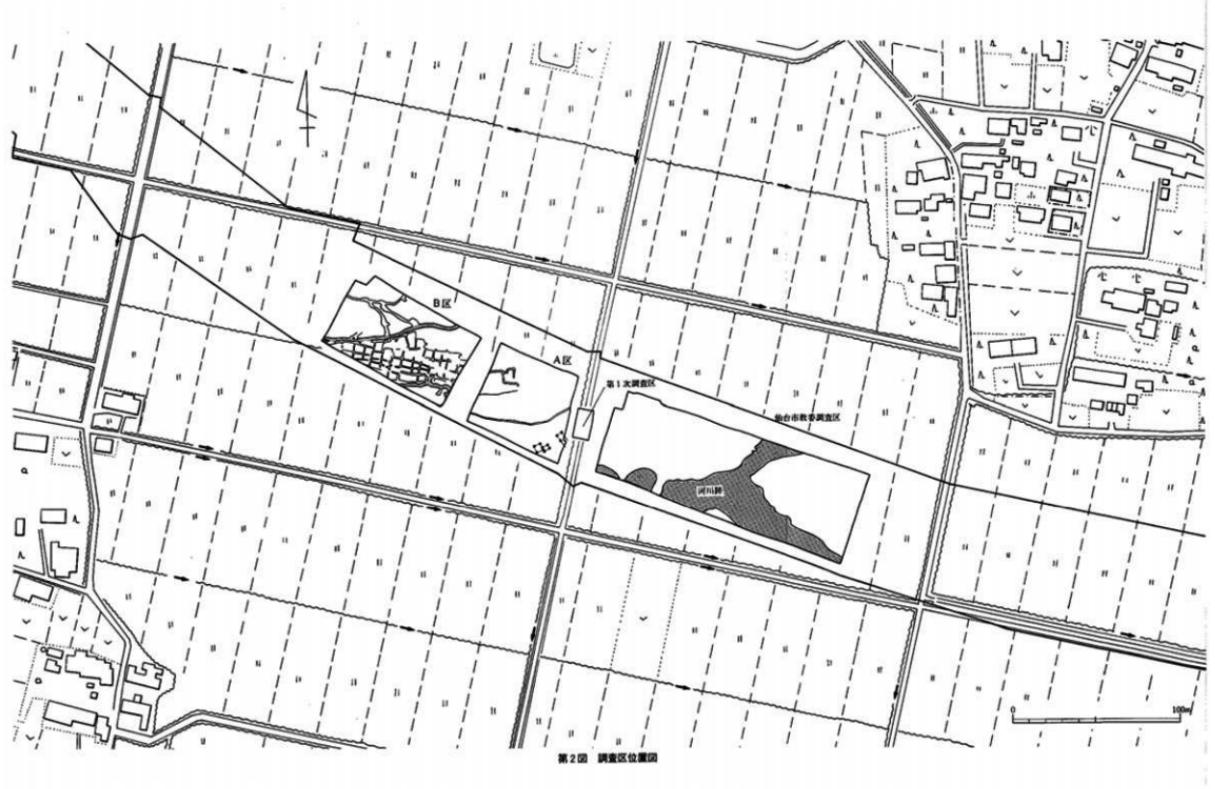
この付近一帯は仙台平野のほぼ中央部にあたり、水田が一面に展開する中の微高地上に集落が点在するのどかな景観を呈しているが、発掘調査によって河川跡が発見されるなどこの周辺の旧地形は、自然堤防、後背湿地が複雑に入り組み現在より変化に富んでいたことが明らかになった。

遺跡の周辺には、弥生時代から近世にいたるまでの遺跡が多く見られる。弥生時代の遺



番号	道路名	正地	横町	時代	番号	道路名	正地	横町	時代	
1	高見 三 通	中	横	古、近、中世	23	下柳田 高見 通	自然地物	円	横	古地
2	高見 四 通	自然地物	合	古	24	高 梅 通	自然地物	合	合	中世、近世
3	若 畑 通	自然地物	横	古	25	上 城 通	自然地物	合	横	古地
4	高 小 川 通	自然地物	角	古	26	梅 早 通	自然地物	内	横	古地
5	高見 横 古	自然地物	内	横	27	日 近 通	河 川 通	古	地	古地
6	仙台原野通	中	横	古	28	日 近 通	自然地物	城	横	安町
7	下 沢 井 通	自然地物	合	地	29	今 隆 通	自然地物	城	横	中世
8	移 伸 一 通	自然地物	合	地	30	集 通	自然地物	合	地	古代
9	移 伸 二 通	自然地物	合	地	31	二 木 通	自然地物	城	横	室上桃山
10	移 伸 通	自然地物	合	地	32	大 壇 山 吉 墓	河 川 通	円	横	古地
11	中 横 西 通	自然地物	合	地	33	中 横 中 通	自然地物	東	横	古地、平安
12	中 横	自然地物	横	中世	34	中 河 内 通	自然地物	合	地	古地、平安、中世、近世
13	移 山 通	自然地物	合	地	35	前 沖 中 通	中	横	古	古代
14	北 沢 通	自然地物	横	室町、近世	36	前 沖 北 通	自然地物	合	地	古地
15	矢 来 通	自然地物	合	地	37	内 子 通	自然地物	合	地	古代
16	矢 J. 上 1 通	自然地物	合	地	38	神 明 通	自然地物	合	地	古代
17	矢 J. 上 2 通	自然地物	合	地	39	神 先 四 通	自然地物	内	横	古地
18	矢 J. 上 3 通	自然地物	合	地	40	J. N. I 通	自然地物	東	横	古地、平安、中世
19	川 保 通	自然地物	合	地	41	J. N. II 通	自然地物	合	地	古地、古代
20	移 伸 五 通	自然地物	合	地	42	城 丸 合 通	自然地物	円	横	古地
21	移 伸 六 通	中	横	古	43	移 伸 六 通	自然地物	合	地	古代
22	下 横 通	中	横	古地～平安						

第1図 進跡の位置と周辺の道跡





跡としては、本遺跡の北北西約3kmにある南小泉遺跡、また北北東約4kmにある中在家南遺跡や西方約5kmの富沢遺跡、北東約3kmにある藤田新田遺跡などが知られている。この中の南小泉遺跡は、霞ノ目飛行場の拡張工事の際に弥生土器が多量に出土したことから広く知られており、富沢遺跡では水田跡が広範囲にわたって層位的に発見されている。また中在家南遺跡では旧河川が発見されており、弥生時代中期の農具をはじめとする木製品が出土している。

古墳時代の遺跡としては、本遺跡の北北西約3kmにある遠見塚古墳があげられる。全長110mの前方後円墳で宮城県で2番目の大きさを誇るものである。この他前述の藤田新田遺跡では竪穴住居跡、方形周溝墓や河川跡が発見されており、河川跡からは日本で初めての古墳時代の木製の鎧が出土している。

本遺跡の北西約3kmには、古墳時代後期の7世紀後半代から奈良時代初頭にかけての大規模な官衙跡が発見された郡山遺跡がある。郡山遺跡で発見された官衙には大きく見て2時期の変遷がみられ、古い方の官衙が確実に7世紀後半代に造営されていることが明らかになっており、このことは東北地方への律令制の浸透を考える上で重要な発見である。この他古代の遺跡としては南小泉遺跡、藤田新田遺跡で竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが発見されている。

中世には掘立柱建物跡や区画溝が発見されている今泉城跡が本遺跡の北東約500mにある。また近世の遺跡としては本遺跡の北西約3kmにある北目城跡が知られている。

### III 調査の方法と経過

今回の調査は、平成2年度の試掘調査および第1次調査を踏まえて実施した仙台南有料道路の建設に係る事前調査である。調査対象地は計画道路路線敷幅にあたる南北約50m、試掘調査で遺跡の範囲とされた東西約150mで、調査面積は約7000m<sup>2</sup>である。調査区はカルバートボックスをはさんで東側の第2次調査区をA区、西側の第3次調査区をB区とした。調査は平成4年度にA区(約2800m<sup>2</sup>)、平成5年度にB区(約4200m<sup>2</sup>)を行った(第2図)。

調査は古代に降下した灰白色火山灰を含む第3層遺構面から精査を行った。調査の結果、水田跡、畑跡、建物跡、土器埋設遺構、遺物包含層や多数の溝跡・土壤を検出した。平面図作成にあたっては仙台市教育委員会によって設置された調査原点(0.0)を基準とした。原点の国家座標はX=-199, 130.00, Y=8, 180.00である。平面図はA区南東部および個々の遺構については1/20、B区では1/40で作成し、その他は1/100で作成した。

## IV 調査の成果

### 1. 層序

調査区内は、B区南西部からA区西半中央部にかけて帯状に低地が延びており、これを除くA・B区の北半部、A区の東半から南東部は微高地になっている。低地には弥生時代の水田が営まれてあり、またA区東半部には弥生時代の遺物包含層が認められた。なお東側の仙台市教育委員会調査区では河川跡が発見されており(第2図)、この河川は本調査区の南側を東流していたと考えられる。

層序は堆積土の良好な低地部を中心として説明する。堆積層は大まかに第1~8層に大別される(第3図②)。

第1層：近世・近代の水田耕作土、床土である。

第2層：中世の水田土壤である。粘質シルトで、色調は黒褐色である。層の厚さは5~10cmである。

第3層：灰白色火山灰(10c前半頃に降下)をブロックで含む層(3-a層)と灰白色火山灰の一次堆積層(3-b層)に細別される。第3-a層は粘質シルト、色調はオリーブ黒色で、水田もしくは畑の土壤である。ほぼ調査区全域に分布しており、層の厚さは4~10cmである。第3-b層は部分的に認められる層である。

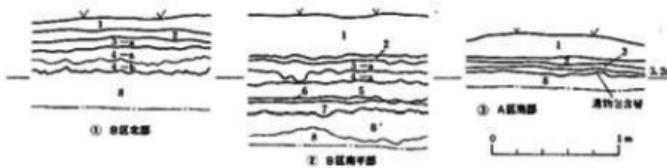
第4層：古代の水田土壤である。粘質シルトで、オリーブ黒色層(4-a層)と黒褐色層(4-b層)に細別される。

第5層：古墳時代の自然堆積層で3層に細分される。第5-a層は黒褐色の粘質シルト、第5-b層は黒色の粘土、第5-c層は黒褐色の粘土である。

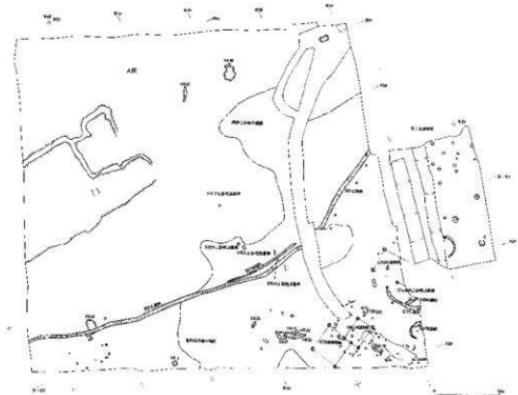
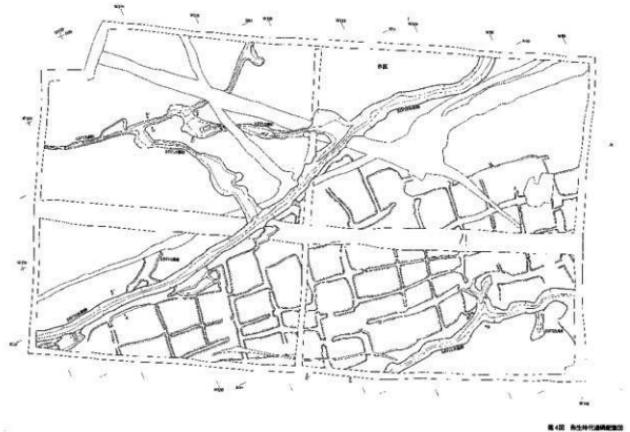
第6層：弥生時代の自然堆積層である。褐色の砂からなり、層は厚いところで4cm前後あるが、部分的にとぎれている。

第7層：弥生時代の水田土壤である。灰色の粘質シルトである。

第8層：灰色の粘土で、弥生時代の地山土である。上層に植物遺体が含まれた層(8'層)



第3図 調査区内の層位柱状図



が認められ、湿地であったと考えられる。

なお、微高地部であるB区北半部では第5~7層、A区東半から南半部では第4~7層が認められない(第3図①③)。

## 2. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代、古代、中世、近世の遺構を検出した。遺構には水田跡、畑跡、建物跡、土器埋設遺構、溝跡、土壤、柱穴、遺物包含層がある。またこれらの遺構などから、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、銅製品、土製品、石器、石製品、古錢、木製品、歯牙製垂飾品などが出土しており、量的には整理用コンテナで70箱程になる。

### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構には、第6層に覆われる水田跡と遺物包含層・土器埋設遺構および遺物包含層下で検出した建物跡・柱穴がある(第4図)。

#### A. 水田跡

水田跡はB区南西部からA区西半中央部にかけて調査区を斜めに横断して帯状に延びる低地部で検出した。水田域は南北約30m 東西約120m以上の範囲に広がり、今回検出した面積はA区で約300 m<sup>2</sup>、B区で約1800 m<sup>2</sup>である。水田跡の北と南には東西方向の溝跡があり、北側は取水路、南側は排水路と考えられる。水田跡の遺存状況は、B区中央部から西側にかけては弥生時代の自然堆積層である第6層に覆われているため良好であるが、B区南東部からA区にかけては古代の水田の耕作が深く及んでいたため悪い。

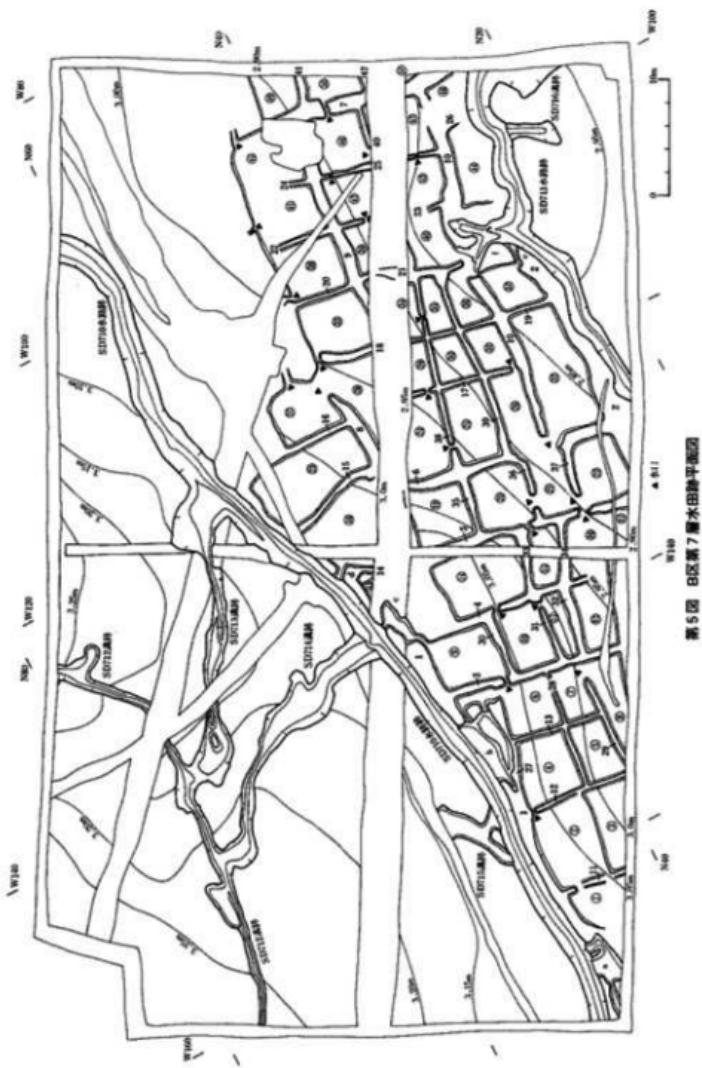
#### [耕作土]

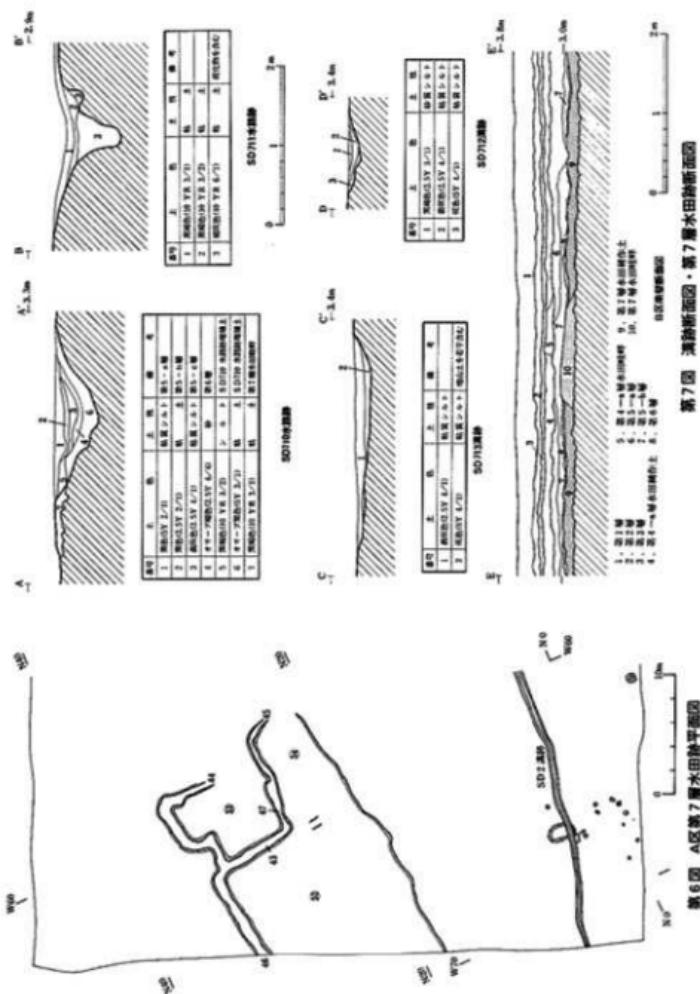
耕作土は灰色の粘質シルトである。第8層の灰色粘土を母体とし、ややグライ化している。耕作土の厚さは遺存状況の良いB区西側で平均10cm前後であるが、B区南東部では薄く残存するにすぎない。また下面には凹凸が見られる。

耕作土中から弥生土器、石器が出土している。弥生土器には鉢(第10図10)、甕(第10図12)がある。10は頸部でくびれるもので、沈線による文様が施され、12は頸部下方に列点文が施される。石器には尖頭器(第32図16)、凹石(第38図1・2)がある。尖頭器の縁辺は摩滅もなく非常にシャープである。

#### [畦畔]

畦畔は47条検出された(第5・6図)。幅の違いから1m前後のものと60cm以下のも





第7図 滴灌带断面図、第7灌水田断面図

のに分けられる（第1表）。前者を大畦畔、後者を小畦畔とする。

大畦畔はNo. 1~10である。このうちNo. 1畦畔はSD710水路跡南辺に、No. 2畦畔はSD711水路跡北辺に沿って作られた東西方向の畦畔で、上端幅は0.8~1.6mである。No. 3~10畦畔の上端幅は0.6~1.0mである。このうちNo. 3~7畦畔はNo. 1・2畦畔にほぼ直交するもので、各畦畔の間隔はNo. 3とNo. 4、No. 4とNo. 5、No. 5とNo. 6の間は約6m、No. 6とNo. 7の間は約33mである。またNo. 8~10畦畔はNo. 1・2畦畔にほぼ平行するもので各畦畔の間隔はNo. 1とNo. 8、No. 9とNo. 10の間は約10m、No. 7とNo. 10の間は約5mである。

小畦畔はNo. 11~47である。上端幅は30~60cmである。このうちNo. 11~26・43~45畦畔はそれぞれの間隔4~6mでNo. 1・2畦畔とほぼ直交し、またNo. 27~42・46・47は間隔3~5mでNo. 1・2畦畔とほぼ平行する。

#### [水田区画]

調査区内では大畦畔によって大きく10区画に分けられる。さらに大区画の中は小畦畔によってさらに区画されており、計54区画の水田跡が確認された（第5・6図・第2表）。このうち平面形、面積が明らかなものは35区画である。平面形はややゆがみはあるが、概ね東西に長い方形を基調としており、長辺と短辺の比率の平均は1.4:1である。また面積は最小9.3m<sup>2</sup>、最大49.5m<sup>2</sup>で、小区画ごとにばらつきがあるものの、15~25m<sup>2</sup>にほぼ集中している（第8図）。平均は22.3m<sup>2</sup>である。

#### [水田面の標高と傾斜]

水田の中で最も標高の高いのは⑨(3.08m)、標高の最も低いのは⑩(2.80m)で、その差は28cmである。全体的には北西から南東に向かって緩やかに傾斜している（第5図）。

#### [水路跡・溝跡]

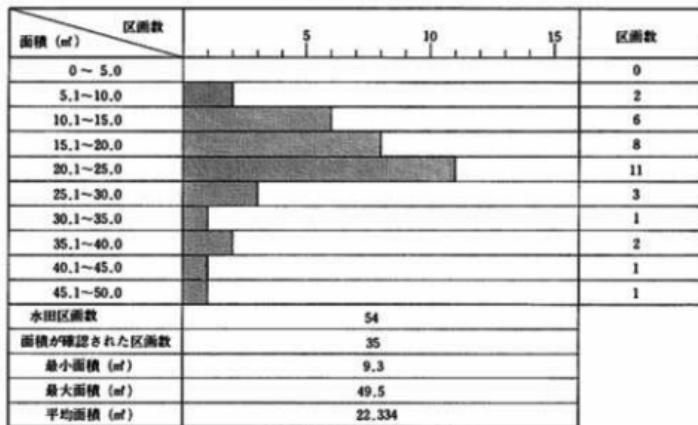
弥生時代の自然堆積層である第6層に覆われる水路および溝跡を7条検出している。SD710・711水路跡は水田に伴う取水・排水の溝跡と考えられる。またSD712~716溝跡はSD710・711水路跡につながる自然流路と考えられる。

【SD710水路跡】水田域の標高の高い北辺に沿って延びる取水のための水路である。上端幅1.5~2.5m、底面幅0.5~0.9m、深さ40~60cmで、約82m検出した。水路跡は蛇行しながらほぼ東西方向に延びる。断面形は壁が緩やかに立ち上がる「U」字形を呈し、堆積土は2層に分かれる（第7図）。また水路底面のレベル差から東に流れる水路であったと考えられる。

堆積土から弥生土器蓋（第10図2・3）、壺（第10図4・8・9）、甕（第10図14）、  
ミニ

総面積	株出長 (m)	上幅 (cm)	方 向	総面積	株出長 (m)	上幅 (cm)	方 向
1	58.0	60~160	E - 3° - N	25	19.5	30~50	N - 15° - E
2	35.0	80~170	E - 1° - N	26	1.1		
3	16.0	60~70	N - 12° - E	27	9.0	40	E - 14° - S
4	16.5	60~80	N - 9° - E	28	18.6	20~30	E - 9° - S
5	18.3	60~120	N - 13° - E	29	8.0	30~40	E - 3° - S
6	18.5	60~110	N - 9° - E	30	5.3	40~60	E - 4° - S
7	17.0	120~150	N - 13° - E	31	5.3	30~50	E - 5° - S
8	15.0	60~90	E - 1° - N	32	5.9	30~70	E - 12° - S
9	13.3	60~100	E - 4° - S	33	4.8	30~90	E - 16° - S
10	31.0	70~110	E - 8° - S	34	4.8	50~80	E - 20° - S
11	5.5	40~50	N - 7° - E	35	4.7	30~60	E - 10° - S
12	8.5	30~40	N - 5° - E	36	5.2	30~40	E - 11° - S
13	7.8	30	N - 10° - E	37	4.4	40~50	E - 13° - S
14	1.1	40		38	26.0	30~50	E - 13° - S
15	7.6	30~50	N - 18° - W	39	16.3	30~50	E - 12° - S
16	5.7	50~60	N - 1° - E	40	2.4	30~40	E - 13° - S
17	8.5	30	N - 13° - E	41	2.5	60	
18	15.5	30~50	N - 14° - E	42	1.3		
19	4.0	30~40	N - 10° - E	43	9.0	30~70	N - 10° - W
20	5.4	30~40	N - 6° - E	44	4.3	50~60	南 北
21	8.7	30~60	N - 20° - E	45	2.9	40~50	
22	5.4	30~50	N - 8° - E	46	16.0	60~80	E - 10° - N
23	8.8	30	N - 15° - E	47	8.0	60~80	東 西
24	5.5	30					

第1表 越畠計測表



第6図 水田区画面積分布図

水田 番号	形 状	面積 (a)	長辺 (m)		短辺 (m)		水田の標高 (m)
			長 大	長 小	短 大	短 小	
1	-	(15.02上)	(5.3)	-	(3.9)	2.8	3.07
2	長方形	33.6	7.4	7.2	4.5	4.0	3.05
3	-	(18.02上)	7.4	-	(3.7)	-	3.01
4	長方形	24.3	5.9	5.1	5.0	4.4	3.03
5	長方形	17.8	5.3	-	3.8	(3.2)	3.00
6	正方形	21.6	4.8	-	4.6	4.4	3.04
7	長方形	12.5	4.7	-	2.8	2.5	3.00
8	-	(15.2)	(8.7)	-	3.4	-	2.98
9	長方形	24.4	5.6	-	5.2	4.5	3.08
10	長方形	19.8	5.7	5.5	3.7	3.6	3.03
11	長方形	9.3	6.0	5.8	1.8	1.4	3.00
12	長方形	18.2	5.9	-	3.5	3.9	2.97
13	-	(2.3)	(1.8 以下上)	-	(1.5 以上)	-	3.05
14	台 形	36.7	7.7	6.4	5.2	5.0	3.04
15	長方形	12.8	5.2	5.1	2.5	2.0	2.97
16	長方形	17.9	5.1	4.9	3.5	3.4	2.91
17	-	-	-	-	(1.5 以上)	-	2.90
18	不整形	(40.2)	(7.6)	-	(7.4)	(4.4)	3.04
19	正方形	24.5	5.4	4.7	5.1	4.9	3.03
20	正方形	26.8	5.1	4.9	4.8	4.5	2.95
21	長方形	17.6	5.6	5.4	3.2	-	2.95
22	台 形	22.5	5.3	(5.0)	(4.6)	3.7	2.88
23	不整形	43.7	10.0	8.5	5.2	3.8	3.01
24	台 形	39.3	(7.0)	(5.1)	6.8	(6.9)	2.96
25	長方形	23.8	6.9	6.8	3.6	3.5	2.91
26	長方形	19.8	6.7	(6.4)	3.0	2.9	2.88
27	台 形	23.3	5.6	4.4	4.6	3.9	2.98
28	-	(13.2以上)	(4.9)	-	(4.0 以下上)	-	2.95
29	-	(7.0 以下上)	4.2	-	(2.0 以下上)	-	2.93
30	台 形	11.9	4.2	4.1	3.4	2.4	2.90
31	長方形	10.8	4.1	4.0	2.9	2.8	2.87
32	長方形	49.5	11.1	(11.0)	(5.0)	4.6	2.85
33	長方形	26.3	(6.1)	5.2	(5.3)	4.3	2.94
34	不整形	18.7	(5.0)	4.8	4.3	-	2.90
35	台 形	9.5	5.0	-	2.4	1.4	2.87
36	台 形	11.5	5.0	4.9	2.9	1.5	2.85
37	台 形	14.4	4.1	4.0	3.9	3.3	2.82
38	長方形	25.6	5.9	5.0	4.8	4.7	2.93
39	-	(7.0 以下上)	4.4	-	(2.5 以下上)	-	2.90
40	台 形	16.2	5.1	(4.5)	4.0	(3.6)	2.83
41	台 形	25.3	5.8	5.7	(5.1)	4.1	2.92
42	-	(13.7)	(4.9 以下上)	-	4.1	-	2.90
43	-	(16.102上)	3.8	-	(3.0 以下上)	-	2.84
44	-	(12.052上)	6.5	-	(2.7 以下上)	-	2.82
45	長方形	22.0	5.5	-	(4.5)	-	2.92
46	長方形	22.1	5.0	4.9	4.5	-	2.88
47	台 形	24.8	(5.2)	4.7	5.1	5.0	2.81
48	-	(7.5)	(3.0)	-	(3.0)	-	2.80
49	-	(11.582上)	(4.6 以下上)	-	3.5	-	2.90
50	-	(5.0 以下上)	5.0	-	-	-	2.88
51	-	-	-	-	12.8	-	2.82
52	-	137.862上	(14.052上)	-	12.8	-	2.87
53	不整形	(41.8)	8.1	-	6.3	-	2.94
54	長方形	(42.7)	8.5	8.0	5.8	4.5	2.90

第2表 水田区画計測表

チュア土器（第10図7）が出土している。2は天井部が平坦で、L R縄文が施される。3は台状のつまみ部を持ち、植物茎回転文が施される。4は沈線でメガネ状に区画した文様が施される。14は頸部下方に列点文が施され、地文は付加条縄文（L R + R）である。また水路底面から石包丁（第35図2）の完形品が出土している。

【SD711 水路跡】水田域の標高の低い南辺に沿って延びる排水のための水路である。上端幅1.2~2.0m 底面幅0.2~0.6m 深さ0.6~1.0mで、約30m検出した。水路跡は蛇行しながら東西方向に延び、B区東端で南に曲がる。断面形は「U」字形であるが、部分的に「V」字形を呈する。堆積土は3層に分かれ（第7図）。また水路底面のレベル差から東に流れる水路であったと考えられる。

堆積土から弥生土器蓋（第10図1）が出土している。口縁部に平行沈線が施される。【SD712・713・714・715・716溝跡】SD710水路跡以北およびSD711水路跡以南で検出した溝跡である。これらはSD710・711水路跡に流れ込む自然流路と考えられる。上端幅はSD712溝跡が0.5~1.0m SD713溝跡が1.0~2.8m SD714溝跡が0.8~4.0m SD715溝跡が1.0~2.0m SD716溝跡が1.2m前後と一定していない。深さはいずれも20cm程度であるが、溝の合流点付近は土壤状にくぼんでいる。堆積土はいずれも2~3層に分かれ（第7図）。

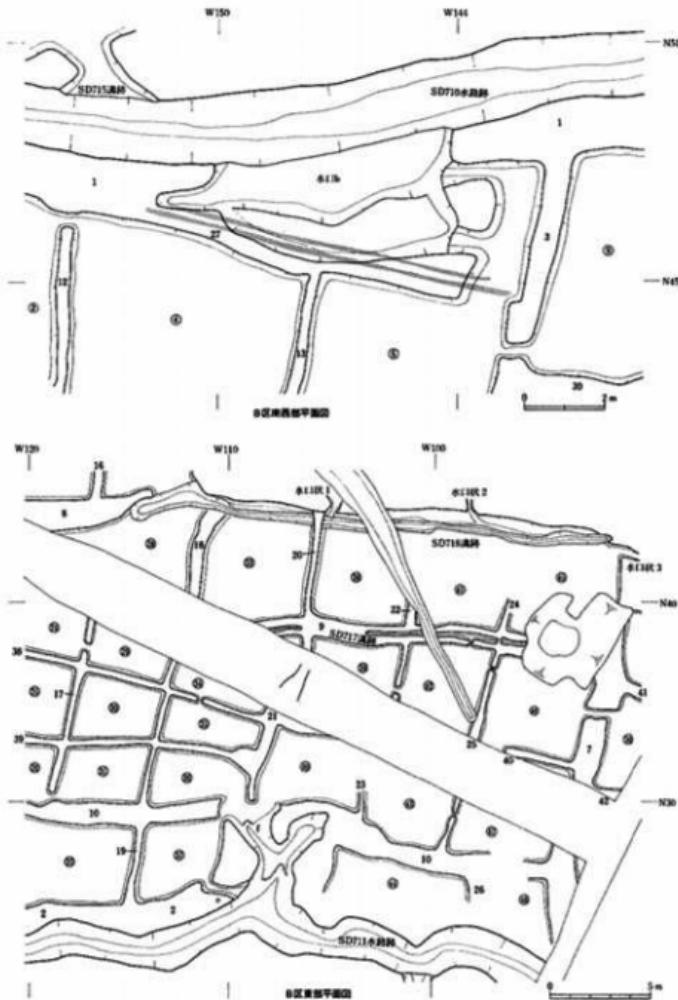
SD712溝跡堆積土から弥生土器甕（第10図11）、SD714溝跡堆積土から弥生土器鉢（第10図6）、SD712溝跡とSD714溝跡の合流点の堆積土から弥生土器鉢もしくは甕（第10図5）、甕（第10図13）が出土している。6は頸部でくびれるもので、口縁部に三条の平行沈線、体部上半に沈線による文様が施される。13は頸部下方に列点文が施され、地文は植物茎回転文である。11は口縁部下方に平行沈線が施される。

#### [水口]

畦畔が途中で途切れている部分で、水口と認定できたものは24ヶ所である。これらのうち水路から水田に取り付くように作られた水口は6ヶ所（a~f）で、その他は隣接する水田間に付設されたものである。

SD710水路跡沿いに検出された水口は4ヶ所（a~d）で、水田面の傾斜からみて取水機能をもつと考えられる。いずれも水路底面から30~40cm高い位置にあり、また水口底面は水田面につながる。

それぞれの水口について見ると、水口aは上端幅3.6mで、二股状に水路に取り付き、調査区外に延びている。水口bは上端幅6mで水路に取り付き、他の水口よりも規模が大きいものである（第9図上）。東側に上端幅1.1mの溝があり、溝底面と水田面がつながる。なお、No.27畦畔に平行する上端幅10cm程の小溝を、2条平行して検出した。これらは



第9図 B区第7層水田跡部分図



No.	出土位置・標記	種別	断面・外観	直通幅	DIA (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	参考図
1. 8B2-5-D121	排水管	管	1	15.0	—	5.5	10.5	1-2
2. 8B2-5-D128	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-3
3. 8B2-5-D129	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-4
4. 8B2-5-D130	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-5
5. 8B2-5-D131	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-6
6. 8B2-5-D122-T24	排水管	管	3	—	—	3.2	10.5	2-7
7. 8B2-5-D124	排水管	管	3	—	—	4.2	10.5	2-8
8. 8B2-5-D126	—	管	2	19.0×18.0	15.0	—	—	2-9
9. 8B2-5-D128	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-10
10. 8B2-5-D129	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-11
11. 8B2-5-D130	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-12
12. 8B2-5-D131	—	管	2	19.0×18.0	—	—	—	2-13
13. 8B2-5-D122-T24	排水管	管	3	—	—	15.0	10.5	2-14
14. 8B2-5-D124	排水管	管	3	—	—	15.0	10.5	2-15

第10図 第7層水田跡・溝跡出土遺物

No. 27 畦畔及び水口 b の堆積土を切っている小溝で、堆積土は第 6 層の砂である。水口に付随する施設の可能性が考えられるが、性格は不明である。また水口 c は上端幅 60cm、水口 d は上端幅 1m で水路に取り付いている。いずれの水口の付近にも、堰などの遺構は確認されなかった。

S D711 水路跡沿いに検出された水口は 2 ヶ所 (e・f) で、水田面の傾斜からみて排水機能をもつと考えられる (第 9 図下)。水口 e は上端幅 1.4m、水口 f は上端幅 2m 前後である。水口部分の水路の底面は土壤状に深くなっている、水田からの排水によってえぐられたものと考えられる。また水口 f の東側に張り出しが認められる。この部分は古代の水田の耕作のため削平されているが、水田 40 に伴う水口の可能性が考えられる。

隣接する水田間で検出した水口は 18 ヶ所である。水田区画の一辺の中央付近に作られるものとコーナー付近に作られるものがあり、位置的な規則制は見られない。一方大畦畔に作られた水口は上端幅 0.5 ~ 1.0m、小畦畔に作られた水口は上端幅 0.3 ~ 0.5m と、大畦畔と小畦畔では水口の規模に違いが見られる。

ところで、B 区東部の水田跡北辺で水口状の小溝 (1・2・3) が検出された (第 9 図下)。上端幅 0.4 ~ 0.6m、長さ 1m 程度で、水田に向かって傾斜していることから、取水のための施設の可能性が考えられる。

#### [ その他の遺構 ]

【 S D717 溝跡】No. 9 畦畔の中央に、上端幅 20cm、深さ 3cm 程度の小溝が検出された (第 9 図下)。部分的に途切れ、水田面ともつながっている。堆積土は第 6 層の砂である。畦畔に伴う何らかの施設と考えられるが、性格は不明である。

【 S D718 溝跡】水田 28 から水田 45 の北辺に沿って東西方向に延びる溝状の落ち込みが水田底面で検出された (第 9 図下)。上端幅 60 ~ 90cm、深さ 5cm 程度である。これは北側に盛土するための土を掘り上げた痕跡と考えられる。

#### B . 建物跡・柱穴

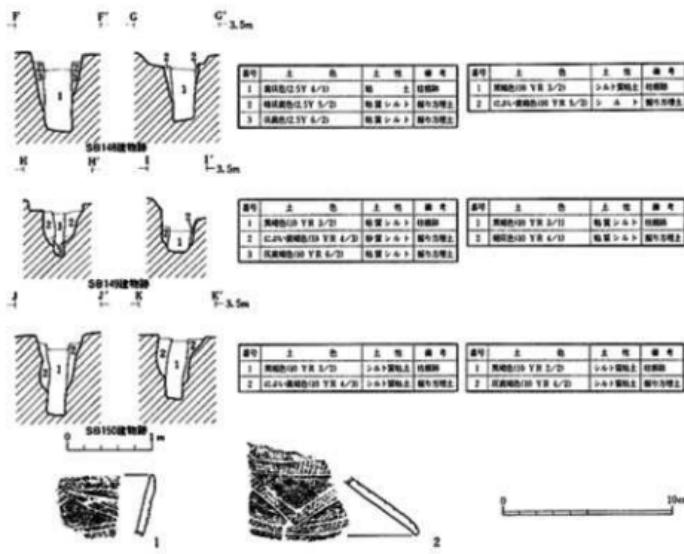
A 区南半部の微高地部で多数の柱穴を検出している。これらの柱穴群は第 1 次調査区でも検出されていることから、調査区のさらに東側にも広がるものと考えられる。確認できた建物跡は 3 棟で (第 11 図)、このうち 2 棟は東西 1 間、南北 1 間の建物跡である。なお、柱穴の大部分は弥生時代の遺物包含層に覆われる。

【 S B148 建物跡】柱穴は一辺が 40 ~ 60 cm の隅丸方形を呈し、柱痕跡は径 25 ~ 30cm の円形である。断面形は底面付近でせばまついて、深さは 80 ~ 90cm である (第 12 図)。柱間寸法は、北側柱列で約 4.4m、西側柱列で約 4.2m である。建物の方向は北側柱列で E

- 約 28° - N である。弥生土器蓋（第 12 図 1）が出土している。

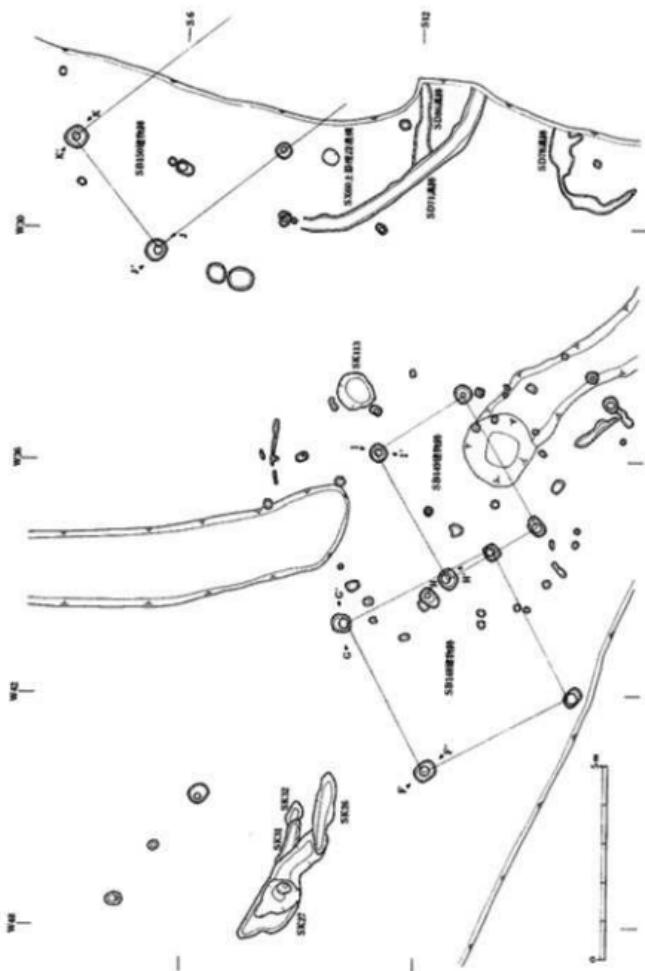
【SB149 建物跡】柱穴は一辺が 30~50cm の隅丸方形を基調とし、柱痕跡は径 15~30cm の円形である。断面形は底面付近でせばまつていて、深さは 50~70cm である（第 12 図）。柱間寸法は、北側柱列で約 3.8m、西側柱列で約 2.7m である。建物の方向は北側柱列で E- 約 30° - N である。なお南東隅の柱は切り取られている。弥生土器鉢（第 12 図 2）、石錐（第 32 図 19）が出土している。

【SB150 建物跡】東西 1 間、南北 1 間以上の建物跡で、調査区外に延びている。柱穴は一辺が 40~60cm の隅丸方形を呈し、柱痕跡は径 20cm 前後の円形である。断面形は底面付近でせばまつていて、深さは 60~90cm である（第 12 図）。柱間寸法は、北側柱列で約 3.6m、西側柱列で 4.1m 以上である。建物の方向は北側柱列で E- 約 38° - N である。弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。



第11図 SB148・149・150建物跡断面図・出土遺物

图120 A区南断面平面图



### C. 土器埋設遺構

A区の微高地部で土器埋設遺構を5基検出している。いずれの土器埋設遺構も上半部は後世の削平によって壊されている。

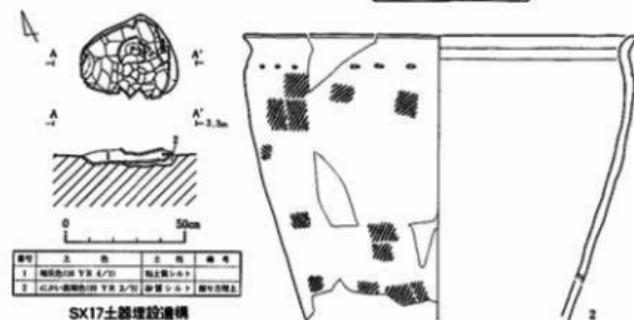
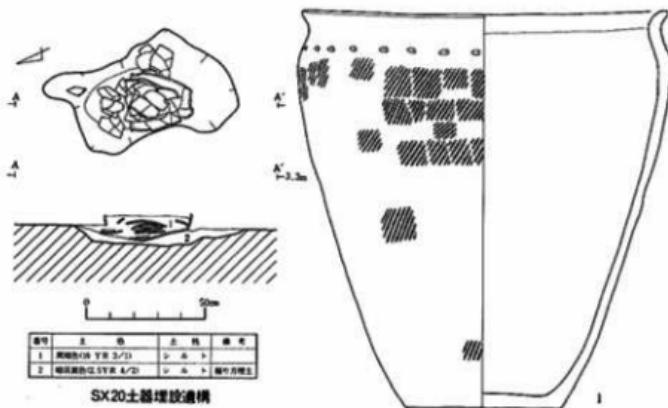
【S X17 土器埋設遺構】調査区中央部に位置する。掘り方は長径42cm 短径35cmの楕円形で、深さは7cm程残存している（第13図）。やや大きな甕にこぶりの甕を入れ込んで、横位に据えている。内側の甕（第13図4）はLR縄文が施される。また底部は焼成後穿孔されている。

【S X19 土器埋設遺構】調査区中央部に位置する。掘り方は径30cmの円形で、深さは14cm程残存している（第14図）。甕を正位に据えている。甕（第14図4）はLR縄文が施される。

【S X20 土器埋設遺構】調査区中央部に位置する。掘り方は長径80cm 短径34cmの不整形で、深さは9cm程残存している（第13図）。やや大きな甕にこぶりの甕を入れ込んで（第13図1が外側、2が内側）、横位に据えている。他に壺（第13図3）が出土している。甕は頸部下方に列点文が施され、LR縄文が施される。壺は口縁部が緩やかに外反し頸部に3条の平行沈線が施される。

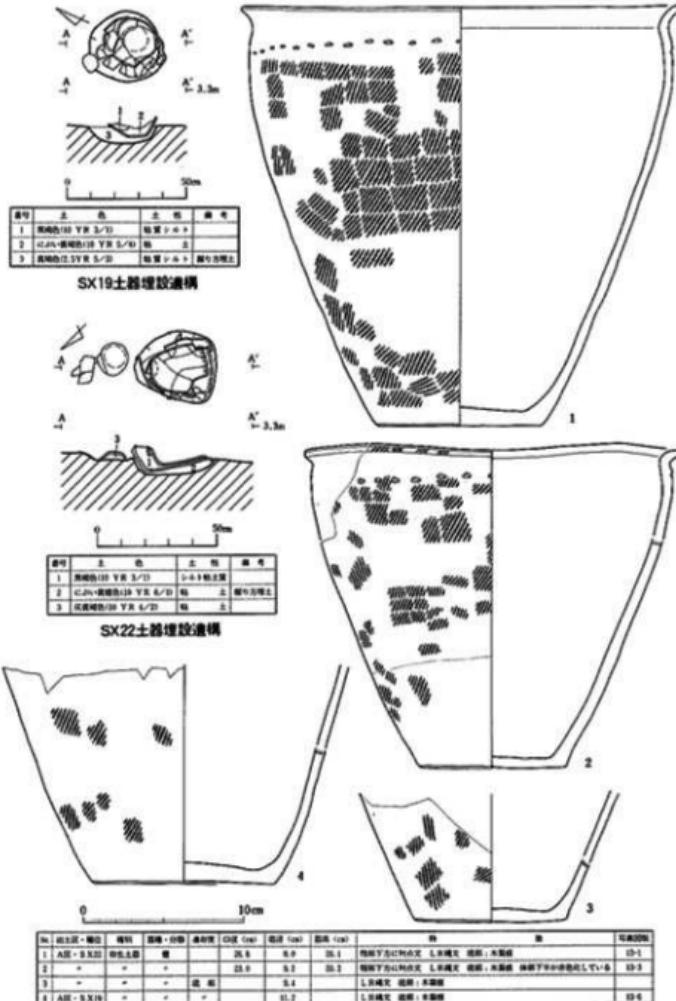
【S X22 土器埋設遺構】調査区中央部に位置する。掘り方は長径34cm 短径28cmの楕円形で、深さは10cm程残存している（第14図）。やや大きな甕にこぶりの甕を入れ込んで（第14図1が外側、2が内側）、横位に据えている。またS X22 土器埋設遺構の北側で甕（第14図3）の下半部が出土している。甕はいずれも頸部下方に列点文が施され、LR縄文が施される。

【S X60 土器埋設遺構】調査区南東部に位置する。小ピットと切り合っており、それよりも新しい。掘り方は長径45cm 短径36cmの楕円形で、深さは28cm程残存している（第15図）。甕（第15図1）と壺（第15図2）が出土している。壺を横位に据えており、その下方から出土した甕などは掘り方に投げこまれたものと考えられる。甕は頸部下方に列点文が施され、甕・壺とも植物茎回転文が施される。

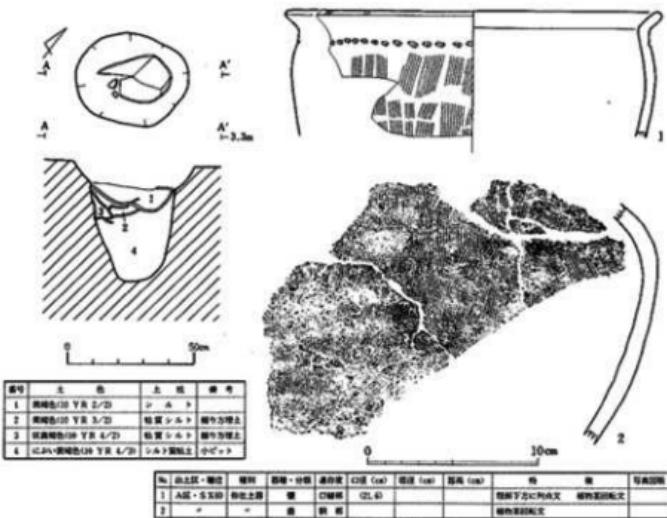


No.	目次	層	断面	層厚 (mm)	通積 (mm)	口径 (mm)	底高 (mm)	特	備	年表回数
1	AEE-SX20	褐色土	横	22.5	9.0	26.9		埋設下に陶片瓦、上部織文	L. 織文瓦	13-2
2	"	"	"	21.2						13-4
3	"	"	横	15.0				埋設下に陶片瓦	L. 織文瓦	13-5
4	AEE-SX17	"	横	10.0	7.0			上部織文、底部小字乳頭	0.5cm CT-10	追加・未標

第13図 SX17・SX20土器埋設遺構



第14回 SX19・SX22土器埋設遺構



第15図 SX60土器埋設遺構

#### D. 遺物包含層

A区東半部の微高地部で弥生時代の遺物包含層を検出している。遺物包含層は第8層上面に形成され、水田域までは延びない。東西約37m 南北約46mの範囲で検出されたが、A区東側の第1次調査区および仙台市教育委員会で実施した調査区においても分布が確認されており、広範囲に広がるものである。層は炭化物や焼土を若干含む黒褐色のシルトからなり、層厚は5~15cmであるが層の細分はできなかった。上部は後世の削平を受けている。

##### [遺物包含層出土遺物]

遺物包含層からは多量の弥生土器をはじめ、土製品、石器、管玉、歯牙製垂飾品が出土している。量的には整理用平箱で50箱程である。以下、各種類ごとに説明する。

##### 1. 土器

弥生土器の他に縄文土器が僅かに出土している(第30図5・6)。弥生土器には鉢・大形鉢・高環・蓋・大形蓋・壺・大形壺・甕・ミニチュア土器がある。完形品は少なく、また全体的に摩滅、剥落が著しい。量的には甕・壺、次いで鉢が多く、蓋・高環は少ない。

〔鉢〕(第16~18図1~51)

鉢は形態的に大きく二種類見られる。

1~5・7は底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外傾もしくは内湾するものである。口径は14cm前後で、口径と器高がほぼ同じもの(1~5)と器高が口径よりも大きく、筒状を呈するもの(7)がある。口縁部形態は平口縁である。6~8~29は底部から体部もしくは体部から口縁部にかけての破片資料で、1~5・7と同じ形態と考えられる。底部は確認できたものはいずれも平底である。

30~58は頸部でくびれるもので、口縁部はやや内湾もしくは直立気味に立ち上がるものである。口径が10cm未満のもの(37・38)と15cm前後のもの(30・39・40・42~44・48)がある。口縁部形態は平口縁が多いが、波状口縁(48)も見られる。底部から口縁部まで復元できたものはない。

体部外面上半には沈線による文様が施される。これらには沈線間に縄文または植物茎回転文が施されるもの(1~6~9・15~24・30~36)がある。また体部下半には縄文または植物茎回転文が施されるものが多い。

また口縁部内面に沈線が施されるものがあり、一条のもの(1~2~5~6~16~19~23~25~27~30~35~37~38~41~42~47~50)と二条のもの(20~22)がある。口縁部附近に穿孔をもつものがあり、2個一対のもの(1~19)と1個のもの(6~17)がある。

〔大形鉢〕(第18図52~58)

頸部でくびれるもので、推定で口径が25cmを越えるものである。52~56は平行沈線間に縄文または植物茎回転文が施されるものである。57は沈線で方形に区画し、沈線間にL R縄文が施されるものである。58は植物茎回転文が施される。

〔高壺〕(第19図)

壺部と脚部の全容がわかるものは2点である。1は脚部が直線的に立ち上がり、壺部が浅く、皿状を呈するものである。体部外面の文様は沈線を波状に施したものである。2は脚部が直線的に立ち上がり、壺部が深く、椀状を呈するものである。体部外面は沈線による文様が施される。

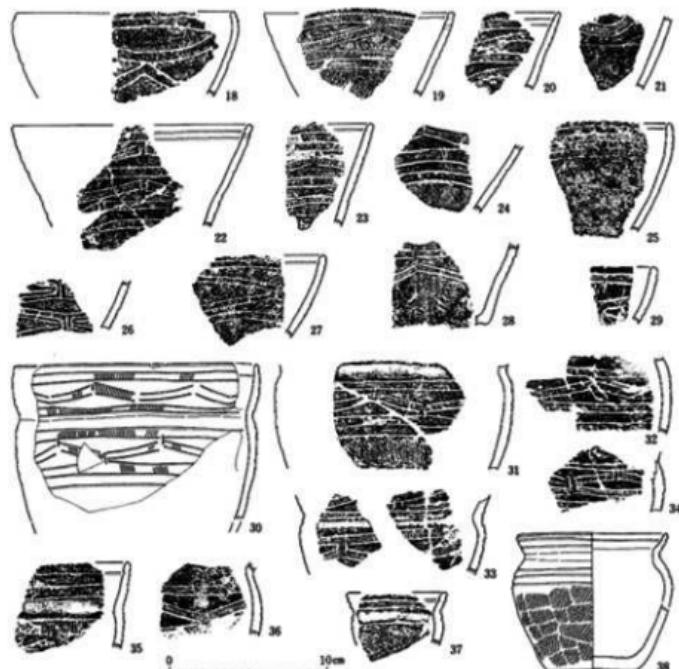
3~9は壺部の破片資料で、10~18は脚部の破片資料である。壺部の口縁部形態は平口縁で、突起をもつもの(4~5~7~9)、口縁端に刻目が入るもの(8)がある。脚部は直線的に立ち上がるものが多く、内湾するもの(17)や外反するもの(16)も見られる。

体部外面には沈線による文様が施される。これらには沈線間に縄文または植物茎回転文が施されるもの(4~15)がある。また口縁部内面に沈線が施されるものがあり、一条のもの(5~7~9)と、二条のもの(3~4~6)がある。また脚部内面に沈線が施されるものもある



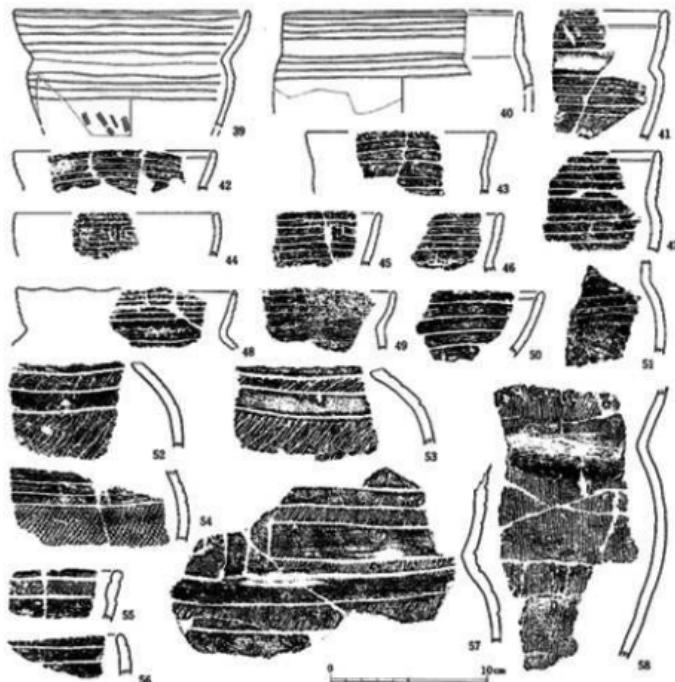
号	出土地・層位	種類	断面・分類	高さ(㎜)	口径(㎜)	底径(㎜)	基底(㎜)	形	写真番号
1	AIE-新井1号館 西壁上部	碗	断1(口)	13.5	-	-	-	支脚: A型 L: 斜曳文 内底: C-1条波綺 口縁: F型(内)1脚+外1脚	14-1
2	"	"	"	13.2	5.0	5.0	-	支脚: F型 L: 斜曳文 内底: C-1条波綺 通身: 木葉紋	14-2
3	"	"	"	16.4	4.9	4.9	-	支脚: F型 底部: 木葉紋	14-3
4	"	"	"	13.7	6.0	5.7	-	支脚: A型 L: 斜曳文	14-4
5	"	"	"	12.0	-	-	-	支脚: A型 L: 斜曳文 内底: C-1条波綺	14-5
6	"	"	"	13.0	-	-	-	支脚: A型 L: 斜曳文 内底: C-1条波綺 口縁: F型(内)1脚+外1脚	14-6
7	"	"	"	15.9	5.4	21.5	-	支脚: A型 L: 斜曳文 通身: 木葉紋	14-7
8	"	"	断1(口 碗)	13.0	-	-	-	支脚: C型 L: 斜曳文	14-8
9	"	"	"	-	-	-	-	支脚: D型 L: 斜曳文 通身: 木葉紋	14-9
10	"	"	"	14.2	-	-	-	支脚: D型 L: 斜曳文	14-10
11	"	"	"	16.0	-	-	-	支脚: F型(内)1脚+外1脚 木葉紋	14-11
12	"	"	"	6.7	-	-	-	底脚: C-1条波綺 木葉紋	14-12
13	"	"	"	16.40	-	-	-	底脚: C-1条波綺 L: 斜曳文	14-13
14	"	"	"	15.30	-	-	-	底脚: C-1条波綺	14-14
15	"	碗	断2(口 碗)	13.0	-	-	-	支脚: A型 L: 斜曳文	14-15
16	"	"	"	-	-	-	-	支脚: A型 L: 斜曳文 内底: C-1条波綺	14-16
17	"	"	"	-	-	-	-	支脚: A型 壁脚: 斜曳文(内)1脚+外1脚	14-17

第16-2 遺物包含層出土・弥生土器(鉢)



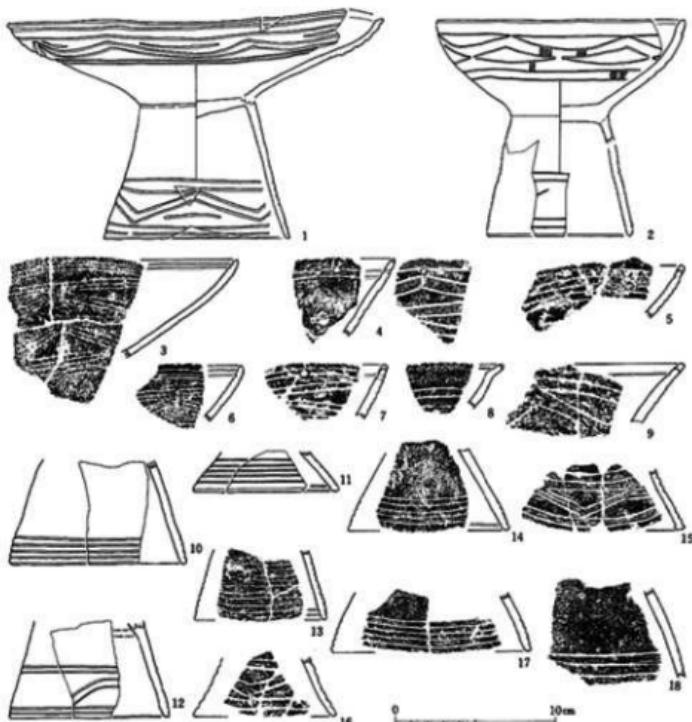
No.	出土地・標的	部位	断面・構造	測定値	測定値	測定値	形	参考文献
18	AB区・遺物包含層	斜面土器	斜面	1	口縁部	10.0	18-9	18-9
19	-	-	-	-	-	10.4	18-10	18-10
20	-	-	-	-	-	-	18-11	18-11
21	-	-	-	-	-	-	18-12	18-12
22	-	-	-	-	-	-	18-13	18-13
23	-	-	-	-	-	-	18-14	18-14
24	-	-	-	-	-	-	18-15	18-15
25	-	-	-	-	-	-	18-16	18-16
26	-	-	-	-	-	-	18-17	18-17
27	-	-	-	-	-	-	18-18	18-18
28	-	-	-	-	-	-	18-19	18-19
29	-	-	-	-	-	-	18-20	18-20
30	-	-	-	-	-	-	18-21	18-21
31	-	-	-	-	-	-	18-22	18-22
32	-	-	-	-	-	-	18-23	18-23
33	-	-	-	-	-	-	18-24	18-24
34	-	-	-	-	-	-	18-25	18-25
35	-	-	-	-	-	-	18-26	18-26
36	-	-	-	-	-	-	18-27	18-27
37	-	-	-	-	-	-	18-28	18-28
38	-	-	-	-	-	-	18-29	18-29
39	-	-	-	-	-	-	18-30	18-30
40	-	-	-	-	-	-	18-31	18-31
41	-	-	-	-	-	-	18-32	18-32
42	-	-	-	-	-	-	18-33	18-33
43	-	-	-	-	-	-	18-34	18-34
44	-	-	-	-	-	-	18-35	18-35
45	-	-	-	-	-	-	18-36	18-36
46	-	-	-	-	-	-	18-37	18-37
47	-	-	-	-	-	-	18-38	18-38
48	-	-	-	-	-	-	18-39	18-39
49	-	-	-	-	-	-	18-40	18-40
50	-	-	-	-	-	-	18-41	18-41
51	-	-	-	-	-	-	18-42	18-42
52	-	-	-	-	-	-	18-43	18-43
53	-	-	-	-	-	-	18-44	18-44
54	-	-	-	-	-	-	18-45	18-45
55	-	-	-	-	-	-	18-46	18-46
56	-	-	-	-	-	-	18-47	18-47
57	-	-	-	-	-	-	18-48	18-48
58	-	-	-	-	-	-	18-49	18-49
59	-	-	-	-	-	-	18-50	18-50

第17図 遺物包含層出土・朱生土器(鉢)



层位(层)	部位	形制	时代	通量	GSI (cm)	厚度 (cm)	基面 (cm)	号	号数
AII-3-青釉出筋	胎身土面	碗	II	口沿出筋	11.7			1	1-1
-	-	-	-	-	-	-	-	2	1-2
-	-	-	-	-	-	-	-	3	1-3
-	-	-	-	-	-	-	-	4	1-4
-	-	口沿	II	口沿出筋	11.6			5	1-5
-	-	-	-	-	-	-	-	6	1-6
-	-	-	-	-	-	-	-	7	1-7
-	-	-	-	-	-	-	-	8	1-8
-	-	-	-	-	-	-	-	9	1-9
-	-	-	-	-	-	-	-	10	1-10
-	-	-	-	-	-	-	-	11	1-11
-	-	-	-	-	-	-	-	12	1-12
-	-	-	-	-	-	-	-	13	1-13
-	-	-	-	-	-	-	-	14	1-14
-	-	-	-	-	-	-	-	15	1-15
-	-	-	-	-	-	-	-	16	1-16
-	-	-	-	-	-	-	-	17	1-17
-	-	-	-	-	-	-	-	18	1-18
-	-	-	-	-	-	-	-	19	1-19
-	-	-	-	-	-	-	-	20	1-20
-	-	-	-	-	-	-	-	21	1-21
-	-	-	-	-	-	-	-	22	1-22
-	-	-	-	-	-	-	-	23	1-23
-	-	-	-	-	-	-	-	24	1-24
-	-	-	-	-	-	-	-	25	1-25
-	-	-	-	-	-	-	-	26	1-26
-	-	-	-	-	-	-	-	27	1-27
-	-	口沿	II	口沿出筋	11.5			28	1-28
-	-	-	-	-	-	-	-	29	1-29
-	-	-	-	-	-	-	-	30	1-30
-	-	-	-	-	-	-	-	31	1-31
-	-	-	-	-	-	-	-	32	1-32
-	-	-	-	-	-	-	-	33	1-33
-	-	-	-	-	-	-	-	34	1-34
-	-	-	-	-	-	-	-	35	1-35
-	-	-	-	-	-	-	-	36	1-36
-	-	-	-	-	-	-	-	37	1-37
-	-	-	-	-	-	-	-	38	1-38
-	-	-	-	-	-	-	-	39	1-39
-	-	-	-	-	-	-	-	40	1-40
-	-	-	-	-	-	-	-	41	1-41
-	-	-	-	-	-	-	-	42	1-42
-	-	-	-	-	-	-	-	43	1-43
-	-	-	-	-	-	-	-	44	1-44
-	-	-	-	-	-	-	-	45	1-45
-	-	-	-	-	-	-	-	46	1-46
-	-	-	-	-	-	-	-	47	1-47
-	-	-	-	-	-	-	-	48	1-48
-	-	-	-	-	-	-	-	49	1-49
-	-	-	-	-	-	-	-	50	1-50
-	-	-	-	-	-	-	-	51	1-51
-	-	-	-	-	-	-	-	52	1-52
-	-	-	-	-	-	-	-	53	1-53
-	-	-	-	-	-	-	-	54	1-54
-	-	-	-	-	-	-	-	55	1-55
-	-	-	-	-	-	-	-	56	1-56
-	-	-	-	-	-	-	-	57	1-57
-	-	-	-	-	-	-	-	58	1-58

第18回 遺物包含層出土・弥生土器(鉢・大形鉢)



No.	出土品・種類	埋付	出発	遺物名	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	性	年代範囲
1	A式・輪形口沿器	中等	高	高	23.5	11.4	18.3	実物: 口沿	9-3
2	+	+	-	-	15.2	(8.8)	15.5	実物: A式 唇 L式底足	9-4
3	+	+	-	絆 縦	23.0	-	-	実物: 手縫 内面に二条平行凹線	12-1
4	+	+	-	-	11.0	-	-	実物: 手縫 L式底足 内面に二条平行凹線 小突起をもつ 手縫の跡	12-2
5	+	+	-	-	13.0	-	-	実物: 手縫 内面に二条平行凹線	12-2
6	+	+	-	-	-	-	-	実物: 手縫 内面に二条平行凹線	12-4
7	+	+	-	-	-	-	-	底部以上を破損 内面に一筋底足 小突起をもつ (縫合跡付)の穿孔	12-5
8	+	+	-	-	-	-	-	実物: 手縫 内面に一筋底足 (縫合跡付)の穿孔	12-6
9	+	+	-	-	-	-	-	実物: A式 唇 内面に一筋底足 小突起をもつ	12-6
10	+	+	-	-	-	-	-	実物: 手縫	12-12
11	+	+	-	-	-	-	-	実物: 手縫 内面に一筋底足	12-6
12	+	+	-	-	-	-	-	底部以上を破損	12-16
13	+	+	-	-	-	-	-	実物: 手縫 内面に二条平行凹線	12-16
14	+	+	-	-	-	-	-	23.0: 手縫 内面に一筋底足	12-12
15	+	+	-	-	-	-	-	23.0: 手縫 L式底足	12-12
16	+	+	-	-	-	-	-	23.0: A式 唇	12-12
17	+	+	-	-	-	-	-	23.0: A式	12-14
18	+	+	-	-	-	-	-	23.0: 手縫	12-14
19	+	+	-	-	-	-	-	実物: 手縫	12-14

第19回 遺物包含層出土・弥生土器(高环)

り、一条のもの（11・14）と二条のもの（13）がある。

〔蓋〕（第20・21図1～25）

つまみ部の形態に台状のものと天井部が平坦になるものの二種類が見られる。

1～11は台状のつまみ部をもつものである。7はつまみ部が比較的短いものである。

体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開くもの（2・4）と、外反気味に開くもの（1・3）がある。口径は10～15cmである。

12～15は天井部が平坦で、体部が強く屈曲するものである。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開くもの（13）と、内湾気味に開くもの（12）がある。

16～25は体部から口縁部にかけての破片資料で、つまみ部の形態は不明である。口縁部はほぼ直線的に開くもの（17・19・24）、内湾気味に開くもの（16・18・22・23）、外反気味に開くもの（20・21・25）がある。復元口径は10～15cmである。

体部外面は地文のみのもの（25）、沈線による文様が施されるものがある。文様には沈線間に繩文または植物茎回転文が施されるもの（16～20・22～24）がある。また口縁部内面に沈線が施されるものがあり、一条のもの（16～18）と、二条のもの（19・20）がある。

〔大形蓋〕（第21図26～34）

口径が20cm前後のもので、つまみ部の形態は不明である。口縁部はほぼ直線的に開くもの（26・27・32・33）、内湾気味に開くもの（28・34）、外反気味に開くもの（29～31）がある。

体部外面は地文のみのもの（28～32）、ミガキ調整のもの（33）、沈線による文様が施されるもの（26・27・34）がある。文様には沈線間に繩文が施されるもの（26・27）がある。また口縁部内面に沈線が施されるものがあり、一条のもの（27）、二条のもの（34）がある。

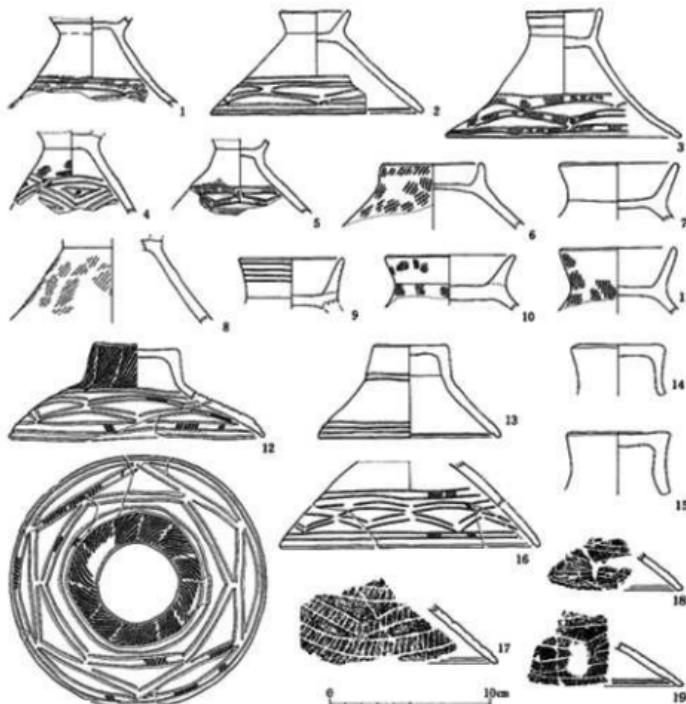
〔壺〕（第22～25図1～47）

1～4は頸部が直立し、口縁部が外反するものである。胴部から頸部にかけて強く屈曲する。口径は12～14cm前後である。1・2・4は口縁部下方に突帯がめぐり、3は頸部に突帯がめぐる。胴部外面には、1は付加条繩文（L R + R）、3はL R繩文が施される。また2の口縁端部にはL R繩文が施される。

5～9・12～14は口縁部が外反気味に開くものである。5・7・9は頸部が長いものである。口径の大きさには11cm前後のもの（6・8・9・12～14）、14cm前後のもの（5・7）がある。12～14は頸部と胴部の境に一条から三条の沈線が施される。胴部外面には、L R繩文（9）、植物茎回転文（5～7・14）が施される。

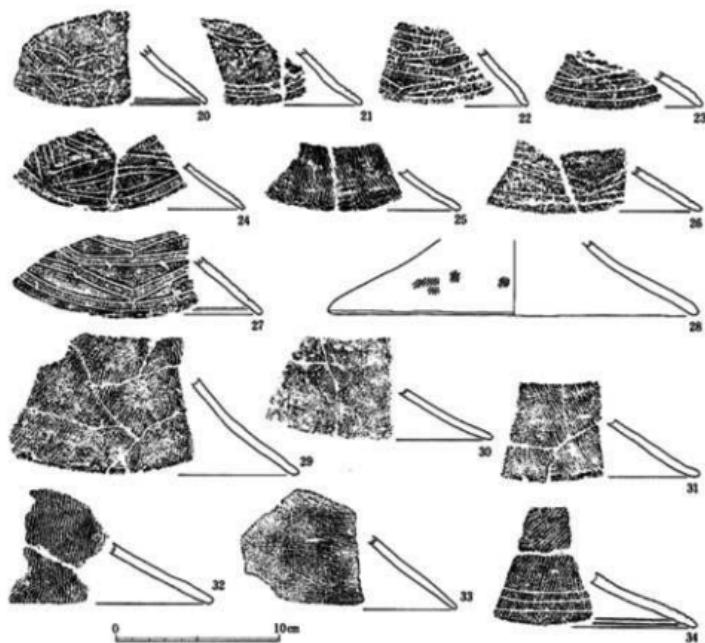
10・11は口縁部がいたん内傾し、口縁端部付近で外反するものである。

20～22・24は口縁部が短く直立気味に外反するものである。20～22は頸部下方に列点文



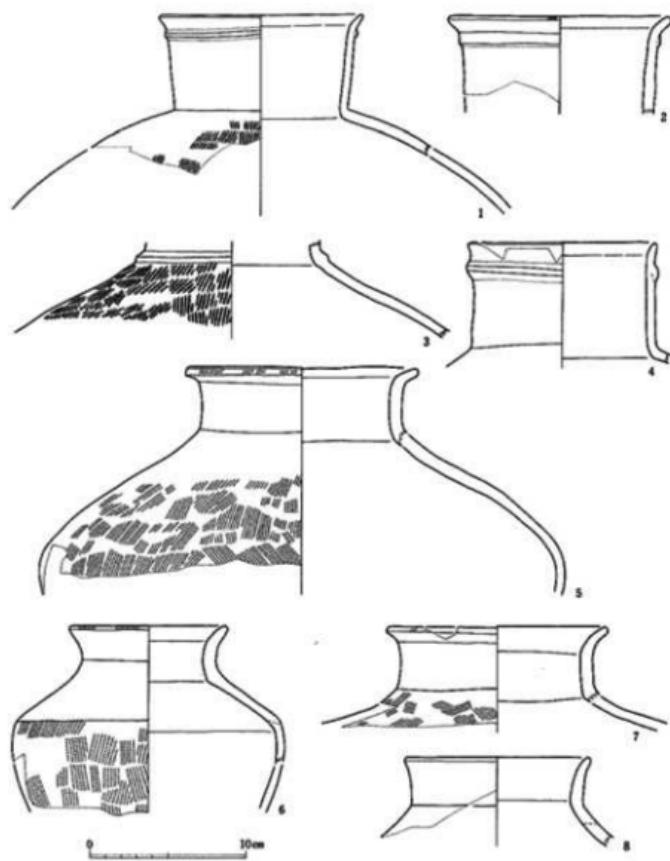
No.	出土層・層位		種類	断面・分型	通径 (cm)	口径・外径 (cm)	底径・内径 (cm)	高さ (cm)	考		参考文献
	地層	層位							文様	内縁	
1	八尺井・遺物層	単孔土器	-	-	-	-	-	-	文様: 丸文模様	植物茎葉模様	8-1
2	-	-	-	-	-	-	-	-	文様: 丸文模様	内縁に一束毛刺	8-6
3	-	-	-	-	-	-	-	-	文様: 丸文模様	内縁に一束毛刺	8-8
4	-	-	-	盤・底	-	-	-	-	文様: 1周 しのぎ模様	-	8-9
5	-	-	-	-	-	-	-	-	文様: 植物茎葉模様	-	8-10
6	-	-	-	-	-	-	-	-	しのぎ模様	-	8-11
7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-12
8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-13
9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-14
10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-15
11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-16
12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-17
13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-18
14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-19
15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8-20
16	-	-	-	-	-	-	-	-	文様: 丸文模様	内縁に一束毛刺	9-1
17	-	-	直筒	-	16.0	5.4	6.1	-	文様: 丸文模様	内縁に一束毛刺	9-2
18	-	-	-	-	11.2	4.4	5.9	-	文様: 直筒	内縁に一束毛刺	9-3
19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9-4
20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9-5
21	-	-	直筒	口縁	16.0	-	-	-	文様: 丸文模様	1束毛刺	17-18
22	-	-	-	-	-	16.00	-	-	文様: 丸文模様	内縁に一束毛刺	17-19
23	-	-	-	-	-	16.00	-	-	文様: 丸文模様	内縁に一束毛刺	17-20
24	-	-	-	-	-	16.00	-	-	文様: 丸文模様	内縁に二束平行毛刺	17-21

第202図 遺物包含層出土・弥生土器(蓋)



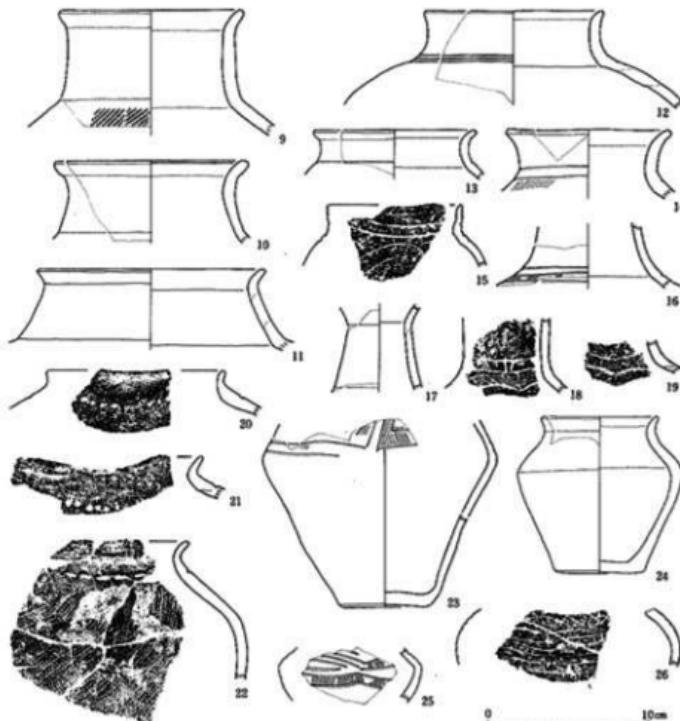
出土地点・層位	種類	器形	断面・分類	直徑 (mm)	厚さ (mm)	幅 (mm)	特徴	発見場所
20 A区・遺物包含層 共生土器	-	-	C断面	13.5	-	-	文様: C型 L字彫文 内側に二条平行溝	17-19
21 -	-	-	-	15.5	-	-	文様: E型	17-20
22 -	-	-	-	15.0	-	-	直線による断面 文様無地 (L型+丸)	17-21
23 -	-	-	-	15.0	-	-	直線による断面 L字彫文	17-22
24 -	-	-	-	14.0	-	-	文様: I型 L字彫文	17-24
25 -	-	-	-	17.0	-	-	直線による断面 縦横溝複合	17-25
26 -	-	大形器	-	19.0	-	-	文様: A型	17-26
27 -	-	-	-	15.0	-	-	文様: D型 L字彫文 内側に一条溝	17-27
28 -	-	-	-	21.4	-	-	直線のみ L字彫文	17-28
29 -	-	-	-	23.0	-	-	直線のみ L字彫文	17-29
30 -	-	-	-	25.0	-	-	直線のみ L字彫文	17-30
31 -	-	-	-	26.0	-	-	直線のみ 縦横溝複合	17-31
32 -	-	-	-	-	-	-	直線のみ L字彫文	17-32
33 -	-	-	-	(28.0)	-	-	直線のみ L字彫文	17-33
34 -	-	-	-	-	-	-	文様: E型 L字彫文 内側に二条平行溝	17-34

第21図 遺物包含層出土・共生土器(蓋・大形器)



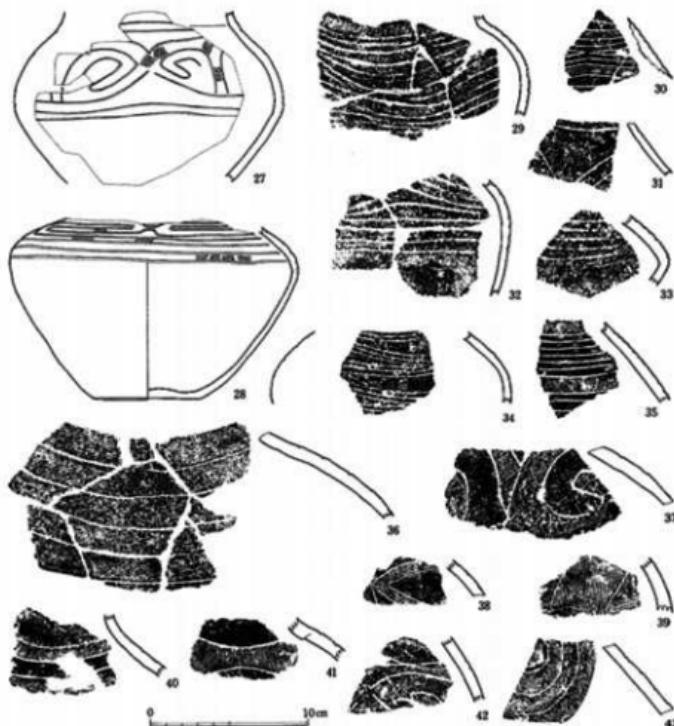
%	出土地・層位	種類	器形・分類	遺物名	D12 (cm)	D13 (cm)	H (cm)	特　徴	考證
1	A区・高台地南側 采集土层	陶	口沿破缺	12.8				口沿下部有擦痕	竹叶纹陶片 (L.5+R.1)
2	-	-	口沿破缺	12.8					
3	-	-	口沿破缺	12.8				口沿下部有擦痕	(S-1)
4	-	-	口沿破缺	12.8					
5	-	-	口沿破缺	12.5				口沿下部有擦痕	(S-19)
6	-	-	口沿破缺	12.5				口沿下部有擦痕	(S-2)
7	-	-	口沿破缺	12.8				口沿下部有擦痕	-
8	-	-	口沿破缺	12.8				口沿下部有擦痕	S-5

第22-2 遺物包含層出土・弦生土器 (透)



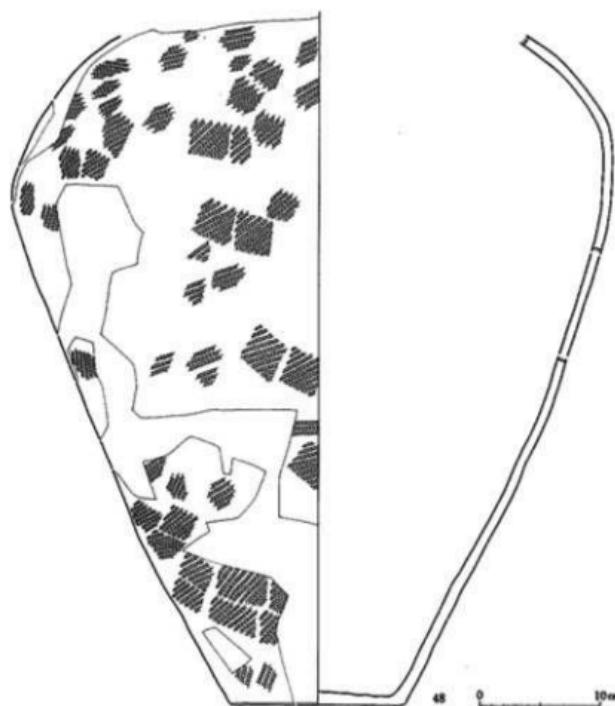
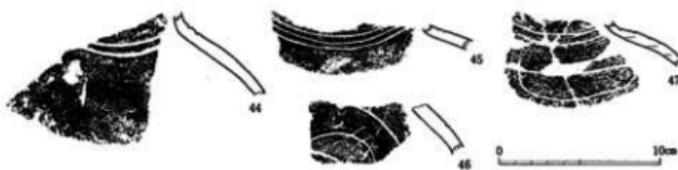
出土品・器種								種別	基期・時期	遺物名	尺寸 (cm)	測定 (cm)	周長 (cm)	鉢	壺	馬頭瓶
9	ABE-00022009	弦纹土器	-	-	口-深部	11.2				L型圈足						
10	-	-	-	-	口-深部	11.6										
11	-	-	-	-	口-深部	11.8										
12	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
13	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
14	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
15	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
16	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
17	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
18	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
19	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
20	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
21	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
22	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
23	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
24	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
25	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						
26	-	-	-	-	口-深部	11.8				陶片(三带平行线)						

第235図 遺物包含層出土・弥生土器 (西)



出土試・編目	種別	器形・状態	遺物名	寸法 (cm)	底面 (cm)	断面 (cm)	特徴	年代表
27	灰陶・遺物包含層	陶土器	壺	高 15 底径 6.5	6.5	1.5	直筒形の内側に凹凸した文様 L字底足	15-16
28	-	-	盆	-	-	-	浅盤形の文様 L字底足	9-12
29	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様 L字底足	15-16
30	-	-	鉢	-	-	-	浅盤形の文様 L字底足	15-16
31	-	-	鉢	-	-	-	浅盤形の文様 L字底足	15-16
32	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様	15-16
33	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様 線物の底面付	15-16
34	-	-	鉢	-	-	-	縦横の文様の底面	15-16
35	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様 線物の底面付	15-16
36	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様 線物の底面付	15-16
37	-	-	鉢	-	-	-	浅盤形の内側に凹凸した文様 L字底足	15-16
38	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様	15-16
39	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様 L字底足	15-16
40	-	-	鉢	-	-	-	浅盤形の文様 L字底足	15-16
41	-	-	鉢	-	-	-	平底盤形の内側に凹凸した文様	15-16
42	-	-	鉢	-	-	-	浅盤形の内側に凹凸した文様 L字底足	15-16
43	-	-	鉢	-	-	-	浅盤形の内側に凹凸した文様 線物の底面付	15-16

第245図 遺物包含層出土・弥生土器(壹)



%	出土品・部位	種別	器形・分類	直徑 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特 徴	年代 (B.P.)
44	人骨・頭骨(後頭)	骨生土器	壺	18.0	16.0	14.0	15.0	縦縫二鳥半身浅腹壺	15-21
45	-	-	壺	-	-	-	-	縦縫下方二鳥半身浅腹壺	15-22
46	-	-	壺	-	-	-	-	縦縫上方二鳥半身浅腹壺	15-21
47	-	-	壺	-	-	-	-	上部横突	15-21
48	-	-	大形壺	16.0	14.0	12.0	15.0	上部横突	15-2

第25図 遺物包含層出土・骨生土器(壺・大形壺)

または竹管による刺突が施される。22の胴部外面には付加条縄文( L R + R )が施される。24は口径7cm程の小形のもので、外面はナデ調整である。

15は口縁部が短く内湾気味に直立するものである。頸部に二条の沈線が施される。胴部に文様が施されているが、構成は不明である。

16~19は頸部資料で、細口のものである。16は頸部に三条の沈線が施され、18・19は沈線と連続する弧が施されている。

23・25~47は胴部資料である。これらには胴部の最大径の位置が胴部上半にくる肩が張ったもの( 28 )と胴部中央にくるもの( 27 )がある。また胴部最大径の大きさには30~40cmのもの( 5 )、15~20cmのもの( 6・23・26~28・34 )、10cm前後のもの( 24・25 )がある。胴部外面には沈線による多様な文様が見られるが、破片のため構成の不明なものが多い。25・26は弧を向かい合わせたもの、27・37は渦巻状のもの、43は同心円状のものである。

#### 〔大形壺〕( 第25図48 )

胴部最大径の位置が上半にくるもので、口縁部は不明である。L R 縄文が施される。

#### 〔甕〕( 第26~29図 )

1~3・5~34・36~41は口縁部が外反するものである。頸部はかるくくびれ、肩部はゆるやかに膨らむ。外反する口縁部の形態は多様である。口径と器高がほぼ同じもの( 1・3 )と、口径に対して器高が大きく、筒状になるもの( 2・4 )がある。底部はいずれも平底である。

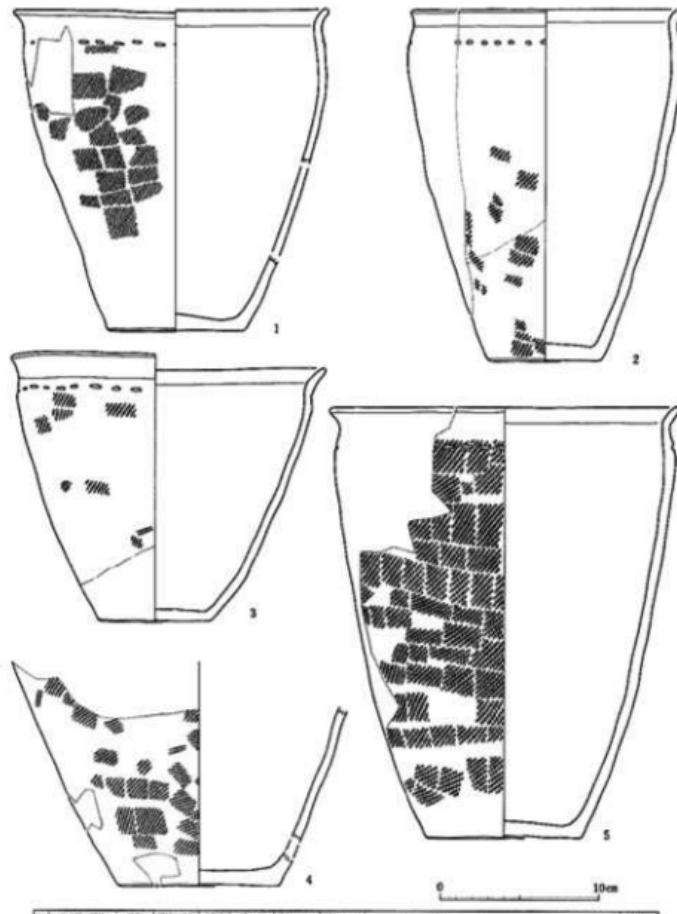
体部外面にはL R 縄文、付加条縄文、植物茎回転文が施される。また頸部下方に列点文が施されるものが甕全体の9割以上を占める。34は列点文が二段に施される。列点文以外には竹管による刺突が施されるもの( 32・33 )、沈線が施されるもの( 38~40 )、地文のみのもの( 36・37・41 )がある。また口縁端部に体部と同じ縄文または植物茎回転文が施されるものがある。11は口縁部内面に一条沈線が施される。35は口縁部が「く」の字状に強く屈曲するもので内外面に一条沈線が施され、沈線から口縁端部まで植物茎回転文が施される。

42は体部から口縁部にかけて屈曲し、口縁部が内湾するものである。体部外面にはL R 縄文が施される。

#### 〔ミニチュア土器〕( 第30図2~4 )

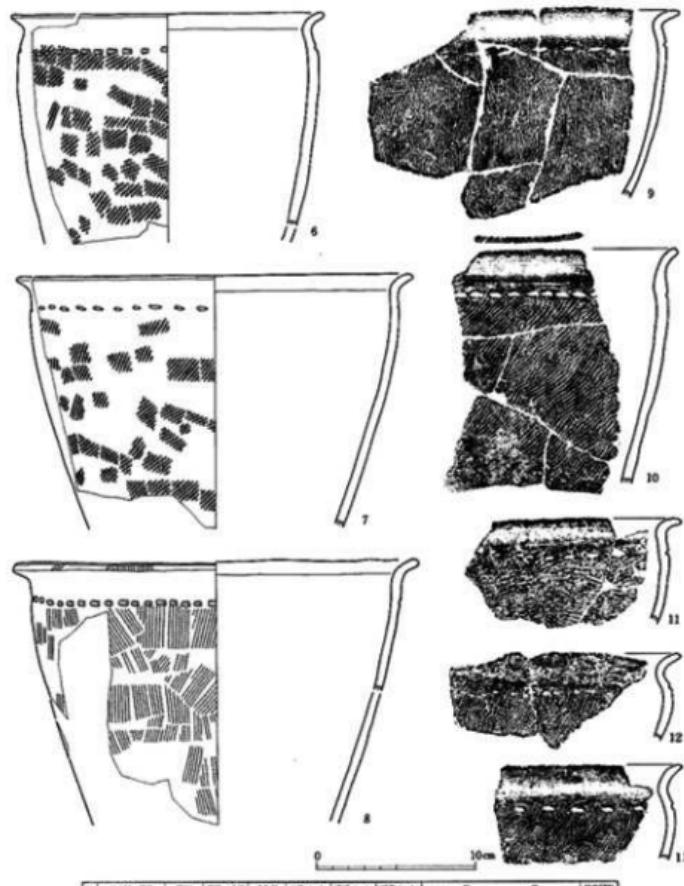
2は楕形をなすものである。3・4は高环の脚部の形状をしたものである。いずれも稚なナデ調整で、地文・文様は見られない。

#### 〔その他の土器〕( 第30図1 )



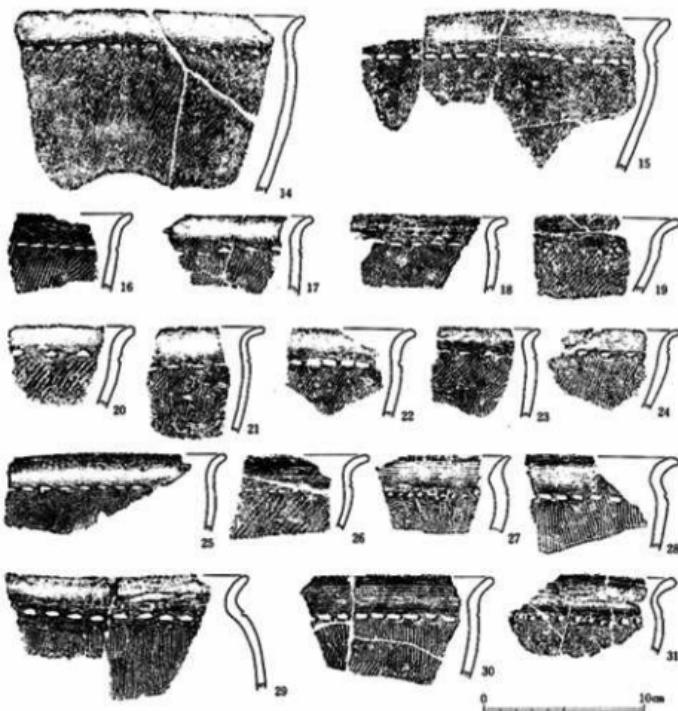
第26図 遺物包含層出土・弥生土器(斐)

%	出土状況	種類	目録番号	通称名	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	参考文献
1	A区・遺物包含層	自生土器	-	-	16.3	8.1	26.2	昭和77年1月内文 付赤字識文(5月×8) 追記：木漆器 10-1
2	-	-	-	-	16.9	6.8	22.1	昭和77年1月内文 上付識文 複数下手が赤色化している 10-4
3	-	-	-	-	16.6	7.8	21.1	昭和77年1月内文 上付識文 複数下手が赤色化している 10-2
4	-	-	-	底付	16.0	10.0	21.0	上付識文 10-3
5	-	-	-	-	21.8	9.6	27.3	昭和77年1月内文 上付識文 成形：木漆器 10-2



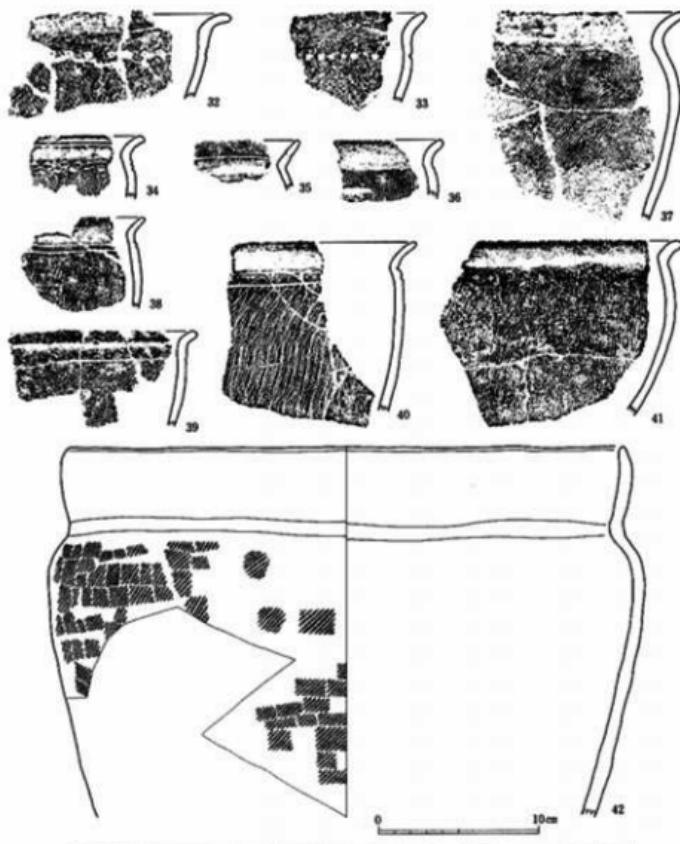
No.	出土位置・種類	形状	器體・分類	縫合部	寸法 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	性質	層	可燃性
6	人骨・遺物包含層	切込土器	縫	口一部縫合	26.2			焼成不均の丸底式	L1	
7	-	-	-	-	24.6			-	L1	
8	-	-	-	-	25.9			-	焼成不均の丸底式	12-1
9	-	-	-	-	(26.0)			-	L1	
10	-	-	-	-				-	L1	
11	-	-	-	-	(26.5)			-	L1	
12	-	-	-	-	(26.0)			-	L1	
13	-	-	-	-	(26.0)			-	焼成不均の丸底式 (L1.3 + R1)	10-2
								-	焼成不均の丸底式 (L1.3 + R1)	10-2

第27図 遺物包含層出土・弥生土器 (續)



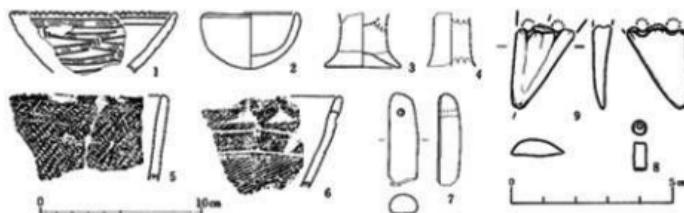
%	底部区・壁部	横剖	断面・分带	断面度	DH (cm)	底径 (cm)	最高 (cm)	持	目	写真番号
31	火灰・焼物付(火灰付)	直上	直	直	(26.0)					
14	-	-	-	-				-	-	
15	-	-	-	-				-	-	
16	-	-	-	-				-	-	
17	-	-	-	-				-	-	
18	-	-	-	-				-	-	
19	-	-	-	-				-	-	
20	-	-	-	-				-	-	
21	-	-	-	-				-	-	
22	-	-	-	-				-	-	
23	-	-	-	-				-	-	
24	-	-	-	-				-	-	
25	-	-	-	-				-	-	
26	-	-	-	-				-	-	
27	-	-	-	-				-	-	
28	-	-	-	-				-	-	
29	-	-	-	-				-	-	
30	-	-	-	-				-	-	
31	-	-	-	-				-	-	
										10cm

第28図 遺物包含層出土・陶生土器(表)



%	出土次・層位	器物	基材・形態	出土地	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	可測範囲
32	A区・陶質白石縁 有土土器	盤	白 素面					縦断下部に竹管による列穴文 L.表裏文 10-17
33	"	"	"					縦断下部に竹管による列穴文 10-18
34	"	"	"					縦断下部に二段の列穴文 縦断面斜め文 10-19
35	"	"	"					縦断下部内側に列穴 縦断面斜め文 10-20
36	"	"	"					縦断・横断面 縦断面斜め文 10-21
37	"	"	"					L.表裏文 10-22
38	"	"	"					縦断下部二条平行成線 L.表裏文 10-23
39	"	"	"					縦断下部直線 L.表裏文 10-24
40	"	"	"					縦断下部二条平行成線 竹管斜め文 (L.表+裏) 10-25
41	"	"	"					L.表裏文 10-26
42	"	"	"	口・底部	35.4			L.表裏文

第29B 図 遺物包含層出土・弥生土器 (續)



No.	出土状況・部位	種類	断面・分類	通径	CHF (cm)	幅径 (cm)	高さ (cm)	特徴	年	可燃性
1	AIX・遺物包含層	胎生土器	平一輪	口縁部	10.2	-	-	口縁部に刻目、底盤による支撑、胎内装飾有	17-25	
2	-	-	「ニチュア」	-	5.8	-	-	-	11-6	
3	-	-	-	-	-	4.9	-	-	18-9	
4	-	-	-	-	-	-	-	-	14-4	
5	-	遺物包含層	深一輪	-	-	-	-	L形底盤	-	
6	-	-	深	-	-	-	-	1段-2段式底盤、CHF 12.5cm前後、L形底盤	17-25	
7	-	土製品	-	底外径 1.7cm、底内径 1.4cm、高さ 1.9cm、CHF 10.0cm前後	-	-	-	-	17-25	
8	-	骨	U字形	底外径 2.0cm、底内径 1.8cm、高さ 1.6cm、CHF 10.0cm前後	-	-	-	-	17-25	
9	-	遺物包含層	浅	底外径 2.0cm、底内径 1.8cm、高さ 1.6cm、CHF 10.0cm前後、2段-3段式底盤	-	-	-	-	-	

第30図 遺物包含層出土・その他



第31図 遺物包含層出土・跡生土器底部痕跡

1は口縁端部に刻目が入る口縁部資料である。器種は不明である。

## 2. 土製品（第30図7）

幅1.8cm長さ6.0cm以上、厚さ1.0cmのもので、断面形はカマボコ形を呈している。一面を平坦にし、端部付近に径4mm程の穿孔が見られることから、垂飾品の可能性が考えられる。

### 3. 石器

石器には石鎌、石錐、石匙、楔形石器、不定形石器、石核、石庖丁、偏平片刃石斧、大型蛤刃石斧、打製石斧、板状安山岩製石器、磨凹石、石皿、砥石などがある。

これらのうち、砥石は近世の溝から出土したもので、他の石器とは明らかに時代の異なるものである。

#### {石鎌} (第32図)

1は本遺跡唯一の無柄凹基の石鎌である。両側刃に浅い抉りをいれてやや尖ったかえし状の基部を作り出している。

#### {石錐} (第32図)

20は基部を折断した後に二次加工が施されている。

#### {石匙} (第33図)

1は非常に粗粒の流紋岩製剝片の一端につまみ部を作り出したもので、その他の縁刃には明確な加工は認められない。3の先端部の二次加工は折面より新しい。ただし二次加工と腹面のなす稜は摩滅しているものの、折面と背面、腹面のなす稜は鋭く、折損後再加工が施されたものと考えられる。

#### {不定形石器} (第33・34図)

第33図4は縁刃が鋸歯状をなすが、左図の左上方をつまみ部と見た場合、石匙と把えることも可能である。8も両側刃上部の対応する位置に抉りが認められ、石匙の可能性もある。第34図2~4はいずれも切断面からの加工が認められる。

#### {石庖丁} (第35図)

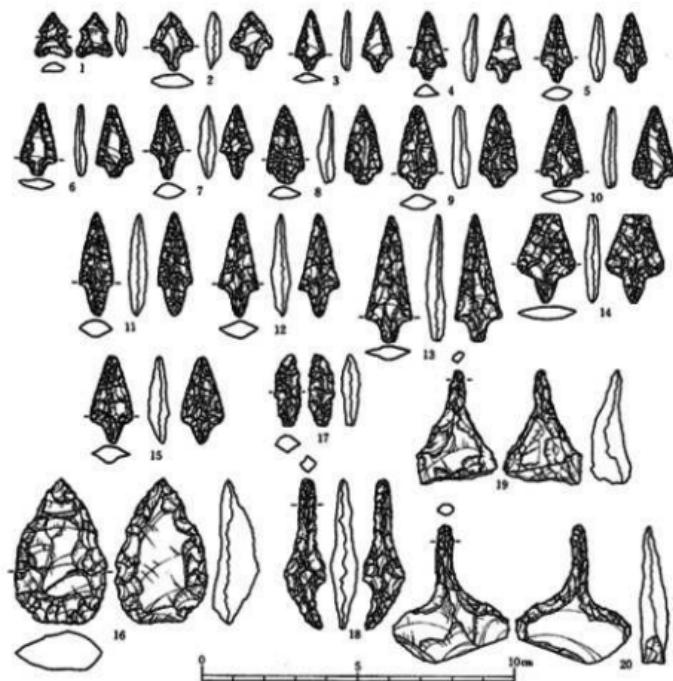
1は破損品であるが、左図中央部に穿孔を意図したものと思われるような敲打痕が認められ、再加工を目的とした可能性もある。3の両面にはわずかな溝状のくぼみが認められる。4は一端が折れたような形態を呈する。しかしその折れ面にも研磨がなされた完形品である。破損後の再加工の可能性もある。5は通常の距離により半月形に形が整えられ、表面を敲打によって調整、穿孔されている。片面には研磨も施されているが、折損のためか、製作途中で放棄されている。

#### {偏平片刃石斧} (第35図)

7の両側刃中央やや基部により、敲打による浅い抉り状の加工が施されている。装着を意図したものであろう。8の刃部は一部が片刃になっているが、残りは使用によると思われる敲打状の痕跡により平らになっている。

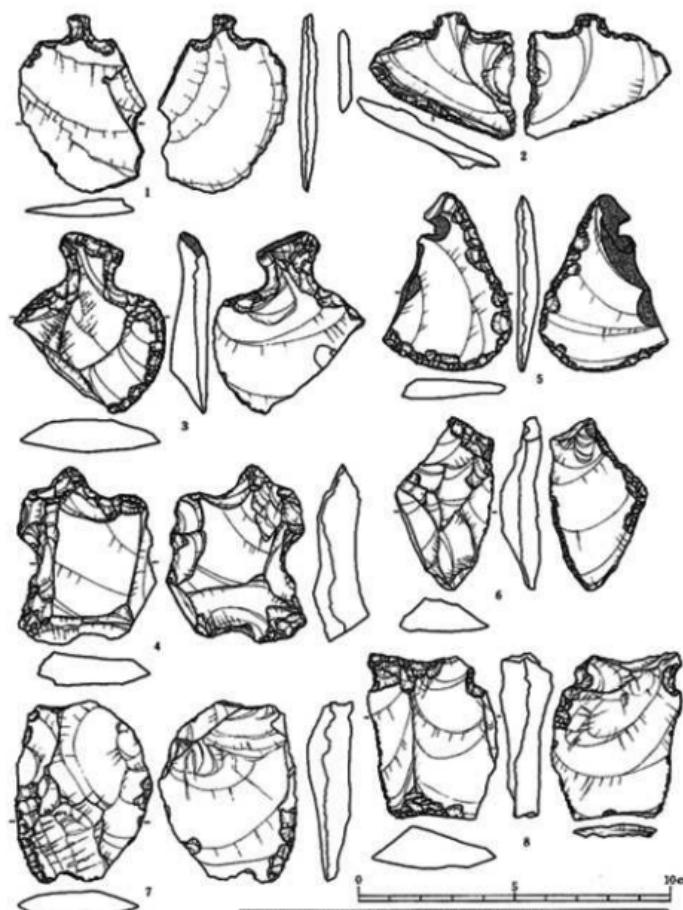
#### {大型蛤刃石斧} (第35図)

11の刃部も8と同様である。



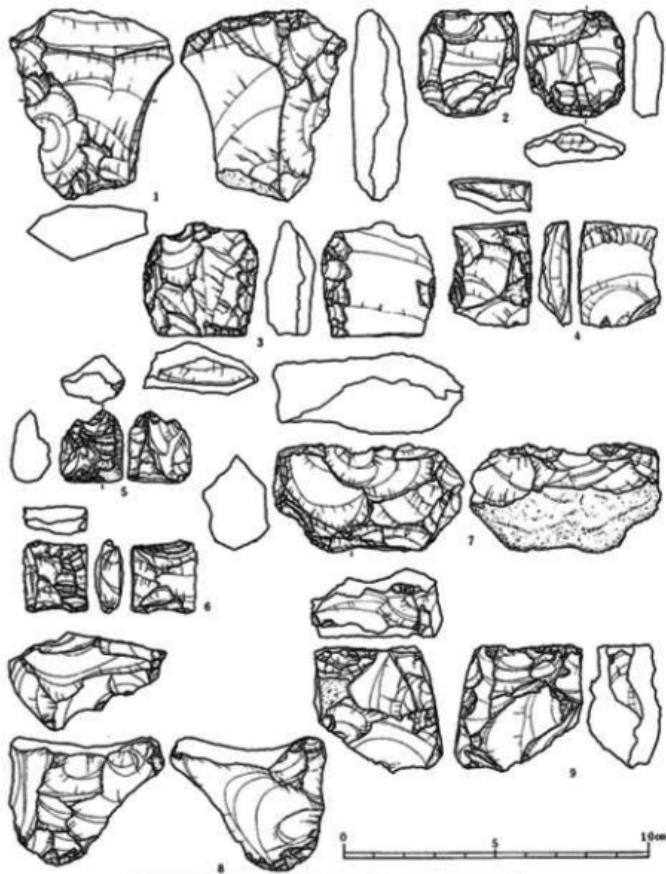
器号	出土地点 - 期数	器 型	高 (cm)	宽 (cm)	厚 (cm)	材 料
1	A区 - 漆物台面层	石 镰	2.8	1.4	1.1	0.2 玻璃
2	A区 - S K28	- 三棱形	-	1.9	0.5	玻璃
3	A区 - S K26	- 三棱形	1.9	0.9	0.2 玻璃	
4	A区 - 漆物台面层	-	2.2	1.1	0.5 玻璃	
5	A区 - 漆物台面层	-	2.2	1.0	0.4 玻璃	
6	A区 - 第2层	-	2.3	2.1	0.4	-
7	A区	-	2.5	1.6	0.5 玻璃	
8	A区	-	2.5	1.1	0.5 玻璃	
9	A区 - S K33	-	2.6	1.2	0.5 玻璃	
10	A区 - 漆物台面层	-	2.6	1.0	0.4 玻璃	
11	A区 - 漆物台面层	-	2.3	1.1	0.5 玻璃	
12	A区	-	2.2	1.2	0.6 玻璃	
13	A区 - 第1层	-	2.0	1.0	0.5 玻璃	
14	A区 - S Q2	- 三棱形	22.49	1.8	0.2	-
15	A区 - 漆物台面层	-	2.8	1.3	0.6 玻璃	
16	A区 - 第1层水波纹层上	石 镰	4.7	2.9	1.2 玻璃	
17	A区 - 漆物台面层	石 镰	2.3	1.9	0.6 玻璃	
18	A区 - 漆物台面层	- 三棱形	4.8	1.3	0.9 玻璃	
19	A区 - S Q14 球形器	-	3.7	2.5	1.2 玻璃	
20	A区 - 漆物台面层	- 三棱形	3.4	3.7	0.9 玻璃	

第32图 石器 (1)



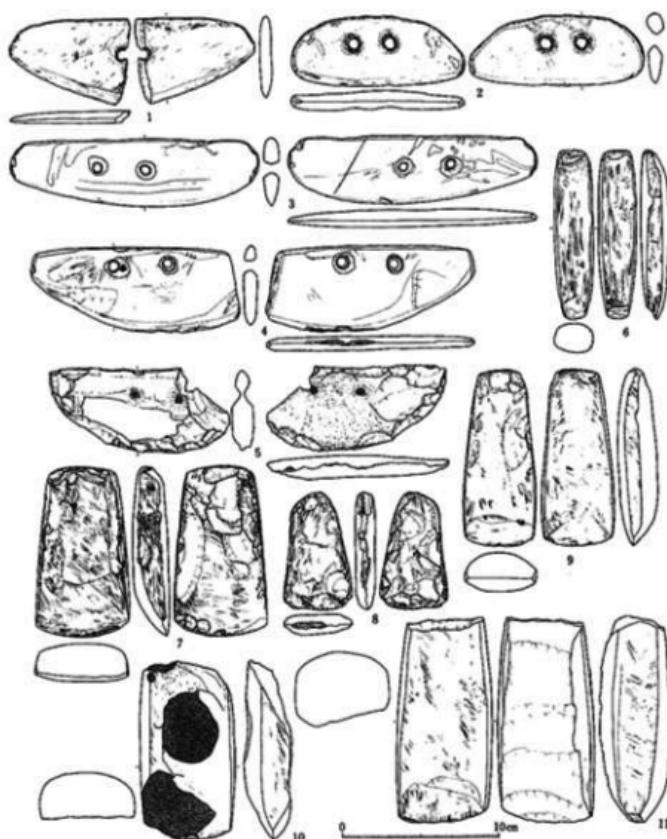
第33回 石器(2)

番号	出土地名・標本	石	長 mm	幅 mm	厚 mm	断面	材	名
1	AIR-阿蘇山古層	石	5.7	4.1	0.6	尖状	石	
2	AIR-阿蘇山古層	-	4.1	4.7	0.5	柱状	石	
3	AIR-阿蘇山古層	-	5.8	4.8	1.1	柱状	石	先端の二面削工式片刃器を有する
4	AIR-阿蘇山古層 平均地盤古層V段	石	5.7	4.8	1.1	柱状	石	地盤の可塑性土から
5	AIR-阿蘇山古層	-	5.8	4.1	0.6	柱状	石	スチーン・ドリード
6	AIR-阿蘇山古層	-	5.6	3.1	1.1	柱状	石	
7	AIR-阿蘇山古層	石	5.8	4.4	0.9	尖状	石	日本で最も古い石器
8	AIR-阿蘇山古層	石	5.2	4.2	1.1	柱状	石	地盤の可塑性土よりハンドル状あり



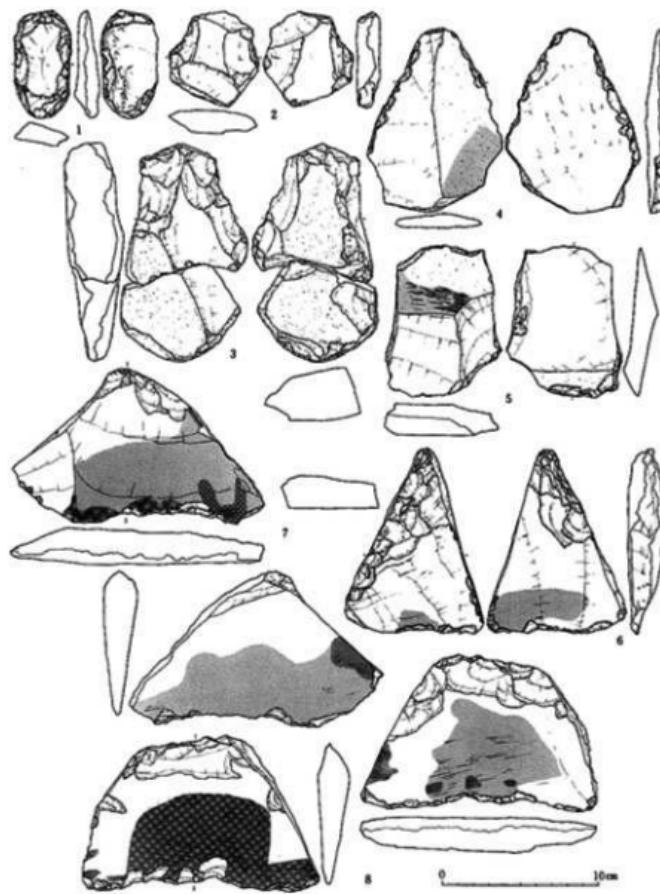
器号	出土場所・層位	器種	高 cm	幅 cm	厚 cm	材質	備考
1	AZC・連続的打撲	不規則形石器	9.3	5.4	1.5	青 砂 石	
2	AZC・連続的打撲	刮削器	3.0	3.2	1.0	青 砂 石	刃部鋒利
3	AZC・第1層	—	—	—	—	青 砂 石	
4	AZC・連続的打撲	—	5.5	3.7	1.1	青 砂 石	
5	AZC・連続的打撲	刮削器	2.4	2.3	1.3	青 砂 石	
6	AZC・連続的打撲	—	1.9	2.1	0.9	青 砂 石	
7	AZC・連続的打撲	石 破	5.6	5.1	2.7	—	チャコビンゴ・トゥークル
8	AZC	—	4.3	5.1	3.3	砂岩	刃部鋒利
9	AZC・連続的打撲	—	4.2	4.7	2.4	—	手握持

図34(3) 石器 (3)



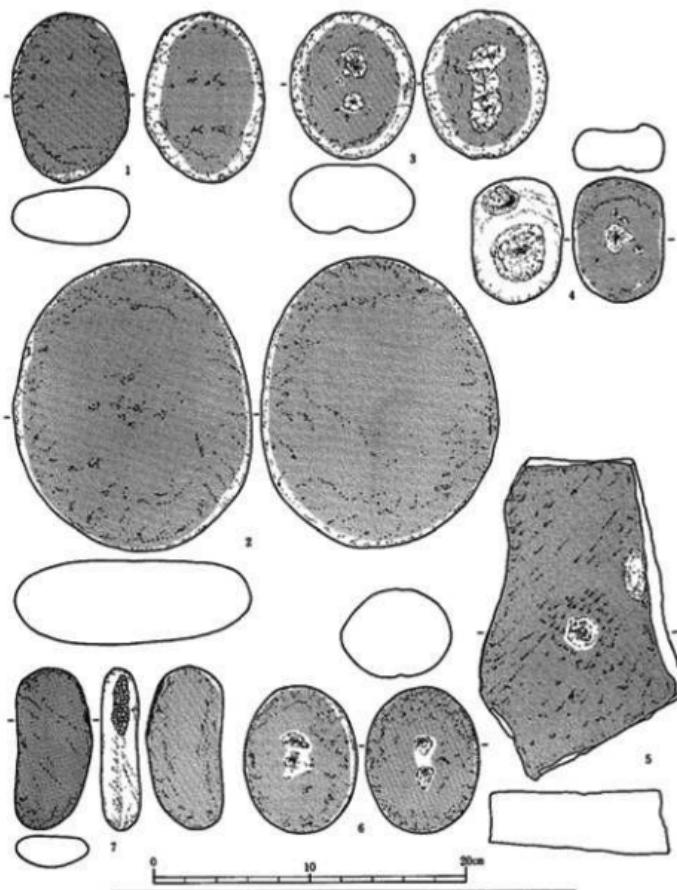
番号	出土地点・発見	基種	高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	材質	備考
1	ASJ-農耕地遺跡	石塊	15.0	11.0	0.8	粘土質	斜打・一頭打刃による穿孔・中央部斜削れ込み
2	ASJ-5.2118	-	4.5	11.0	1.2	-	斜打・丸・半丸打刃で穿孔
3	ASJ-農耕地遺跡	-	4.4	15.0	1.0	粘土質	平行に二本の丸打刃で穿孔
4	ASJ-農耕地遺跡	-	5.5	15.4	0.9	-	斜打・斜打・一頭打刃による穿孔
5	ASJ-農耕地遺跡	石塊多岐化	15.5	11.0	1.4	-	太頭中央部は斜削
6	ASJ-5.1105	/ノ形石	10.0	2.5	1.9	-	-
7	ASJ-農耕地遺跡	扁平刃石	10.0	6.0	2.4	粘土質	両側面に斜打による持ち込み
8	ASJ-農耕地遺跡	-	7.5	4.0	1.7	-	-
9	ASJ-5.1106	-	11.0	4.7	2.0	-	-
10	ASJ-農耕地遺跡	大頭刃石	11.0	6.0	13.0	粘土	頭のハサゲらしい
11	ASJ-農耕地遺跡	-	15.0	8.2	14.0	-	全周削形によると認められるツブレ・凹部

第354図 石器(4)



番号	出土地点・層位	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	名前	備考
1	AIZ-BG2	打削石片	2.0	1.7	1.4	山口	打削石片の他工具
2	AIZ	円錐状石核	6.7	5.8	1.5	-	打削石片の他工具
3	AIZ-出雲原(10)・第1層(10)	打削石片	16.1	8.1	1.5	-	どちらにも再利用あるいは工具
4	AIZ-出雲原	剥離石核剥離石片	12.9	8.2	1.3	-	スクエア剥離石片
5	AIZ-出雲原	-	9.9	7.5	1.5	-	-
6	AIZ-出雲原	-	11.8	8.9	2.2	-	-
7	AIZ-出雲原	-	10.9	10.1	2.1	-	直角形剥離石片
8	AIZ-出雲原	-	9.6	10.0	2.1	-	-

第36図 石器 (5)



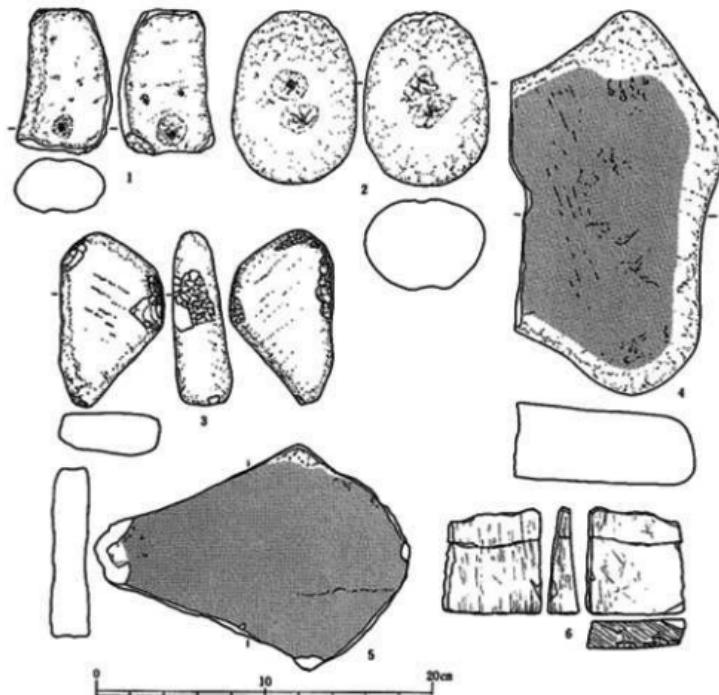
番号	出土地點・標印	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石種	重さ (kg)	備考
1	ABE-B4-1-a	打削石器	15.9	7.5	3.5	花崗岩	4.0	スチーケン打削石器 (アラマニ)
2	ABE	-	16.0	11.2	4.5	-	3.60	
3	ABE-断面分類	打削石器	9.4	7.5	3.5	-	0.55	
4	ABE	-	7.5	5.8	2.5	花崗岩	0.5	花崗岩打削石器
5	ABE-B4-1-a	打削石器	25.0	12.0	6.1	花崗岩	1.90	
6	ABE-断面分類	打削石器	9.4	7.2	3.5	-	0.50	花崗岩打削石器
7	ABE-BDS	打削石器	15.7	8.7	2.5	-	0.50	

第37図 石器 (6)

{打製石斧} (第36図)

3はA区の第1層から出土した基部と、包含層から出土した刃部が接合している。どちらも折面を中心に再加工が施されている。刃部は潰れて平坦になっている。素材はやや厚手の板状の安山岩である。

{板状安山岩製石器類} (第36図)



番号	出土場所・層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (kg)	石 材	備考 (a)	備考 (b)
1	B区・第7層水田耕作土	5.4	5.2	3.2	21.5			
2	B区・第7層水田耕作土	"	10.2	7.5	5.0	青 灰 岩	58.0	
3	A区・第2層	10.3	6.1	3.1	22.5			
4	A区・遺物含む層	12.8	13.4	4.4	"		刃部は2+面あり	2.500
5	A区・遺物含む層	"	18.6	13.1	2.2	青 灰 岩	21.0	大柄を今付で裏面は非対称
6	A区・D層	6.3	5.5	1.6	7.2		Tritschler / 1枚剥片あり・近似	72

第36図 石器 (7)

4は2つの刃部が鋭角に交わり、長軸を中心に左右対称の形態を呈する。しかしそれぞれの刃部を下辺に置くと、台形の底辺の片側が欠けた形態、あるいはいわゆる靴形に似た形態を呈する。5~8は両側辺が切断され、5は長方形、6・7は三角形、8は台形の平面形態を呈する。4~6に比べて7・8は大型で重量感があり、摩減や擦痕も顕著である。またこの2点の片面は自然面もしくは節理面である。肉眼で観察できる擦痕の方向は刃部に平行、あるいはやや斜交である。5は器体中央部の最も高い部分に磨面と擦痕が認められる。8の両側面の基部よりには折面を打面とした二次加工が施されており、装着のための二次加工の可能性が考えられる。

#### 4. 管玉（第30図8）

長さ9mm 径4.5mmで、材質は碧玉である。両側から孔が穿たれている。

#### 5. 齒牙製垂飾品（第30図9）

サメ類の歯に穿孔を施した垂飾品である。歯根部は欠損し、歯冠部のエナメル質のみが残存する。二等辺三角形状を呈し、基部側（歯根部側）に2個の穿孔が認められる。残存長2.6cm 残存幅1.8cm 厚さ0.5cmで、切縁に鋸歯ではなく、穿孔以外に二次的な加工や全体を研磨したような痕跡も認められない。大きさや形態からみて、アオザメの上顎歯を利用したものと思われる。サメの歯を利用した加工品は、長沼氏の集成によれば、全国で50遺跡以上で出土している。北海道以外の地域においては、狩猟や漁撈が生業の中心である縄文時代（とくに後・晩期）に多用され、農耕が生業の主流となる弥生時代以降では、利用されることが少なくなったと考えられている（長沼：1984）。県内においては仙台市山口遺跡（佐藤；1981）、大野田遺跡（註）、石巻市沼津貝塚（東北大学文学部東北文化研究室；1962、金子；1980）、涌谷町長根貝塚（金子；1980）、田柄貝塚（新庄屋・阿部；1986）で出土しており、中でも山口遺跡出土の例は穿孔の数に違いはあるものの、素材や部位、穿孔箇所など類似した特徴をもっている。ただし、これらはいずれも縄文時代後・晩期のものであり、弥生時代中期に位置付けられる本例は、北海道以外の地域においては数少ない出土例といえる。

（註）仙台市教育委員会小川淳一氏の御教示による。

## (2) 古代の遺構と遺物

B区の全域とA区の西北部にかけて分布する第4層上面を精査した結果、水田跡・溝跡を検出した(第39図)。これらは検出面の違いから、4-a層・4-b層の3時期のものに識別された。さらに第3層は灰白色火山灰塊を含む層で、B区北辺部ではこの層を耕作土とする畑の畝間もしくは天地返しの跡と考えられる小溝跡群が検出された。

発見された遺構として、4-a・b層上面で検出した水田跡、3層で検出した畠跡がある。第4層は灰白色火山灰を含む第3層によって覆われていることと、4-b層から回転糸切り底の須恵器坏(第40図2)が出土していることなどから、4層で検出された遺構はいずれも灰白色火山灰降下(10世紀前半)以前の平安時代のものと考えられる。また、第3層は搅範をあまり受けない灰白色火山灰塊を含んでいることから灰白色火山灰降下(10世紀前半)以後でも早い時期のものと推定される。

以下では各時期の遺構の内容を古い順からみていくことにする。なお、遺構確認は第4層上面以下でおこなったため、それより上層に位置した第3層の遺構については小溝跡群を除き不明である。

### A . 4-b層の水田跡

第4-b層の水田跡はB区の全域とA区の西北部で確認され、南・北・西側の三方向の調査区外にも及んでいる。ただし、A区やB区の北・西部では上層の4-a層の耕作が下部まで及んでいるため部分的にしか残存しておらず、本来の水田の構成や広がりについては不明な点が多い。

### [耕作土]

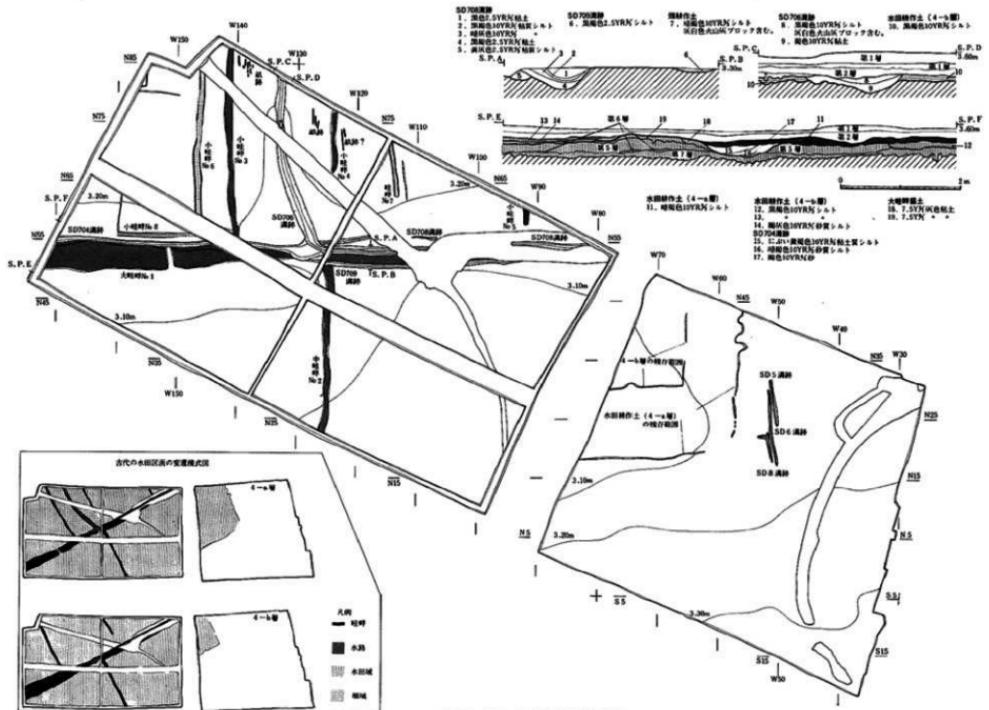
第4-b層は搅範のすすんだ水田耕作土で、黒褐色もしくは灰褐色でグライ化したシルト質土壤である。層の厚さは残りの良いB区東南部で20cm前後あるが、A区や北・西部では4-a層により削平されているため部分的に薄く残存しているにすぎない。

須恵器坏(第40図2)が出土している。底部は回転糸切り無調整である。

### [畦畔]

畦畔は東西方向のものが2条、南北方向のものが3条確認された。畦畔の規模に違いがあり、大畦畔、中畦畔、小畦畔の3種類に分けられる。

大畦畔(No.1)は、B区を斜めに横断する上幅2~4mの畦畔で、ほぼ真東西方向に延びている。畦畔の北辺に沿って水路とみられるSD704・708溝跡が、南辺に沿って畦畔盛土の採土痕跡とみられるSD709がそれぞれ検出されている。東半部は中・近世の水路によって破壊されているがSD708の下部が残存しているのでさらに東に直線的に延びるこ



第39図 古代の水田跡関係遺構位置図



とが確認される。総延長は約90mである。

中畦畔（No.2）は、B区南半に位置する上幅1m前後の南北方向の畦畔である。総延長は約30mで大畦畔（No.1）からほぼ真南方向に延び、南端がわずかに西に屈曲している。

小畦畔（No.6・7）は、いずれもB区北半で検出された上幅80cm前後の南北方向の畦畔である。畦畔の下部が断続的に確認された。ほぼ真北方向に延びている。

小畦畔（No.8）は、B区西部で検出された上幅80cm前後の東西方向の畦畔である。用水路とみられるSD704溝跡を挟んで大畦畔（No.1）とほぼ平行している。

#### [水田区画]

調査区内では5つの区画が確認されたが調査区が狭く、耕作土の残りも悪いことから区画の全容がわかるものはない。区画の大きさについてはB区北半部の小畦畔No.6・7の間が約33mであることから、これがこの水田の区画の東西幅と考えられるが南北方向の広がりは不明確である。

#### [溝跡]

溝跡は東西方向のものが2条確認された。これらはいずれも大畦畔の北辺に沿っている。

SD704・708溝跡は、いずれも大畦畔No.1の北側に沿って東西に延びる上幅1.2m前後、深さ20cm前後、断面形が浅い「U」字状を呈する溝跡である。底面のレベルや状況から東に流れる水路であったと考えられる。

SD708溝跡堆積土の下層から土師器の細片が出土しているが図示できるものはない。ロクロ調整による壊の破片で、内面が黒色処理され底部外面はヘラケズリによる再調整がなされたものである。

#### [水口]

調査区ほぼ中央の大畦畔の途切れる部分がB区南東隅の区画へ給水する水口とみられる。その他では畦畔の残存状況が悪いため不明確である。

#### B.4-a層の水田跡

第4-a層の水田跡はB区の全域とA区の西北部で確認され、南・北・西側の三方向の調査区外にも及んでいる。一方、A区の西南部およびその東側の仙台市の調査区では古代の水田土壌は確認されていないが、この地域は微高地であり、後世の耕作によって削平された可能性も考えられる。

#### [耕作土]

4-a層は搅範のすすんだ水田耕作土で、暗褐色のグライ化したシルト質土壌である。層の厚さは10cm前後でほぼ一定している。4-a層からは須恵器の無蓋高壺の壊部破片

(第40図1)が出土している。体部下半に段が巡るものである。

#### 「畦畔」

畦畔は東西方向のものが1条、南北方向のものが4条確認された。畦畔の規模に違いがあり、大畦畔、中畦畔、小畦畔の3種類に分けられる。なお、この他に、畦畔としては認定できなかったが耕作土の残存範囲が直線的に延びる部分が何ヶ所がある。このうちA区の4-a層の東辺と南辺は境が明瞭であることから水田区画の境と考えられるもので、それらの位置には畦畔が存在した可能性が高いと考えられる。

大畦畔(No.1)は、4-b層の大畦畔を踏襲したもので4-a層の水田においても機能していたとみられる。畦畔の北側の溝跡S D704・708溝跡のうち、西半部のS D704は廃され、畦畔北縁まで耕作域となっている。

中畦畔(No.2・3)は、いずれも上幅1m前後の南北方向の畦畔である。このうちNo.2は4-b層の中畦畔を踏襲したものである。No.3はB区北半に位置し、大畦畔(No.1)からほぼ真北方向に延びている。総延長は約32mである。

小畦畔(No.4・5)は、B区北半で検出された上幅80cm前後の南北方向の畦畔である。いずれも残りが悪く畦畔の下部が断続的に確認されている。ほぼ真北方向に延びている。

#### 【水田区画】

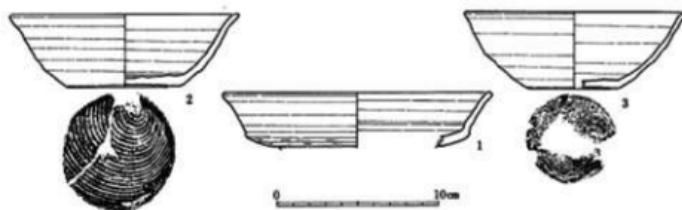
調査区内では7つの区画が確認されたが全容のわかるものはない。ただし、B区北半部では畦畔間の距離(水田区画の東西幅)を計測できる例がいくつかある。まず、小畦畔No.4・5の間は約33m、中畦畔No.3と小畦畔No.4の間は約17mで、そのほぼ中央にS D706溝跡が位置している。また、B区南半の中畦畔No.2と、A区の4-a層の東辺の間は約66mである。一方、これらの区画の南北方向の広がりはいずれも不明確であるが、A区の4-a層の南辺の間は約17mである。

#### 【溝跡】

溝跡は南北方向のもの(S D706)と東西方向のもの(S D708)とが確認された。これらはB区のほぼ中央部で合流している。

S D706溝跡は上幅2m前後、深さ1m前後で断面形が浅い「U」字状を呈する南北方向の溝跡である。B区北半の畦畔No.3と4の間に位置し、南端は東に緩やかに屈曲し、大畦畔の北側で東西方向の溝跡(S D708)に合流する。底面のレベルや状況から北から南に流れる水路であったと考えられる。堆積土下層(No.9層)から須恵器壊(第45図3)が出土し、その上層には灰白色火山灰塊を含む層(No.8層)が堆積している。

溝の底面から須恵器・土師器の破片が出土している。須恵器壊(第45図3)は底部が回転糸切り無調整のものである。土師器は図示できるものはないが、口クロ調整による壊の



No.	出土場所	層	幅	口径	底径	高さ	考	時代・時代
1	4-a層水路	溝跡	幅10cm	16.0	-	-	古墳時代	
2	4-b層水路	-	幅	14.1	0.4	4.0	施設の跡か切り無認定	平安時代
3	S D708 溝跡	-	-	13.0	5.0	4.0	-	平安時代

第40図 古代の水田跡・溝跡出土遺物

破片で、内面が黒色処理され底部には回転糸切り痕跡が残されたものである。

S D708 溝跡は 4-a 層上面では 4-b 層検出のものとほぼ同位置で掘り返しが行われたもので、上幅 1m 前後、深さ 30cm 前後で断面形が浅い「U」字状を呈する。底面のレベルや状況から東に流れる水路であったと考えられる。

S D709 は大畦畔 No.1 の南側に沿って検出された上幅 1m 前後、深さ 10cm 前後のごく浅い溝跡である。底面に凹凸があることなどから水路などの施設ではなく畦畔に盛土をした際の採土痕跡と考えられる。堆積土に灰白色火山灰塊が含まれている。

#### [水口]

調査区西南部の大畦畔の途切れる部分が B 区南東隅の区画へ給水する水口とみられる。その他では畦畔の残存状況が悪いため不明確である。

#### C . 3 層の小溝跡群

B 区北西部の 4-a 層上面で、幅 10cm 前後、深さ 5cm 前後の溝跡が 20~30cm 間隔で数条ずつ、局部的に検出された。これらは畑の畝間もしくは天地返しの跡と考えられ、堆積土に灰白色火山灰塊を含んでいる。畝跡の広がりは不明であるが確認された範囲は中畦畔 No.3 と小畦畔 No.4 の間に限定される。

### (3) 中・近世の遺構と遺物

B区の北東部の第4層上面でSD701・702・703溝跡が検出された。SD701・703溝跡は第2層の水田に、SD702溝跡は第1層の水田に伴う溝跡とみられる。

遺構の確認は第4層上面以下でおこなったため、それより上層の第1・2層の水田の区画や構成は不明であるが、第2層の水田に関わるものとして、B区南部で畦畔や、人間の足跡と共に平行して箱状のものを引きずった痕跡などが部分的に確認された（第41図上）。

以下、これらについて古い順に説明を加える。

#### A. 第2層の水田

第2層の水田土壤は黒褐色の粘土質シルトで、A・B調査区のほぼ全域に分布している。水田の区画や構成は不明であるが、B区南部では第2層の耕作が深くまで及んでいたため部分的に第2層の畦畔の痕跡を確認することができた。さらに第2層の水田のものとみられる人間の足跡と共に平行して箱状のものを引きずった痕跡なども確認された。B区北部で検出されたSD701・703溝跡はこの水田に伴う水路跡と考えられる。

##### [耕作土・畦畔]

畦畔は部分的であるが、上幅50cm前後の小規模な東西方向の畦畔で、東で南に約30度偏した方向のものである。足跡はこれに直行する北東方向にまっすぐに進んでおり、箱状の痕跡はその左側に平行している。

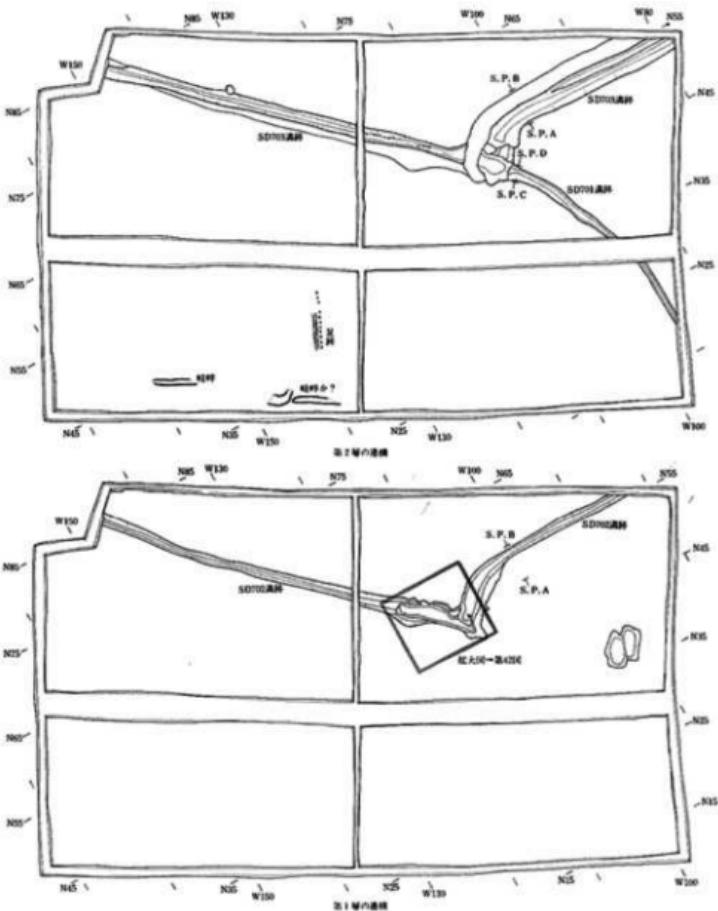
##### [溝跡]

SD703溝跡はB区北部に位置する。底面のレベルや状況から、東に流れる水路であったと考えられる。西半部は上記の畦畔とほぼ平行する方向に直線的に延びているが、B区東部ではSD701溝跡と合流し、そこから北にほぼ直角に折れ、さらに屈曲しながら東に向かっている。溝の規模は合流部の東西で異なり、西部が上幅1.6m前後、深さ1m前後で、断面形が「U」字状を呈する。東部は上幅3m前後、深さ1.5m前後で、断面形が逆台形を呈する。

SD701溝跡はB区東部に位置する。底面のレベルや状況から、北に流れる水路であったと考えられる。屈曲しながら北に向かい、SD703溝跡に合流する。溝は上幅1m前後、深さ30cm前後で、断面形が「U」字状を呈する。

#### B. 第1層の水田

第1層の水田土壤は褐色の粘土質シルトで、A・B調査区の全域に分布している。水田



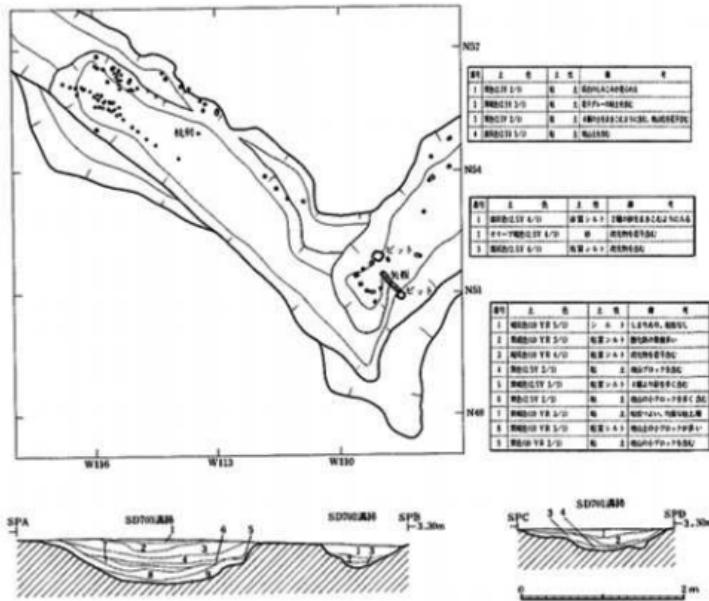
第41図 中・近世の遺構分布図

の区画や構成は不明である。B区北部で検出されたSD702溝跡はこの水田に伴う水路跡と考えられる。

#### [溝跡]

SD702溝跡はSD703溝跡と重複し、その方向・規模などもほぼ一致している。SD701・703溝跡の合流点部分の底面では、堰の下部構造とみられる矢板や打ち込み杭あるいはピットなどが検出された。また、合流点周辺には、護岸のための打ち込み杭列が確認された。SD702溝跡堆積土の下層から近世陶磁器・漆器・木製品などが出土している(第43・44図)。出土した遺物は陶磁器の年代観から、16世紀後半から19世紀前半にかけてのものが混在しているとみられる。

陶磁器(第43図1~6)は菊そぎ小皿で16世紀後半代の美濃大窯の製品とみられる。2は鉄釉の碗で時期・産地不明。3・4は染め付け碗で18世紀後半から19世紀前半の肥前

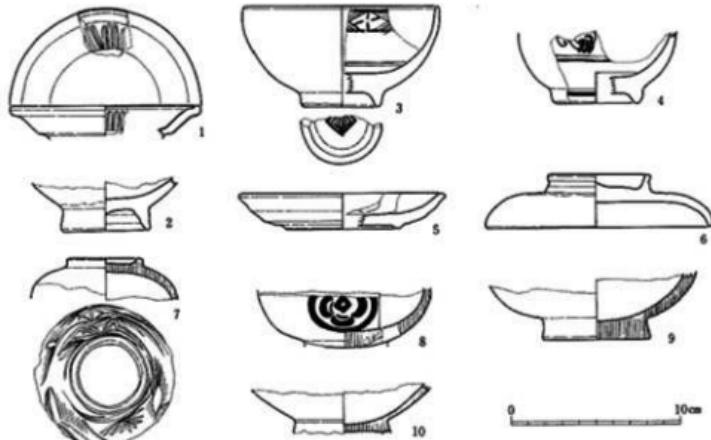


第42図 SD702溝跡の堆積大図、SD701~703溝跡断面図

産のものとみられる。5は長石釉の皿、6は灰釉の蓋で、18世紀後半から19世紀前半のものとみられる。

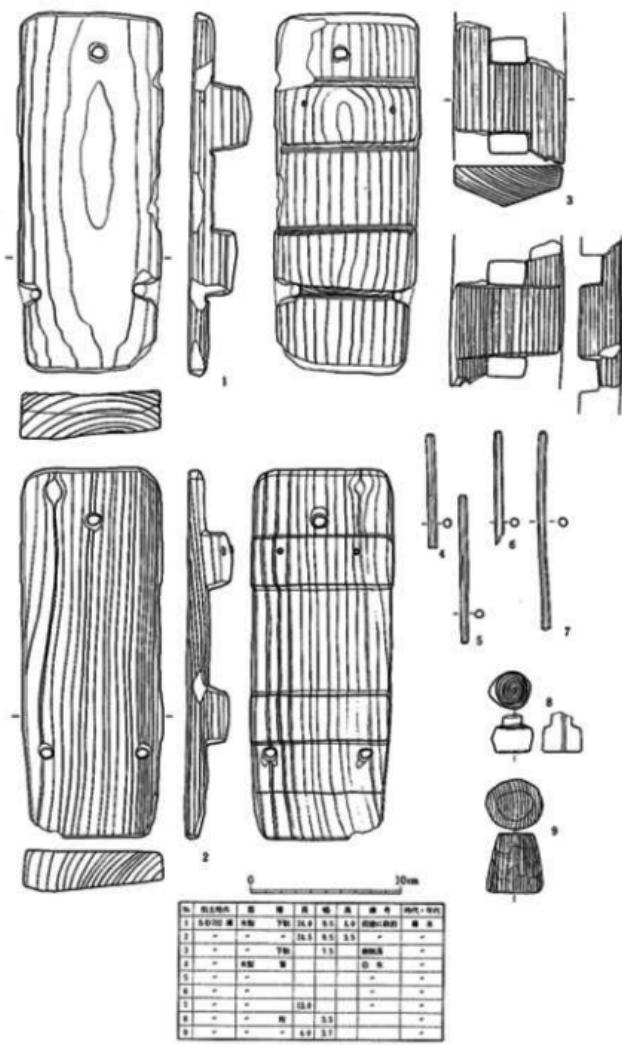
漆器（第43図7~10）7は椀蓋、8~10は椀である。7・8は黒漆地に朱漆で文様が描かれたもので、8は木弧が四面に描かれている。9は黒漆塗、10は朱漆塗の椀である。この他図示できなかったが朱漆塗の箱物や箸の破片が出土している。

木製品（第44図）1~3は下駄、4~7は白木の箸、8・9は栓である。この他、曲げ物の底板やくり物の破片などが出土している。



No.	出土地所	基 地	口徑	底径	高 さ	備 考	出 所	時代・年代
1	SD702 滝	無地陶器	11.5	7.0	2.5	直物	漆付・光面	18世紀
2	"	天目茶碗	11.0	—	—	無地	高台形脚付	—
3	"	金付鐵器	11.5	8.0	5.0	無地文	為底 内側青銅物	漆付
4	"	"	—	—	—	無地	高台形脚付	—
5	"	無地陶器	12.2	8.8	3.2	直物	—	—
6	"	"	13.0	—	3.3	無地陶器	—	—
7	"	漆 蓋	—	—	—	無地文に朱色で文様を添ぐ	—	—
8	"	"	—	—	—	無地文に朱色文様 (外縁)	—	—
9	"	"	—	—	—	内側漆塗	—	—
10	"	"	—	—	—	内側漆塗	—	—

第43図 SD702溝跡出土遺物(1)



第44図 SD702溝跡出土遺物(2)

#### (4) その他の遺構

第8層上面で、溝跡、土壤、多数の小ピットを検出している。

##### A. 溝跡

A区の微高地部で5条検出している。以下主なものについて説明する。

【SD2溝跡】A区のほぼ中央を東西方向に延びる溝で、調査区外に続いている。遺物包含層の北端部で重複しているが、包含層が薄いため新旧関係は明確には捉えられなかった。上端幅60~90cm、深さは14cmである。断面形は皿状を呈し、堆積土は2層に分かれる(第45図)。

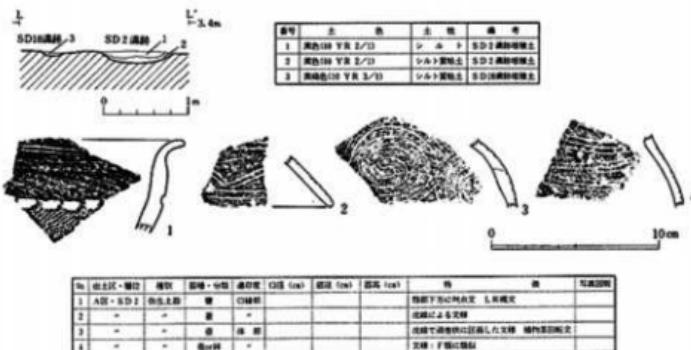
堆積土から弥生土器甕(第45図1)・蓋(2)・壺(3・4)、石鐵(第32図14)、打製石斧(第36図1)が出土している。

【SD18溝跡】A区中央部でほぼ東西方向に延びる溝で、総長12mである。SD2溝跡にほぼ平行し、上端幅30cm、深さは8cmである。断面形は「U」字形を呈し、堆積土は1層である(第45図)。堆積土から弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

##### B. 土壤(第46・47図)

A区の微高地部で11基検出している。A区北側に3基、SD2溝跡以南に8基分布する。

【SK1】一辺80cm前後の隅丸方形を呈し、深さは21cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は5層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。



第45図 SD 2 + 18溝跡断面図、出土遺物

【S K25】S D2溝跡と重複し、これよりも古い。長径2.3m 短径1.2mの不整形を呈し、深さは20cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は5層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器鉢(第48図12)、大形鉢(第49図5)、蓋(第48図3)、甕(第49図15、16)が出土している。

【S K26.27.31.32】重複しており、S K32→31→27→26の新旧関係である。S K26は長径2.1m 短径50cmの東西に長い楕円形を呈し、深さは20cm S K27は長径3.4m 短径1.0mの東西に長い不整形を呈し、深さは65cm S K31は長径1.2m以上、短径30cmの東西に長い楕円形と考えられ、深さは16cm S K32は長径70cm以上、短径40cmの楕円形を呈し、深さは18cmである。断面形はいずれも「U」字形を呈する。堆積土はいずれも3~4層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器、石器が出土している。S K26からは鉢または大形鉢(第49図2)、大形鉢(第49図7)、蓋(第48図2)、壺(第49図4.9)、甕(第49図12)、石鐵(第32図3)が出土している。S K27からは鉢(第48図15)、蓋(第48図9.10)、壺(第48図6.8)、甕(第49図11.13)が出土している。S K31・32は図示できるものはない。

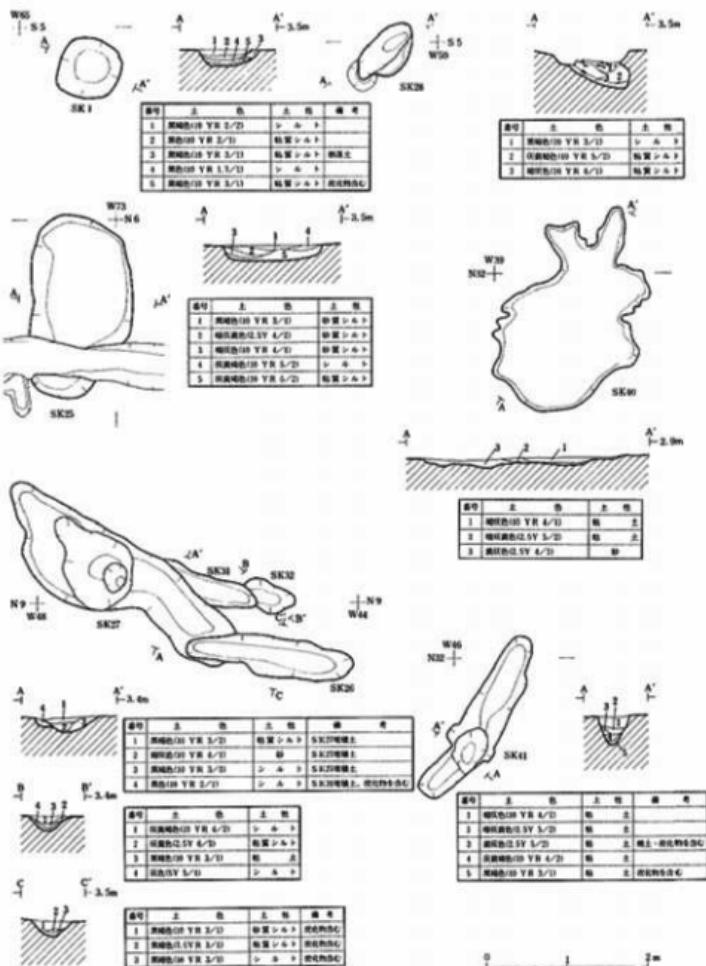
【S K28】長径90cm 短径50cmの楕円形を呈し、深さは46cmである。断面形は底面付近で東側が膨らむ。堆積土は3層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器鉢(第48図13.14、第49図1)、壺(第48図5、第49図6.8)、甕(第49図10.14.17)、石鐵(第32図2)が出土している。

【S K40】A区北部に位置する。長径2.7m 短径1.0mの不整形を呈し、深さは12cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は3層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器鉢(第48図7)、蓋(第48図4)、壺(第49図3)が出土している。

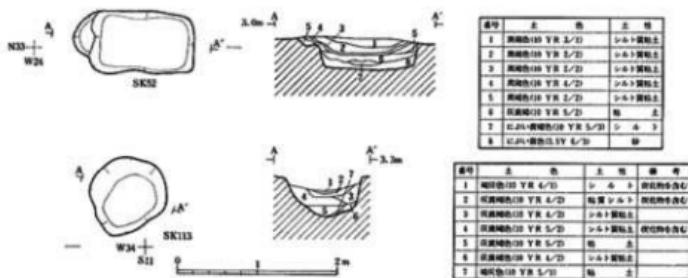
【S K41】A区北部に位置する。長径2.3m 短径50cmの南北に長い楕円形を呈し、深さは36cmである。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は5層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

【S K52】A区北東部に位置する。平面形は1.3×0.8mの隅丸長方形を呈し、深さは42cmである。断面形は壁がほぼ垂直にたち、底面は平坦である。堆積土は9層に分けられる。堆積土から弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

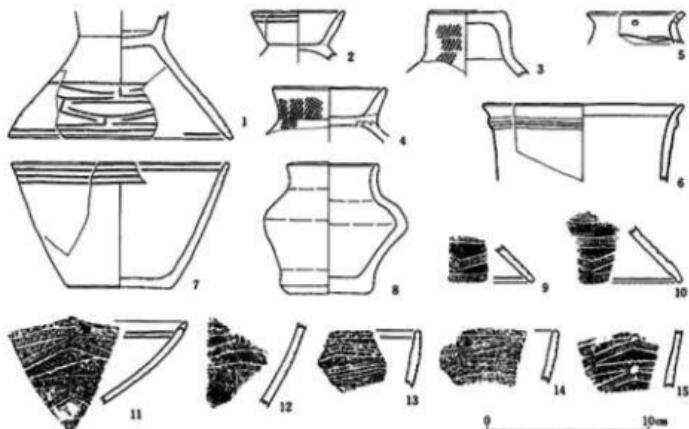
【S K113】径1.0mの円形を呈し、深さは50cmである。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は7層に分けられ、自然堆積土である。堆積土から弥生土器蓋(第48図1)、高坏(第48図11)が出土している。



第46図 土壌平面・断面図(1)



第47図 土壌平面・断面図(2)



番号	目次	種類	形状・寸法	通量	出発点	傾斜	傾向	持続						
1	A-E-S K13	骨生上面	直 2 口一深	13.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12-2
2	" S K26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	" S K25	-	直 2 口一深	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4	" S K40	-	直 2 口一深	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5	" S K28	直	口 細 長	(15.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	" S K27	-	-	(22.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	" S K40	直 2	-	12.47	6.4	7.8	右傾	左傾	内傾	外傾	-	-	-	12-1
8	" S K27	直	-	5.5	5.9	6.2	直傾	直傾	-	-	-	-	-	12-2
9	" S K23	直	口 細 長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	" S K27	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11	" S K13	直 2 口 2 深	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	" S K25	直 2 口 2 深	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13	" S K28	直 2 口 2 深	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	" S K28	直	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	" S K27	直	口 細 長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第48図 土壌出土遺物(1)



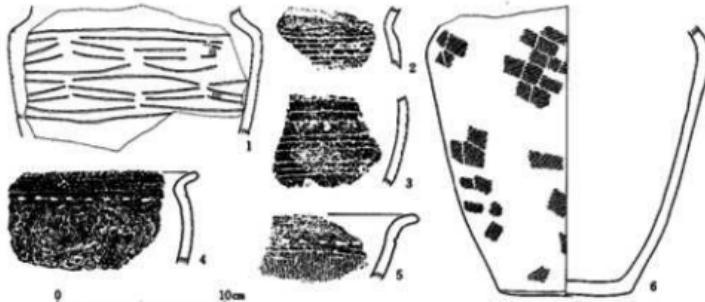
No.	出土地点・層位	種類	器形・分類	遺物性質	寸法 (mm)	周長 (cm)	高さ (cm)	備考
1	A3E・S328	陶器	盤	器	口縁部	-	-	直縁・浅腹・縦目録印文
2	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	中空骨柱に上毛文様 内面に横溝
3	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	U字溝文
4	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	横目録・直縁に上毛文様 縦目録印文
5	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	直縁に内凹した浅腹・付加縁裏文 (L.S+R)
6	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	横目録・直縁・斜縁に上毛文様 対側縁裏文 (L.S+R)
7	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	横目録・直縁・付加縁裏文 (L.S+R)
8	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	横目録・上毛文様 付加縁裏文 (L.S+R)
9	" " S328	-	-	-	-	-	-	横目録印文
10	" " S328	-	骨	骨質	-	-	-	横目録・直縁・縦目録印文
11	" " S327	-	-	-	-	-	-	-
12	" " S328	-	-	-	-	-	-	付加縁裏文 (L.S+R)
13	" " S327	-	-	-	-	-	-	横目録印文
14	" " S328	-	-	-	-	-	-	横目録下唇に二毛文の複数・付加縁裏文 (L.S+R) 縦目録印文
15	" " S328	-	-	-	-	-	-	横目録下唇に二毛文の複数・縦目録印文
16	" " S328	-	-	-	-	-	-	U字溝文
17	" " S328	-	-	-	-	-	-	U字溝文

第49図 土壤出土遺物(2)

### C. 小ピット・第6層出土遺物

A区南東部の微高地部で径20~30cm程の小ピットを第8層上面で多数検出しているが、その性格は明らかでない。堆積土から弥生土器、石器が出土している。SK83から石鏃(第32図9)が、SK97からノミ形石斧(第35図6)が出土している。

また第6層から弥生土器鉢(第50図1~3)、甕(第50図4~6)が出土している。1・2は頸部でくびれるもので、いずれも沈線による文様が施される。4・5は頸部下方に列点文が施される。



No.	出土品・種別	縦幅	横幅・直径	高さ	口径(cm)	底径(cm)	底高(cm)	性	系	参考図
1	土器・第6層・弥生土器	縦 2	横 3	2	2.5	2.5	0.5	丸錐・八方錐	植物茎葉印文	
2	-	-	-	-	-	-	-	丸錐		
3	-	-	縦	-	-	-	-	半円柱形による文	植物茎葉印文	
4	-	-	豊	口 縦 高	-	-	-	根莖下方に半圓柱形による文	水波文・植物茎葉印文 (L.H+R)	
5	-	-	-	-	-	-	-	根莖下方に半圓柱形による文	水波文・植物茎葉印文	
6	-	-	-	底一輪脚	-	2.8	-	水波文 (L.H+R)	植物茎葉印文	10-6

第50図 第6層出土遺物

## V 考察

### 1. 遺物について

#### (1) 遺物包含層出土の弥生土器について

遺物包含層出土土器は大半が弥生土器である。以下では弥生土器について扱う。弥生土器は実測図化資料 71 点、拓影図提示 129 点である。

#### （胎土・色調・成形・調整）

すべての土器の胎土に粒径 1~2mm の粗い砂粒が含まれており、砂粒には石英・長石が認められる。色調は、橙色、褐色、黒褐色など多様で、器種による偏りは見られない。甕のなかには、所々黒色を呈するものがある。また、底部付近に赤褐色を呈する部分が見られるものもあり、これは火熱をうけた痕跡と考えられる。

土器の成形は、手づくねによるミニチュア土器を除いて、観察できたものはすべて粘土積み上げによるものである。しかし土器の仕上げ段階の調整・地文のため粘土の幅などは不明なものが多い。粘土の積み上げ痕（接合痕）が観察できるのは、口縁部と頸部の間、頸部と体部の間、体部と底部の間などの屈曲部分に多い。高壺では脚部と壺部、蓋ではつまみ部と体部の剥離が多く見られる。また底部外面には、成形時に敷いたものの痕跡が認められるものが多い（第 31 図）。木葉痕（1・2）、網代痕（4~8）、織物痕（3）などがあり、木葉痕が多く認められる。

器面調整にはヘラケズリ・ハケメ・ナデ・ヘラミガキが認められる。特に甕の外面で地文が全面に及ばず、前段階のハケメが残るもののが見られる。またナデ・ヘラミガキは最終調整として、また文様施文後の調整として用いられている。鉢・高壺・蓋は主にヘラミガキが施され、壺もヘラミガキが主体となる。甕の口縁部外面はヨコナデ調整が施されるものがほとんどを占める。

地文及び沈線間に施されるものの種類には縄文と植物茎回転文が認められる。全体の中では縄文を施すものが 70% 前後を占める。

縄文には、単節縄文（L R）、単節縄文（R L）、付加条縄文（L R + R）が認められる。全体的に L R 縄文が多く、次いで付加条縄文（L R + R）が見られ、R L 縄文は数点確認されただけである。これらの回転方向は横位もしくは斜位である。また縄文の節の大きさには違いがあり、甕・壺よりも鉢などに比較的節の小さい原体が用いられる傾向が見られる。なお、大形壺には節の大きい原体が用いられている。

植物茎回転文は、一見ハケメのように見える圧痕のなかに小刺突痕が見られるものであ

る(第11図版1・2)。縄文より施文される量は少ないが、鉢・蓋・壺・甕に認められ、土器の約20%前後に施される。横方向に回転させるものが多いが、斜位方向のものも若干認められる。また植物の種類はクワ科またはアカネ科などの茎と考えられる(註)。

赤彩の痕跡は認められない。本来赤彩されていたものも、摩滅のために失われたものと考えられる。

なお、鉢・蓋・高坏・壺・甕の口縁部付近に1個または2個一組の穿孔が見られるものがある。これはフタをとめるための孔と考えられる。

(註)植物莖回転文の原体については、山内清男が「偽縄文」のひとつとしてあげ、瓜の莖と考えたようである(山内清男; 1979)。また須藤隆は会津若松市墓葬遺跡出土土器の検討でくわ科の「かなぐむら」あるいは「からはなそう」の可能性を指摘しており(須藤隆他; 1984)、南小泉遺跡出土土器の検討でもくわ科の「かなぐむら」としている(須藤隆; 1990)。

#### 〈土器の分類〉

土器には、鉢・大形鉢・高坏・蓋・大形蓋・壺・大形壺・甕などがある。(第51図)

〔鉢〕鉢は器形から以下のように分けられる。

I類: 底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外傾もしくは内湾する。口径は14cm前後である。形態から①・②に分かれるが、破片資料では明確に分けられないものが多い。

①口径と器高がほぼ同じもの(1・2・3)

②器高が口径よりも大きいもの(4)

II類: 頸部でくびれるもので、口縁部がやや内湾もしくは直立する。口縁部形態は平口縁が主体となり、緩やかな波状をなすものが一点認められる。口径15cm前後のもの(5・6)が主体となるが、口径10cm前後のもの(7)も見られる。

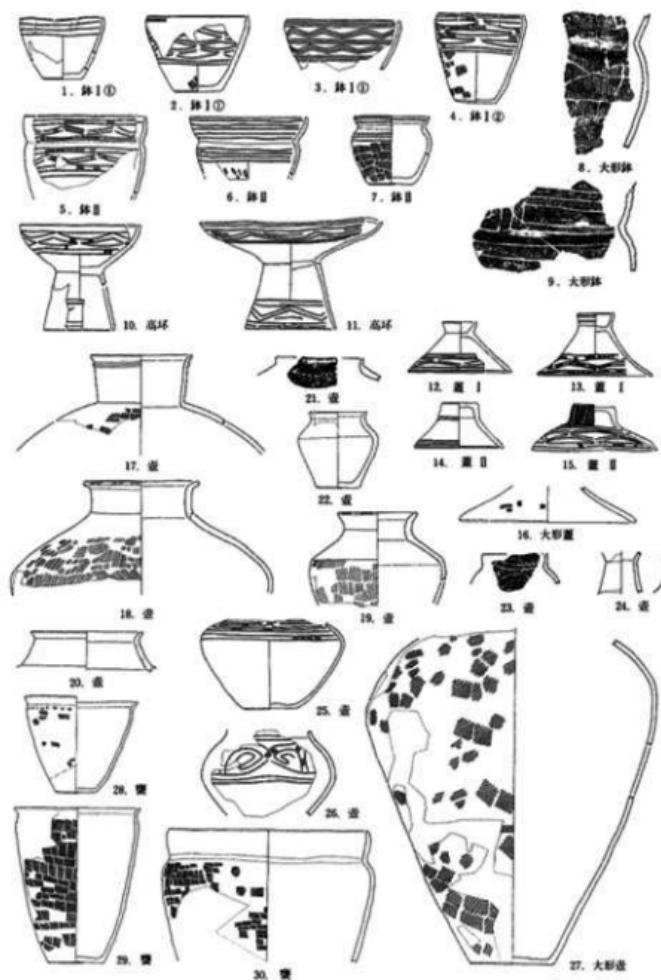
〔大形鉢〕体部の破片資料のみで全体の器形は不明であるが、頸部でくびれるもので、推定の口径が25cmをこえるものである。(8・9)

〔高坏〕完形に復元されたものは少ない。脚部は直線的に立ち上がり、坏部に、深い椀状を呈するもの(10)と、浅い皿状を呈するもの(11)がある。また坏部の口縁部形態は平口縁であるが、突起をもつもの、刻目をもつものがある。

〔蓋〕蓋はつまみ部の形態から以下のように分けられる。口径は10~15cmである。

I類: 台状のつまみ部をもつ。体部から口縁部にかけて直線的もしくは外反気味に開く。(12・13)

II類: 天井部が平坦で、体部が強く屈曲する。体部から口縁部にかけて、内湾気味もしく



第51図 遺物包含層出土弥生土器の分類

1~26. 稲凡M  
27~30. 稲凡M

は直線的に開く。(14・15)

〔大形蓋〕口径が20cmを越えるものである。口縁部はほぼ直線的に開くもの、内湾気味に開くもの、外反気味に開くものがある。なお、つまみ部の形態は不明である。(16)

〔壺〕器形のわかるものがほとんどなく、頸部から口縁部にかけての形態にいくつかの種類が見られる。また胴部には胴部最大径の位置が、上部にくるもの(25)と、中央部にくるもの(26)がある。

- ・胴部から頸部にかけて強く屈曲し、頸部は直立、口縁部は外反する。口縁部下方に突帯がめぐる。(17)
- ・口縁部が外反気味に開く。頸部が長いものと不明瞭なものがある。また口径の大きさには、口径14cmのもの(18)と口径11cmのもの(19)が見られる。
- ・頸部から口縁部にかけていたん内傾し、口縁端部付近で外反する。(20)
- ・口縁部が「く」の字状に短く外反する。(21・22)
- ・口縁部が短く内湾気味に直立する。(23)
- ・頸部が細口になり、口縁端部で外反する。(24)

〔大形壺〕胴部最大径が上部にあり、最大径が50cm前後の大形のものである。なお、口縁部形態は不明である。(27)

〔甕〕頸部はかるくくびれ、肩部はゆるやかに膨らむ。口縁部は外反するが、強く外反するものや軽く外反するものが見られ多様である。大きさは器高が17~27cmとかなり幅がある。また口径と器高がほぼ同じもの(28)と口径に対して器高が大きく、筒状になるもの(29)がある。なお、体部から口縁部にかけて屈曲し、口縁部が内湾するものが見られる(30)。

#### 〈文様〉

文様としては、沈線によって構成されるものと列点文・竹管による刺突が認められる。さらに沈線によって構成されるものには、沈線のみで構成されるものと沈線間に繩文が施されるものがある。これらのうち沈線によって構成される文様は、鉢・高坏・蓋・壺で頗る見られる。また列点文は甕に多く見られ、鉢・高坏・蓋・大形蓋には認められない。

多くの甕および壺の一部に見られる列点文には、半截竹管状の施文具で器面に斜め下方から施したもの、先端の角ばった施文具で横方向に施したもの、先端の尖った棒状の施文具で横方向に施したものがある。また竹管による刺突は器面に垂直に施したものである。

鉢・高坏・蓋・大形蓋について見ていくと、これらには沈線によって構成される文様が施される。地文のみのもの、沈線・地文が施されないもの(ミガキ調整のみ)は蓋・大形蓋にのみ認められる。沈線によって構成される文様を見ていくと、文様の種類には次のよ

うなものがある（第 52 図）。なお、文様の施文部位は、鉢は外面体部上半、高壺は壺部上半と脚部下半、蓋・大形蓋は口縁部から体部である。

A 類：文様帯の上下を一条ないし二条の平行沈線で区画し、弧を横方向に連続させて一周させるもの。沈線間には縄文または植物茎回転文が施される。さらに弧の組み合わせによって a ~ c に分けられる。

a : 一条の上向きの弧を施し、上下の弧を沈線で区画するもの

b : 二条平行の上向きの弧を施すもの

c : 一条の上向きの弧と下向きの弧を上下に施すもの

B 類：文様帯の上下を一条ないし二条の平行沈線で区画し、二条の平行沈線を山形状に連続させて一周させるもの。山の頂部と下部には縦方向の短かい沈線が施される。中央を沈線で区画し、その上下で平行に山形状に連続させるものと、対称に連続させるものがある。沈線間には縄文または植物茎回転文が施される。

C 類：上に二条の平行沈線を山形状に連続させ、下に二条平行の上向きの弧を連続させたもの。山の頂部と下部には縦方向の短い沈線が施される。沈線間には縄文または植物茎回転文が施される。

D 類：三条の平行沈線を山形状に施すもの。文様帯の上下、中央を三条の平行沈線で区画する。

E 類：数条の平行沈線を施すもの。

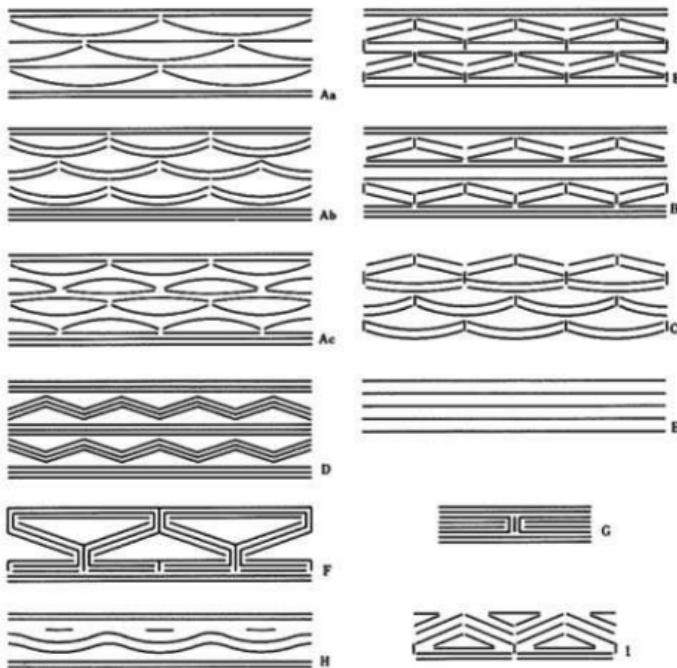
F 類：三条の平行沈線で五角形状に区画するもの。沈線は連続するものと、途切れるものがある。

G 類：沈線で「コ」の字状に区画し、その上下、区画内に二条の平行沈線を施すもの。

H 類：文様帯の上下を二条の平行沈線で区画し、二条平行の沈線を波状に施すもの。波の上部と上部を結ぶように沈線が施される。

I 類：沈線で三角形状に区画するもの。沈線間には縄文または植物茎回転文が施される。

その他の壺、大形鉢についてみていくと、沈線によって構成される文様と地文のみのものがある。沈線による文様には多様な種類が見られるが、破片資料のため文様構成が不明なものが多い。確認できた文様の種類には、前述の E ~ F 類に類似する文様のほかに渦巻状に区画するもの、同心円状に区画するもの、方形状に区画するものなどが認められる。文様には沈線のみのものと沈線間に縄文または植物茎回転文が施されるものがあるが、確認できたものでは後者が多く認められる。文様の施文部位はいずれも体部上半から頸部に



第52図 文様分類図

		Aa	Ab	Ac	B	C	D	E	F	G	H	I	地文のみ	イガキ調査	計
A	①	2				1	1	1	1						6
	②	1													1
	不明	8	1	3	1			1	3						27
	Ⅲ	1		5			13		1						20
B環													1		2
	环部	1		1			1	2							5
	脚部	2					6								8
C	Ⅰ	2		1								1			4
	Ⅱ	1					1								2
	不明	4			1	1					1	1			6
大形器		1		1			1					5	1		9
	計	1	23	1	12	2	1	25	6	1	1	2	6	1	82

第3表 器形と文様の関係

かけてである。

#### （器形と文様の関係）

分類した文様が鉢・高坏・蓋・大形蓋の各種類において施される個体数を見ると第3表のようになる。なお数値は実測図化資料、拓影図で文様構成が確認できたものの個体数を示している。

大形鉢・壺・大形壺については、破片資料のため文様構成が不明なものが多いため、いずれの種類にも沈線によって構成される文様が施されるものと、地文のみのものが見られる。この中で壺については沈線による文様が多く見られ、E・F類に類似するものや渦巻状、同心円状、方形状に区画するものなど多様な種類が見られる。また壺の一部で頸部下方に列点文・竹管による刺突が施されるものが認められる。なお、大形壺と確認できた1点は地文のみである。

甕は体部外面に地文が施され、頸部下方に列点文が施されるものが主体をなしている。列点文以外では、竹管による刺突が施されるもの、沈線が施されるもの、地文のみのものがある。

本土器群の器形と文様の関係は以下のようにまとめることができる。

- 鉢・高坏・蓋・大形蓋のすべての種類にわたってAb類、B類、E類の文様が施されている。全体の中では特にAb類、E類の文様が多く見られ、普遍的な文様と考えられる。
- 鉢I類は多様な文様が施されるが、主体となる文様はAb類(10/24)である。
- 鉢II類は主体となる文様はE類(13/20)であり、次いでB類(5/20)が多く施される。
- 高坏は個体数が少ないが、脚部においてE類(6/10)の文様が多く施される傾向が認められる。
- 蓋はI・II類にかかわらず、主体となる文様はAb類(7/14)である。
- 大形蓋は地文のみ(5/9)が主体となり、沈線による文様は少ない。
- 壺は沈線による文様の種類が多様であるが、その文様構成は不明なものが多い。
- 甕は頸部下方に列点文が施されるものが主体となる。

#### （土器群の位置付け）

遺物包含層出土の弥生土器群は、種類には鉢・大形鉢・高坏・蓋・大形蓋・壺・大形壺・

甕などがあり、また文様には磨消縄文（註）が施されるAb類や沈線のみで構成されるE類が多く見られる。こうした特徴から本土器群は、宮城県内の弥生時代の土器編年では多賀城市樹形圓貝塚出土資料を模式とする樹形圓式（伊東；1958）に比定される。この樹形圓式の土器が最も多く出土し内容が豊富なのは仙台市南小泉遺跡である。土器は霞ノ目飛行場の拡張工事の際に多量に出土しており、層位・遺構との関係は不明であるが、須藤隆によって検討がなされている。その内容を見ると、種類には甕・蓋・鉢・高坏・壺などがあり、甕は口頸部にヨコナデ調整が施され、頸部に列点文がみられる。また鉢の文様構成には連弧文が最も多く、次いで変形工字文系のもの、さらに連続波状文、連続山形文、平行線などが見られる。そして図示されている土器を見る限りでは、頸部でくびれる器形で、磨消縄文が施されず沈線だけで文様を構成する土器を新段階の土器群として位置付けている（須藤；1973・1984・1990）。

以上のような南小泉遺跡出土の土器群と本遺跡出土の土器群を比較すると、器形では鉢、蓋、甕に共通する特徴を持つものが多く見られ、文様でも本遺跡のAb類と南小泉遺跡の連弧文が同じであり共に文様の主体を占めている。甕についてみると、両遺跡とも口頸部がヨコナデ調整され、頸部下方に列点文が施されるものが主体となっている。また体部外面の地文はL R縄文が多く、植物莖回転文（擬縄文）が比較的高い頻度で施される点でも共通している。さらに本資料における鉢II類の器形は、南小泉遺跡出土資料の中で新段階に位置付けられた土器群に認められる。また文様についてみると、新段階の土器の中で図示されたものには（須藤；1990）本資料の沈線のみで文様が構成されるE類（南小泉遺跡における平行線に相当）・G類に類似する文様が認められる。

このように本遺跡の包含層出土の土器群と南小泉遺跡出土の土器群の間には共通する様相が多く見られることから、本遺跡の包含層出土の土器群は南小泉遺跡出土の土器群にほぼ対応していると見られる。

一方本資料の鉢II類では沈線のみのE類が主体を占めている。また鉢II類には磨消縄文が施されるB類の文様も認められるが、この磨消縄文は樹形圓式に後続する円田式期では消滅する手法である。したがって磨消縄文が施されるB類が少なく沈線のみが施されるE類の文様を主体としている本資料の鉢II類と、これとほぼ対応すると見てきた南小泉遺跡における新段階の土器群は、樹形圓式の中でも新しい様相を示しているといえよう。

（註）縄文時代から見られる磨消縄文は沈線で区画した後に縄文を磨り消すものであるが、本遺跡の土器群では沈線で区画した後に縄文を施すもの（充填）が多く見られる。

## (2) 石器

高田B遺跡の石器組成表と石材組成表をそれぞれ第4表、第5表に示した。石器の所属時期については、出土土器が弥生時代中期の楕円形圓式にほぼ限定できるので、遺構および遺物包含層出土資料をまとめて楕円形圓式の時間幅の中で一括のものとした。

### ①組成(第4表)

石鏃の点数が非常に多く、剝片石器の半数以上を占める。その他の定形石器のなかでも、石鏃に次いで多い石錐が剝片石器の10%を占める程度で、数量的に組成上の際立った特徴は指摘できない。また範状石器は認められず、不定形石器に分類した中で、スクレイバー状の刃部を持つものは数点認められる。弥生時代を特徴づける石包丁および磨製石斧類の、石器類(いわゆる tod 類)の中での比率はそれぞれ3%、5%である。円礫あるいは亞角

剝片石器	石 鏃 26	148	複数安山岩製石器類	村 駒 石 鏃 2	41
	矢 穴 1			石 鏃 26	
	石 鏃 16			石 鏃 21	
	石 鏃 3			石 鏃 1	
	楕 圓 形 石 鏃 8			石 鏃 4	
	不 定 形 石 鏃 28			石 鏃 2	
	その他の 不 明 9			石 鏃 8	
	石 鏃 7				
磨 製 石 器	石 鏃 丁 9	23			
	磨 製 石 器 14	274			

第4表 石器組成表

	珪質頁岩	沈 穀 石	珪化組成岩	鈍 玉	玉 鋸	は 實 石	黑 磨 石	往 化 木	安 山 石	計
石 鏃	12	22	7	9	9	37	2			78
大 鏃 器										1
石 鏃	5	9								14
石 鏃	2	1								3
楕 圓 形 石 鏃		1			3	1	3			5
不 定 形 石 鏃	8	10	3	2	4			1		29
その他の 不 明	1	2	1	1	3	1				5
石 鏃	1	3	3							7
計	29	49	14	12	19	19	5	1		148

	珪質頁岩	シリト岩	緑 穀 石	粘 板 石	砂 石	瓦 穀 石	角 頭 石	結 晶 片 石	安 山 石	計
石 鏃 丁				3			5	1		9
磨 製 石 器	2	2		2	5		2		1	14
打 制 石 器									2	2
板 状 安 山 岩 製 石 器									39	39
磨 石									26	26
磨 砂 石			4						17	21
磨 砂 石									1	1
磨 砂 石			2			1			1	4
磨 砂 石									2	2
石 鏃		1			3				6	8
計	2	2	6	5	8	1	7	1		120

第5表 石器・石材組成表

礫を素材とした礫石器は23%という高い割合を占めている。

#### ②石材(第5表)

網片石器類では流紋岩が三分の一を占め、次いで珪質頁岩が20%、以下玉髓、珪質岩、珪化凝灰岩、碧玉と続き、黒曜石、珪化木はほんのわずかである。器種ごとに見てみると、点数は少ないものの石錘や石匙、尖頭器には流紋岩が珪質頁岩しか用いられない。逆に楔形石器では上記の二石材はほとんど用いられず、玉髓や他にはあまり用いられない黒曜石などを利用している。楔形石器には、機能と関係した硬い石材との強い結びつきが、縄文時代以来の伝統として存在する可能性がある(東北歴史資料館; 1984)。その他の石器類では、板状安山岩製石器はもちろん、打製石斧や礫石器のほとんどに安山岩が用いられている。ただし磨製石斧類や石皿には砂岩も多く用いられている。石包丁に多く用いられている角閃石片岩は県南地方、特に阿武隈山地に多く認められるものである。

#### ③石鎌

I類…有茎のもの、II類…無茎のものに分けられる。I類はさらにA…細身のもの、B…やや幅広のものがあり、それぞれの点数はIA類は55点、IB類は22点、II類はわずかに1点のみである。ただしIA類とIB類の変異は漸移的であり明確に区別できるものではない。II類は両側面に抉りがはいり、基部が凹基となるものである。抉りが浅く、器体の中央部に入るという点でいわゆるアメリカ式石鎌とは異なるものである。

#### ④石錘

I類…棒状のもの、II類…錐部とつまみ部の境が明瞭で、長い錐部をもつもの、III類…錐部とつまみ部の境が不明瞭のものが認められる。これらは縄文時代以来の伝統を引く形態であるが、剥片の一端に短い錐部を作出したものは認められない。

#### ⑤不定形石器

大きく5類型に分類できる。I類(5点)…縁辺の片面にスクレイバー状の連続する二次加工の施されるもの、II類(3点)…縁辺の両面から連続する二次加工の施されるもの、III類(7点)…折断面を打面として、器体の平面に二次加工の施されるもの、他の縁辺にも普通の二次加工が施される。IV類(6点)…両面加工のもの。平面形態にまとまりはなく、石鎌などの未成品の可能性もある。V類(7点)…その他。

#### ⑥石核

チョッピング・トゥール状を呈するものと多面体のものが認められる。いずれも小型で、規格的な剥片は剥離されていない。

#### ⑦石庖丁

半月形外彎刃と紡錘形直線刃の2種類認められる。しかし紡錘形直線刃は1点のみである。

り、未成品も半月形外彎刃に含まれる。破損品はすべて孔のところで折れている（第35図1）。

#### ⑩磨製石斧類

ノミ形石斧（1点）、偏平片刃石斧（5点）、大型蛤刃石斧（2点）、不明（6点）である。偏平片刃石斧の中には断面形が橢円形に近いものもあり、偏平と呼ぶには躊躇される例もある（第35図9）。

#### ⑪板状安山岩製石器類

平面形態によりI類…三角形（3点）、II類…台形（5点）、III類…長方形（3点）、IV類…不明（28点）に分類できる。全体の出土点数は多いが、そのほとんどは不明としてIV類に分類した破片である。各類型の重さの平均値はI類281g、II類206g、III類87gであり、III類は重さと比例して大きさも他の類型に比べて小さい。I類、II類は刃部が内彎する傾向があり、刃部が外彎するIII類とはこの点においても異なった特徴がある。これらの石器の一部には肉眼で観察できる磨面と擦痕が認められる。磨面には強弱があり、擦痕は顕微鏡による使用痕の観察結果（山田；1987）と同じように、基本的には刃部と平行している。

打製石斧と分類したものの中、大きなもの（第36図3）は、板状安山岩製石器と同じ石材を用いている。そして縦長で基部がやや細くなるという平面形態は石鍬に類似しているかもしれない。しかし從来石鍬と呼ばれているもの（太田他；1991）に比べて小型で分厚く、刃部も一部が平坦であることなどの相違点があるため打製石斧と分類した。

#### ⑫礫石器類

磨石、凹石、敲石、石皿、および磨凹石、磨敲石があり、ほとんどが縄文時代のものと同様の特徴を有する。

本石器群の特徴は以下のようにまとめることができる。

一、剝片石器の中で石鍬の占める割合が高く、そのほとんどが縄文時代晩期と形態的類似性の認められる細長い有茎鍬である。アメリカ式石鍬はないが、小型で両側辺に抉りの入った特徴的なものが1点認められる。

二、石錐以下の剝片石器類、および素材の礫に加工を施さない礫石器類は、基本的に縄文時代との大きな形態的相違点は指摘できない。

三、弥生時代を特徴づける石器類、石庖丁とノミ形石斧、偏平片刃石斧、大型蛤刃石斧などの磨製石斧類が石器類（いわゆる tod 類）のなかで一割近い比率を占めている。そして大型蛤刃石斧を除く他の石器の多くは、阿武隈山地を中心に産出する石材を利用してあり、当該期の仙台市周辺の遺跡における石材利用と共通した様相を示している。

四、仙台市の大規模水田遺跡である富沢遺跡などで出土し、弥生時代中期中葉を中心に位置づけられている「大型板状安山岩製石器」（斎野；1992）と同様の特徴を持つ石器もかなりの比率で出土している。

五、本石器群の特徴は、石鎌を除いてやや貧弱ながら縄文時代以来の系統を引く剝片石器類と豊富な礫石器類という在來的・伝統的な要素に、弥生時代を特徴づける石庖丁とノミ形石斧、偏平片刃石斧、大型蛤刃石斧などの外来的な要素および出自不明な板状安山岩製石器が加わったと把えることが可能であろう。これは極言するならば、縄文時代以来の伝統的生活様式に石庖丁で代表される稻作農耕が加わった生活様式が背景にあるということを示唆しているのかもしれない。

## 2. 遺構について

### (1) 弥生時代の遺構について

弥生時代の遺構としては、水田跡、建物跡、土器埋設遺構、遺物包含層がある。遺物包含層については前項の土器の検討から楕円形圓式に位置付けられることがわかった。以下では、包含層以外の遺構の時期および特徴について検討していく。

#### 〈遺構の時期・年代〉

##### a . 水田跡・水路跡

水田跡に近い時期の遺物としては、水田耕作土、水路堆積土から弥生土器・石器が出土している。このうち弥生土器は遺物包含層出土土器と類似する特徴をもつ。ところで自然堆積層と考えられる第6層からも遺物包含層と同じ特徴をもつ土器が出土している。この第6層に覆われること、そして出土遺物から水田跡は楕円形圓式期に属すると考えられる。

##### b . 建物跡・柱穴

S B148・149・150 建物跡および組合せの不明な柱穴は遺物包含層に覆われてあり、また柱穴から出土している弥生土器はその特徴から楕円形圓式と考えられる。このことから建物跡・柱穴は楕円形圓式期と考えられる。

##### c . 土器埋設遺構

土器埋設遺構は5基検出している。埋設された土器はいずれも遺物包含層出土土器と類似する特徴をもつことから、土器埋設遺構は楕円形圓式期と考えられる。

##### d . 溝跡・土壤・小ピット

S D2溝跡およびS D18溝跡は、堆積土からすべて破片資料であるが楕円形圓式の土器が出土している。また遺物包含層との新旧関係は不明であるが、溝の堆積土1層が包含層と

類似することから、包含層の形成時期に近いと考えられる。こうしたことから年代は樹形圓式期と考えられる。

土壤は 11 基検出しているが、いずれも堆積土から樹形圓式の土器が出土している。また堆積土が遺物包含層と類似することから、包含層の形成時期に近いと考えられる。こうしたことから年代は樹形圓式期と考えられる。

小ピットの中で遺物が出土しているものを見ると、いずれも樹形圓式の土器であり樹形圓式期と考えられる。また遺物が出土していない小ピットについても、形状、規模、堆積土が樹形圓式の土器を出土している小ピットに類似することから、樹形圓式期と考えられる。

#### 〈水田跡について〉

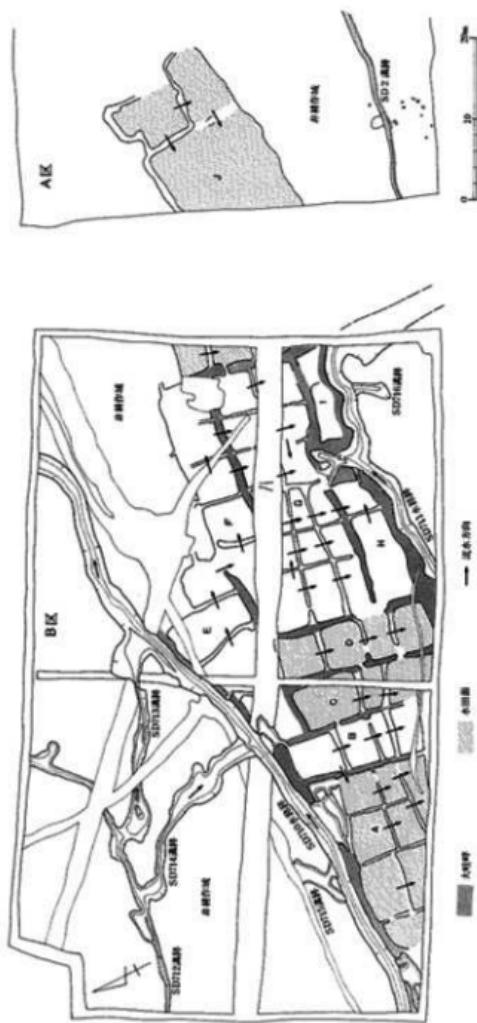
水田域は S D710 水路跡と S D711 水路跡にはさまれた帯状の低地に広がり、さらに調査区の南西側に広がることが考えられる。耕作土は第8層を母体とする灰色の粘質シルトである。

水田の区画方法は二段階に分けられる。第一段階として大畦畔によって A ~ J の 10 区画に分け（第 53 図）、そして第二段階として大区画のなかを小畦畔によって区画している。大区画の形状は A・J は不明であるが、B~D は南北に、E~I は東西に長い区画となる。また水利施設としては、S D710 水路跡が取水機能、S D711 水路跡が排水機能をもった水路と考えられ、それぞれの水路に取水・排水施設と考えられる水口が設けられている。ところで第 53 図は水田間の標高差から流水の方向を推定したものである。この図から、水口 b・c・d から取水し南に流水させていることがわかる。また水口 e・f は大区画 E~I を中心とした水田からの水を排水していることがわかる。なお、水口 a は調査区外の水田に取水したものと考えられる。

宮城県内で弥生時代の水田跡が発見されている遺跡には富沢遺跡がある。富沢遺跡では樹形圓式以前から天王山式まで弥生時代各時期の水田跡が層位的に検出されており、このうち樹形圓式期とされる 28 次・11a 層水田跡は、小区画の形状が長方形もしくは正方形、一区画の面積が平均 45 m<sup>2</sup>前後である（佐藤；1988）。大畦畔で区画した後に小畦畔で区画しており、本遺跡と類似した特徴を呈している。

水田は富沢遺跡、本遺跡とも低地に立地している。富沢遺跡では排水機能をもった水路は検出されている（佐藤；1988）が、取水機能をもった水路の明確な検出例はなく、おもに自然湧水が利用されていたと推測されている（太田・平間；1991）。今回本遺跡では水田に伴う取水・排水機能をもった水路が確認され、富沢遺跡とは違った様相が認められる。

第3図 第7番水田の大区画と水耕状況



こうした水田経営の違いは、地下水位や土壤といった立地条件の違いを反映した可能性が考えられる。

#### （弥生時代樹形圓式期の遺構の様相）

樹形圓式の遺構には水田跡、建物跡、土器埋設遺構、溝跡、土壤、小ピットがある。これらの遺構の分布を見ると、B区南半部からA区西半中央部にかけての低地部に水田跡、A区南半部の微高地部に建物跡・柱穴、土壤、小ピットが確認されている。このうち建物跡・柱穴は第1次調査区でも検出されており、調査区東側に延びることが考えられる。また建物跡として組合せがわかったものは3棟であるが、柱穴が多数検出されていることから、建物跡は多数存在していたと思われる。なお組合せがわかった建物のうち2棟は1間×1間という小規模なものである。

またS D2 溝跡はA区の中央部を東西方向に延びる溝である。その北側には水田跡、南側には建物跡・柱穴、土壤、小ピット群が分布しており、S D2 溝跡を境に北と南で遺構の様相に違いがみられる。こうしたことからS D2 溝跡は水田域と集落域を区画している溝の可能性が考えられる。ところでS D18 溝跡もS D2 溝跡と平行しており、土器埋設遺構が集中している部分に位置することから、S D2 溝跡に伴う可能性が考えられる。なお土器埋設遺構はS X 60 を除けば、すべてA区中央部のS D2・18 溝跡付近で検出され、分布が水田域と集落域の境に集中している。

B区北半部の微高地部では遺構は検出されなかった。自然流路が見られることから、居住には適さない地域であったと考えられる。

なお、東側に隣接する仙台市教育委員会で実施した調査区で弥生時代の河川跡が検出されている（第2図）。河川跡は東西方向に流れしており、本調査区の南を東流していることが推定される。本調査区で確認された低地、微高地はこの河川によって形成された自然堤防と後背湿地の一部と考えられる。

#### （2）古代の水田遺構について

今回の調査で発見された第4層の水田跡の畦畔はいずれも真南北方向もしくは真東西方向で、これらは古代の条里地割に関連する水田区画の一部である可能性が高い。

仙台周辺で条里型土地割りに関連する水田跡が発見されている遺跡として、本遺跡の西方6kmに所在する仙台市南部の山口遺跡・富沢遺跡（太田・平間；1991他）が広く知られている。しかし、調査区が所在する仙台市東郊では今回が初めての検出例である（註）。

これまで仙台市東郊は、明治時代の地籍図や空中写真から条里型の土地割りが確認される地域として多くの論考で紹介されてきた（伊東；1950・神；1988・平間；1989）。しかし、近年は市街地化が進み、条理型の土地割りの痕跡は急速に失われつつある。そうした中で、今回の調査は、発掘調査により古代の条里地割に関連するとみられる水田跡が検出された例として貴重である。

以下では、発見された古代の水田跡の構成について概説し、これらと富沢遺跡の条里型土地割りによるとみられる水田跡との比較検討をおこない、さらに地籍図や空中写真で検討されている仙台市東郊の条里型の土地割り（以下では「表層条里」と呼ぶ）との関係について検討したい。

（註）本遺跡の北西約2kmに位置する仙台市神棚遺跡（木村；1992）では表層条里の坪境の区画推定線とほぼ一致する位置で柱列が発見され、条里型の土地割りが存在した可能性が指摘されている。

#### 〈高田遺跡における古代の水田跡の構成と変遷〉

高田遺跡における古代の水田の畦畔のうち、4- a・b層の両時期を通じて継続しているのは真東西方向の大畦畔No.1と真南北方向の中畦畔No.2の二本である。これらは後に検討するように、条里区画の坪境にあたる可能性が高い。

他の中・小の畦畔は位置に異動があり、水田の区画に変更がみられる。また、SD706溝跡は4- b層の水田には伴わず、4- a層の水田で新たに設定された水路であり、水利施設にも変更がみられる。水田跡の変遷を概括すると以下のようになる。

【4- b層】大畦畔を境として北半に3区画、南半に2区画の水田跡がある。これらの水田への給水・排水についてみると、大畦畔の北辺に位置するSD704・708溝跡が北側の水田の排水と南側の水田への給水を兼ねていたものと考えられる。水田の1区画の全体の形や規模がわかるものはないが、B区北半中央の区画の東西幅は33mである。

【4- a層】大畦畔を境として北半に5区画、南半に2区画の水田跡がある。東西方向の大畦畔No.1と南北方向の中畦畔No.2は4- b層のものが踏襲されている。

水田への給水・排水についてみると、北から南に流れるSD706溝跡が、大畦畔の北縁で止まりここが土壤状となり、そこから東流するSD708溝跡が分岐している。北側の水田の排水はSD706溝跡によって一旦ここに集まり、ここからSD708溝跡により南東側の水田へ給水されたものと考えられる。なお、このSD706・708溝跡の合流点は、後に示すように条里区画の坪境の南東隅にあたる位置にあると考えられる。

水田の区画の全体の形や規模のわかるものはないが、B区北半の区画の東西幅は17m

33m 南半では 66m のものがある。

[3 層] S D 706・709 溝跡の上層に灰白色火山灰が含まれていることから 3 層の時期にも、4-a 層の畦畔や水路の位置は踏襲されていると考えられる。しかし、下層にはみられない歎跡が畦畔 No. 3 と No. 4 の間の地域で確認されていることから、4-a 層の水田域のうち S D 706 溝跡沿いの地域が畠地に転用された状況がうかがえる。

#### （条里型地割との関係について）

発掘によって発見された水田跡と条里地割との関係を検討するためには、古代の水田跡が広範囲に確認され、しかも水田区画の方向性、規模の計測値を得られるような調査例が蓄積される必要がある。しかし、仙台市東郊での古代の水田跡の調査は今回が初めてであり、条里地割との関係についての詳細な検討はおこなえる段階ではない。ここでは今回の調査成果を古代の水田跡の調査例が豊富な山口遺跡・富沢遺跡の成果や仙台市東郊の表層条里の研究成果などと比較し、基礎的な検討を加えておきたい。

#### 山口遺跡・富沢遺跡との比較

山口遺跡・富沢遺跡では、発見された水田跡が条里型地割によるとみる根拠として、①畦畔などの方向がほぼ真南北・東西方向をとること、②規模の大きな畦畔が 107~110m ほどの間隔で確認され基本となる区画が一町四方の方形とみられること、などが示されている（太田・平間；1991 他）。

今回の調査区 B 区で検出された真東西方向の畦畔 No. 1 や真南北方向の No. 2 は規模や方向が富沢遺跡で条里地割の基幹となる坪境の畦畔とされるものと類似している。また、4-b 層の水田で、東西の大畦畔を境に南側の畦畔 No. 2 と北側の畦畔 No. 4 がずれているが、このような例は富沢遺跡の坪の隅とみられる位置で確認されている。さらに、4-a 層で検出された溝跡 S D 706 と S D 708 は、畦畔 No. 1 と No. 2 の交点で合流し、その合流点は深く土壤状を呈している。これらは北部の坪内を巡った用水が S D 706 溝跡を経て坪の南東隅に位置する土壤状の部分に集まり、S D 708 溝跡を通じて南側の坪へ配水されたとみられる状況を示すものであるが、このような施設の類例は富沢遺跡でも坪の隅とみられる位置で確認されている（平間；1991 368 ページ）。

これら坪境にあたる畦畔 No. 1 や No. 2 に対し、時期によって位置が変動する小畦畔は、坪内を細分するためのものとみられる。4-a・b 層で確認された畦畔間の距離をみると、17m・33m・66m などの計測地が得られる。これらはいわゆる長地型・半折型などの整然とした地割とは異なるが、水田の東西方向の幅が 17m( およそ 1 町の 6 分の 1 ) の倍数となる数値を示していることから、なんらかの規則にもとづいた地割がおこなわれて

いた可能性がある。富沢遺跡の調査でも多くの真東西・南北方向の小畦畔による大小の水田区画が検出されている長地型・半折型とみられる地割は確認されていない。

以上のように富沢遺跡の調査成果と比較すると、今回高田遺跡で発見された真東西方向の大畦畔No.1と真南北方向の中畦畔No.2は、条里区画の坪境の畦畔である可能性が高いことが指摘できる。ただし、水田区画の形態や規模、基準線の方向などの詳細な比較は困難である。



第54図 仙台東部条里と調査地点（神：1988）に加筆・修正

### 仙台市東郊の表層条里との関係（第54図）

周辺地域の主な遺跡の位置関係をみると、陸奥国分寺跡は当遺跡の北北西約5kmに、仙台郡山遺跡は広瀬川をはさんで北西に約3kmの位置にある。地籍図から復元される仙台市東郊の表層条里は自然堤防の微高地上に特に顕著に確認される。その残存範囲は陸奥国分寺跡を北限とし、仙台市郡山遺跡を西限とするもので、本遺跡周辺はその南限に近い位置にある。

調査区周辺は地籍図・空中写真では表層条里が明確でない地域で、調査によって発見された畦畔No.1やNo.2に相当するような地割は地表では確認されていない。しかし、周辺の表層条里から復元される方格地割の推定線は、畦畔No.1やNo.2にほぼ一致するものである。すなわち東西方向の畦畔No.1は陸奥国分寺跡から南に約4400m(40町)の位置に、南北方向の畦畔No.2は陸奥国分寺跡から東に約1600m(15町)の位置にある推定線にほぼ一致する位置にある。

以上、発見された古代の水田跡と条里地割りの関係を中心にいくつかの問題を検討してきたが、水田区画の形態や規模、基準線の方向などの具体的な検討にはより多くの調査成果の蓄積が必要であり、現時点で詳細な検討をおこなうことは控えたい。今後の調査の進展を待ちたい。

## VI.まとめ

1. 高田B遺跡は仙台平野のほぼ中央部に立地している。調査によって旧地形は旧河川、自然堤防、後背湿地が複雑に入り組んでいたことがわかった。
2. 調査の結果、弥生時代、古代、中世、近世の遺構が発見され、長期間にわたって利用されていたことがわかった。
3. 弥生時代の楕円形団式期の遺構としては、水田跡、建物跡3棟、土器埋設遺構5基、土壤11基、溝跡10条以上、遺物包含層が発見された。
4. 遺物包含層からは多量の楕円形団式の弥生土器、石器が出土した。
5. 古代の遺構としては、水田跡2枚、畑跡、溝跡2条が発見された。特に水田跡の畦畔No.1・No.2は条里区割の基幹となる坪境の畦畔と考えられる。
6. 中世の遺構としては、水田跡、溝跡2条が発見された。
7. 近世の遺構としては、溝跡1条が発見された。溝跡には堰、護岸のための打ち込み杭列が確認された。

## 〈引用・参考文献〉

- 伊藤玄三（1958）：「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44-1
- 伊東信雄（1950）：「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』第1巻
- 伊東信雄編（1981）：『宮城県史』第34巻
- 太田昭夫（1988）：「宮城県における弥生式土器編年研究の現状と課題」『東北地方の弥生式土器の編年について』縄文文化検討会
- 太田・平間（1991）：『富沢遺跡-第30次調査報告書第1分冊-縄文-近世編』仙台市文化財調査報告書第149集仙台市教育委員会
- 金子浩昌（1980）：「第5節魚類遺存体」『九年橋遺跡第6次調査報告書』北上市教育委員会
- 木村浩二（1992）：『神廟遺跡』仙台市文化財調査報告書第159集 仙台市教育委員会
- 後藤・岩見・金子（1992）：『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第148集 宮城県教育委員会
- 近藤和夫（1990）：『高田遺跡』『館前遺跡他』宮城県文化財調査報告書第141集 宮城県教育委員会
- 高野裕彦（1992）：「大型複状安山岩製石器について」『太平臺史案』第11号
- 佐藤・岡村・太田・勝原（1982）：「宮城県岩出山町境ノ目A遺跡の出土遺物」『物』第4号 弥生時代研究会
- 佐藤甲二他（1984）：『後河原遺跡』仙台市文化財調査報告書第71集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二他（1985）：『南小泉遺跡- 第12次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第80集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二（1988）：『富沢遺跡-第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集 仙台市教育委員会
- 佐藤洋（1981）：『山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第33集 仙台市教育委員会
- 神英雄（1988）：「辺境条里的分布と形態について-陸奥国の事例を中心として」『条里制研究』第4号 条里制研究会
- 新庄屋・阿部（1986）：『田柄貝塚III』宮城県文化財調査報告書第111集 宮城県教育委員会
- 杉原在介（1986）：「下野・野沢遺跡及び陸前・楢形西海図から出土の弥生式土器の位置に就いて」『考古学』7-8
- 須藤隆（1973）：「土器組成論」『考古学研究』19-4
- 須藤隆（1983）：「東北地方の初期弥生土器-王山王II層式」『考古学雑誌』68-3
- 須藤隆（1984）：「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』1
- 須藤・田中（1984）：『福島県会津若松市墓群遺跡-1980年度発掘調査報告書』会津若松市教育委員会
- 須藤隆（1987）：「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』73-1
- 須藤隆（1990）：「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 東北大文学部東北文化研究室（1962）：『沼津貝塚出土石器時代遺物』考古学資料第一集
- 東北歴史資料館（1984）：『里沢貝塚III』
- 長沼孝（1984）：「遺跡出土のサメの歯について-北海道の出土例を中心として-」『考古学雑誌』70-1
- 平間亮輔（1989）：「富沢遺跡とその周辺における条里型土地割について」『条里制研究』第5号 条里制研究会
- 平間亮輔（1991）：『富沢遺跡-第35次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集 仙台市教育委員会
- 福島県立博物館（1993）：『東北からの弥生文化』
- 牧野富太郎（1985）：『原色牧野日本植物図鑑』北隆館
- 馬自順一（1987）：「8東北地方の弥生土器-1梯形式と南御山式土器」『弥生文化の研究』4
- 山内清男（1925）：「石器時代にも福あり」『人類学雑誌』40-5
- 山内清男（1979）：『日本先史土器の繩紋』先史考古学界
- 山田しょう（1987）：「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢- 富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会

## 写 真 図 版



図版1 上 調査区遠景（西より）  
下 B区調査区全景



B区南部弥生時代水田跡（東より）



B区南西部  
弥生時代水田跡・SD710水路（西より）



B区南東部  
SD711水路・水口e・f（南より）

図版2

A区南東部柱穴群（西より）  
SB148建物跡  
SB149建物跡



A区東部柱穴群（西より）  
SB150建物跡



SX19土器埋設構





S X20土器埋設遺構



S X22土器埋設遺構



S XI7土器埋設遺構

圖版 4

遺物包含層仰生土器出土狀況



遺物包含層仰生土器出土狀況



遺物包含層仰生土器出土狀況





古代の水田跡（東より）

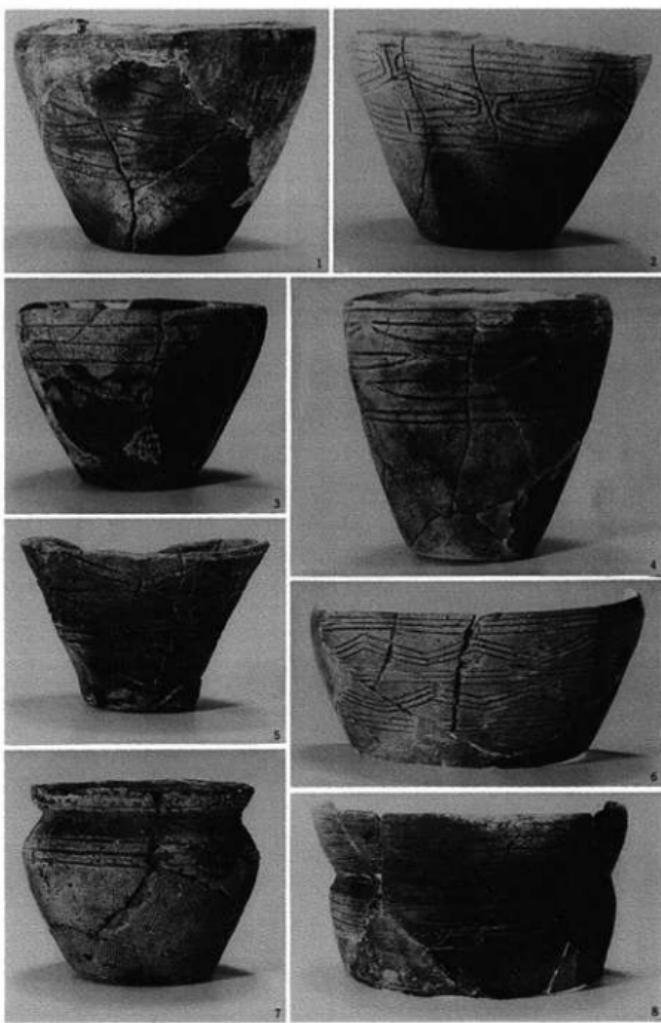


古代の水田跡の畦跡  
4-a層横出畦跡No.3（南より）



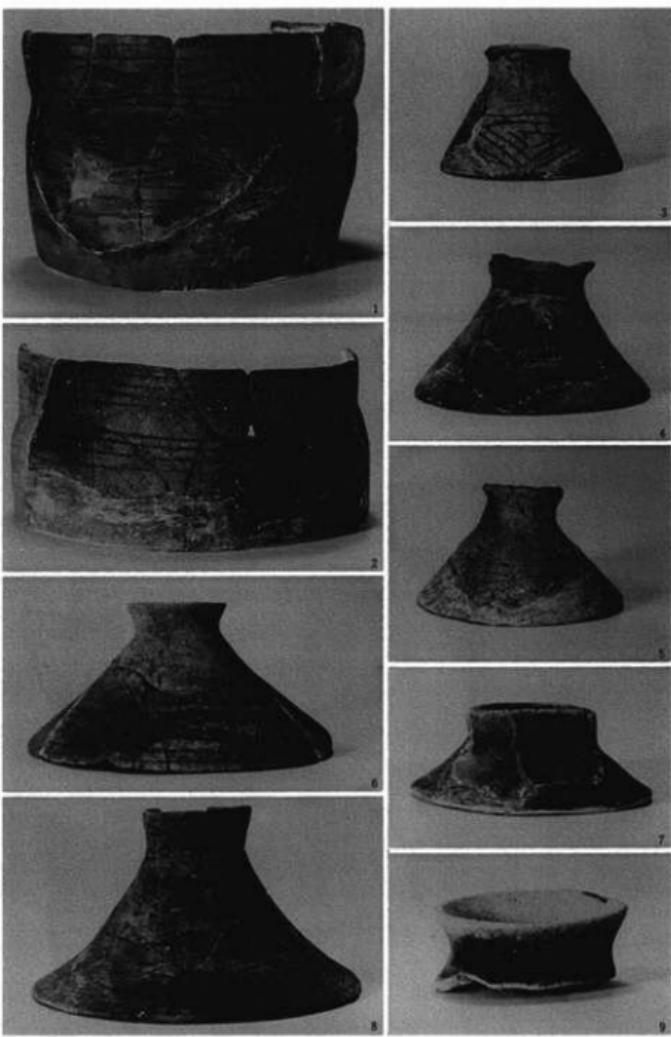
SD702・703溝跡  
塀の部分（西より）

図版6



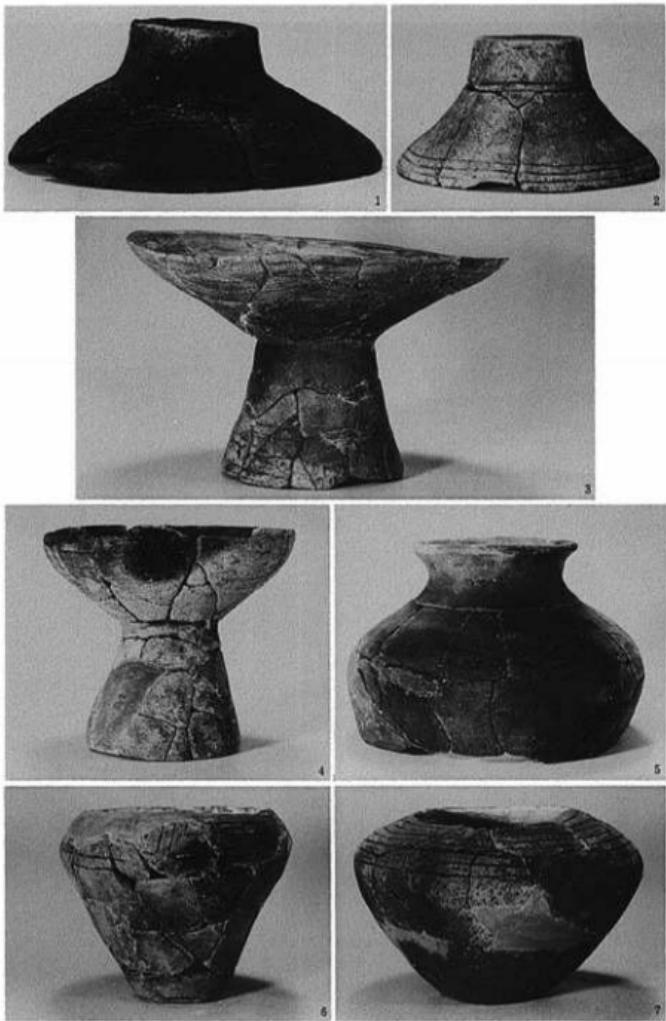
图版 7

照片 7



图版 8

编号



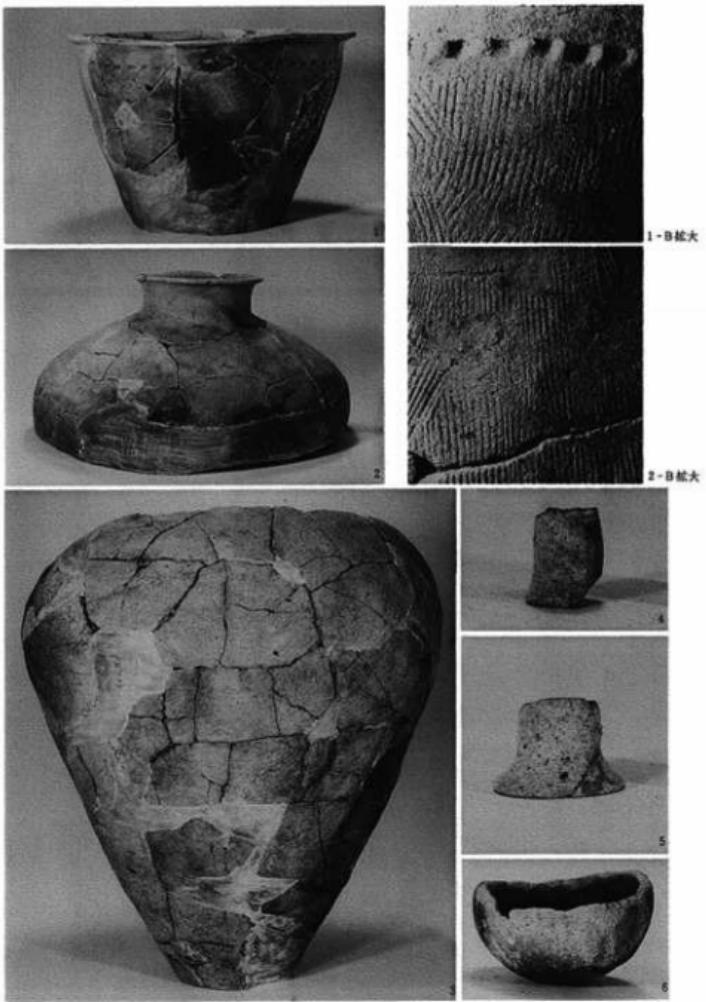
图版9

1、2 稚尺肩，3～7 稚尺肩



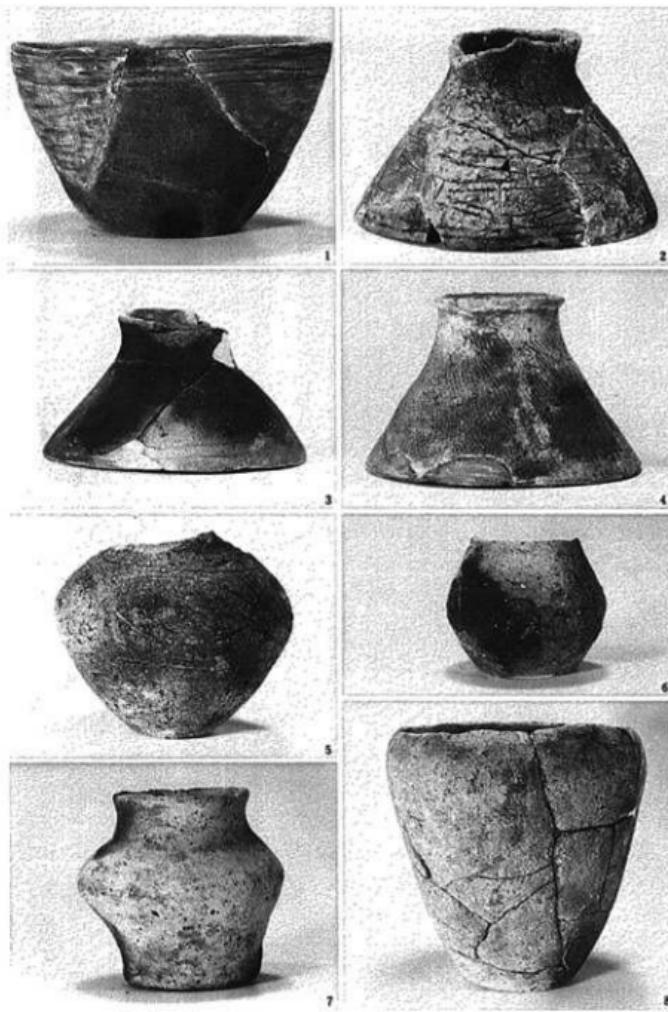
图版10

厘米



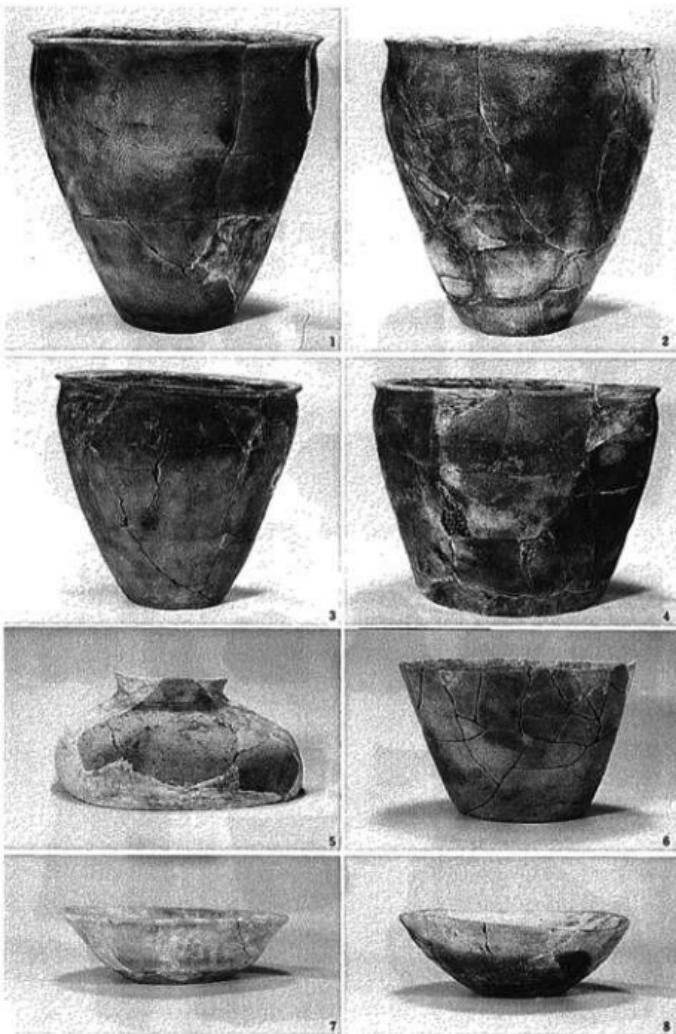
1標尺36, 2任量, 3標尺34, 4~6標尺28

圖版11



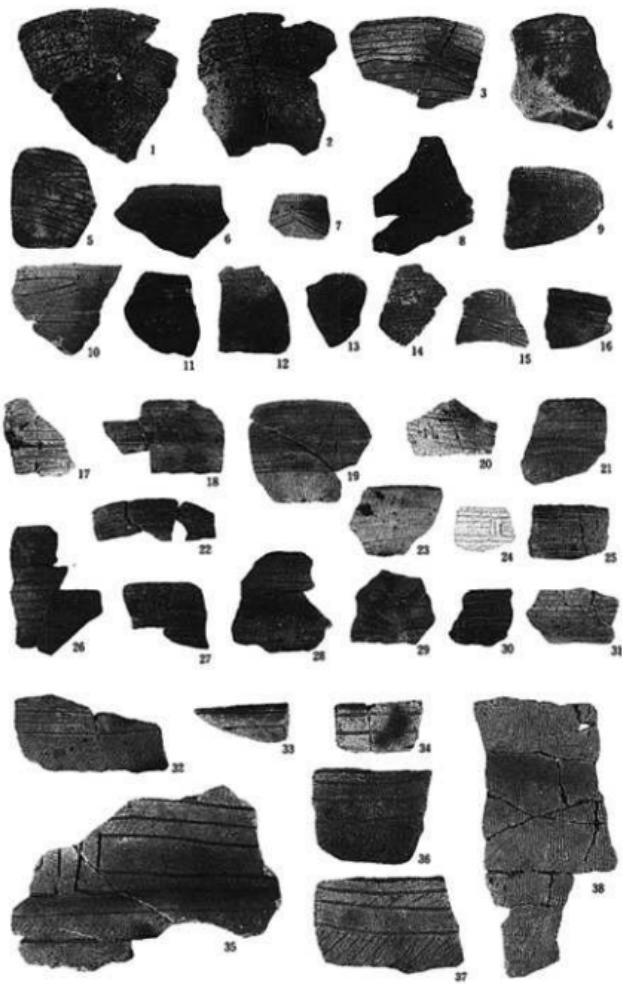
圖版12

1~7 程氏  
8 鄭氏



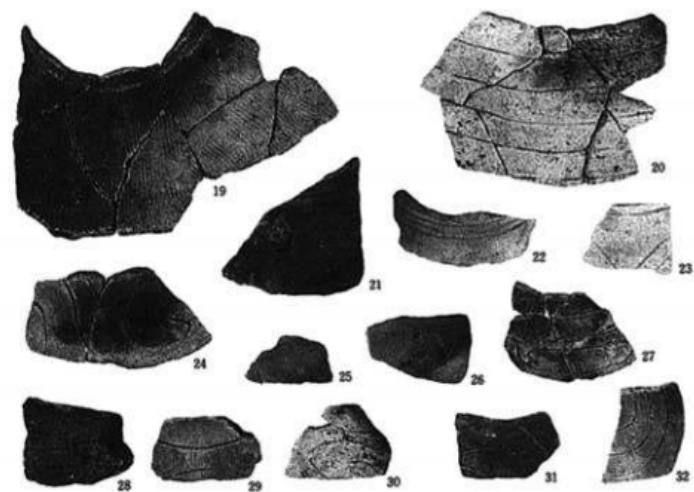
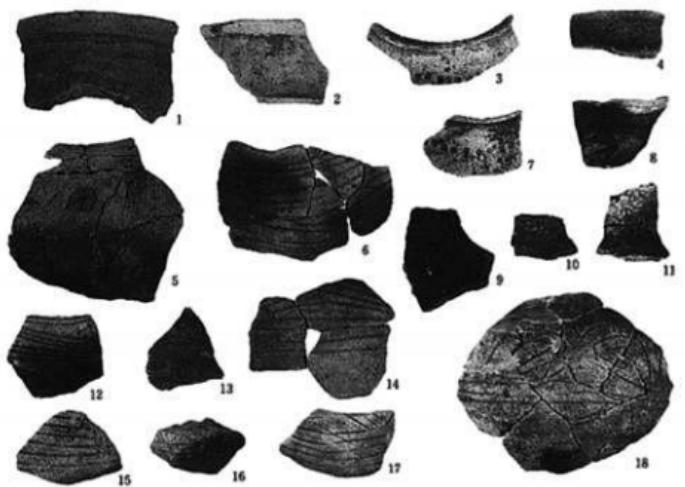
圖版13

1～6縮尺2倍，7・8縮尺3倍



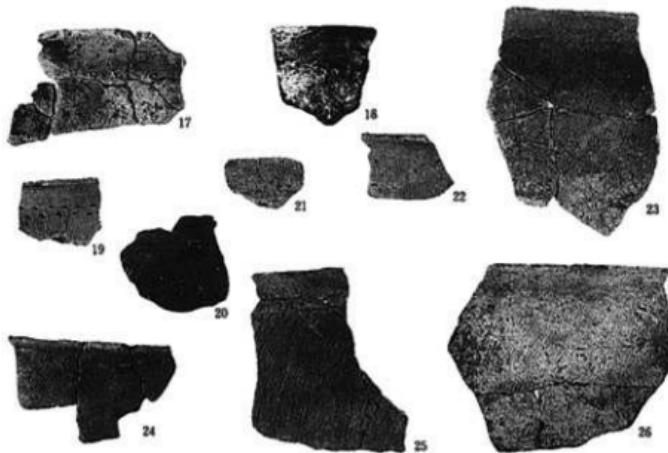
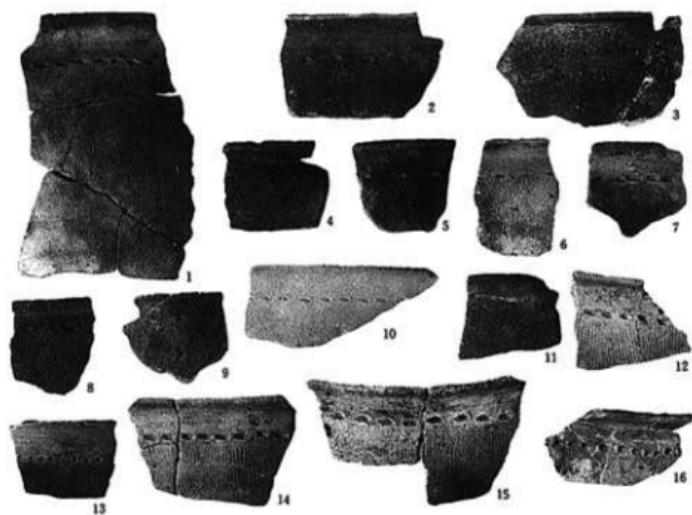
圖版14

縮尺1:2



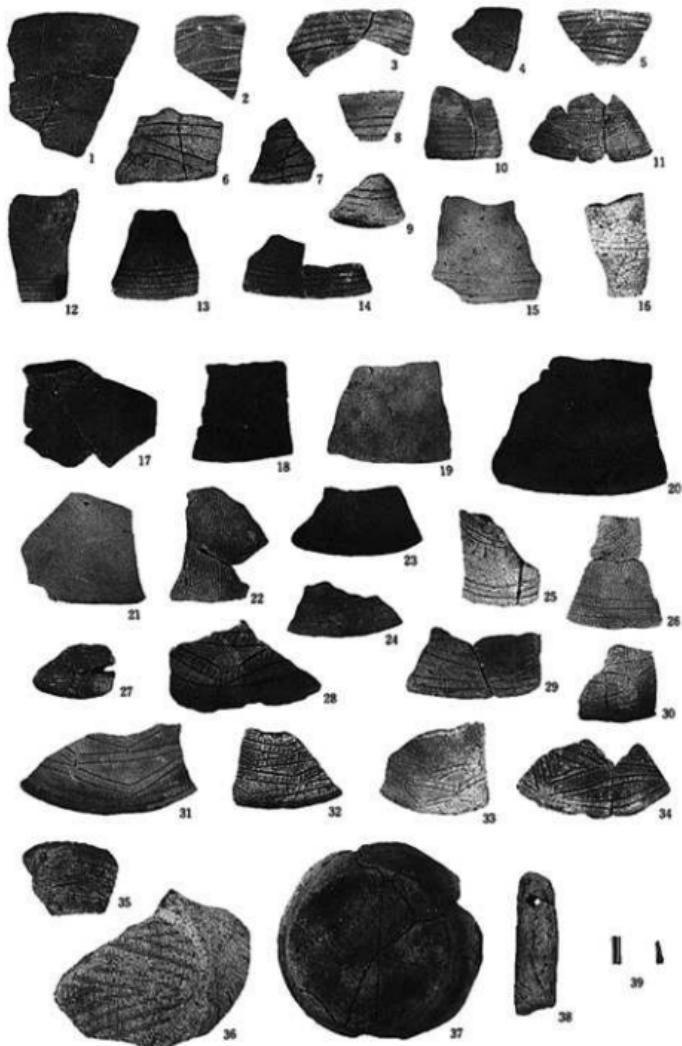
图版15

放大5倍



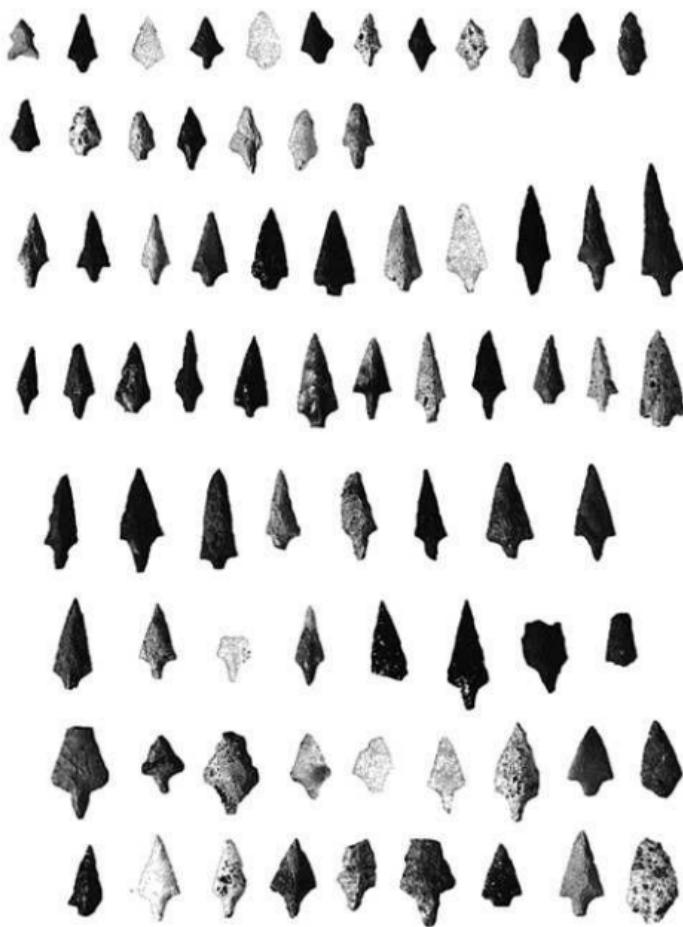
图版16

图版16



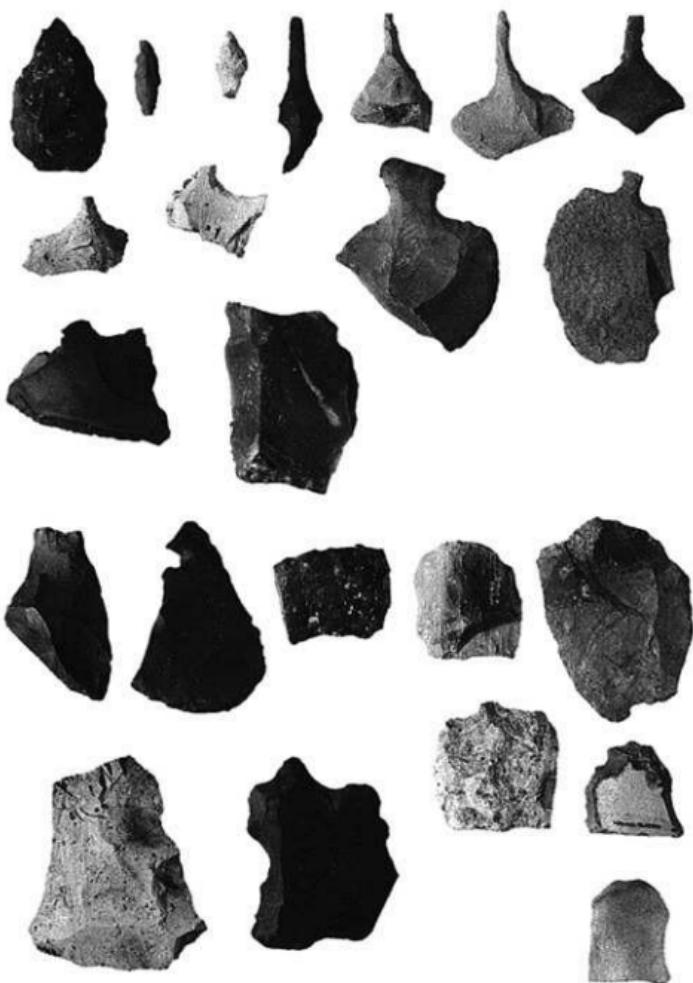
图版17

粗尺另 粗尺另 厘寸



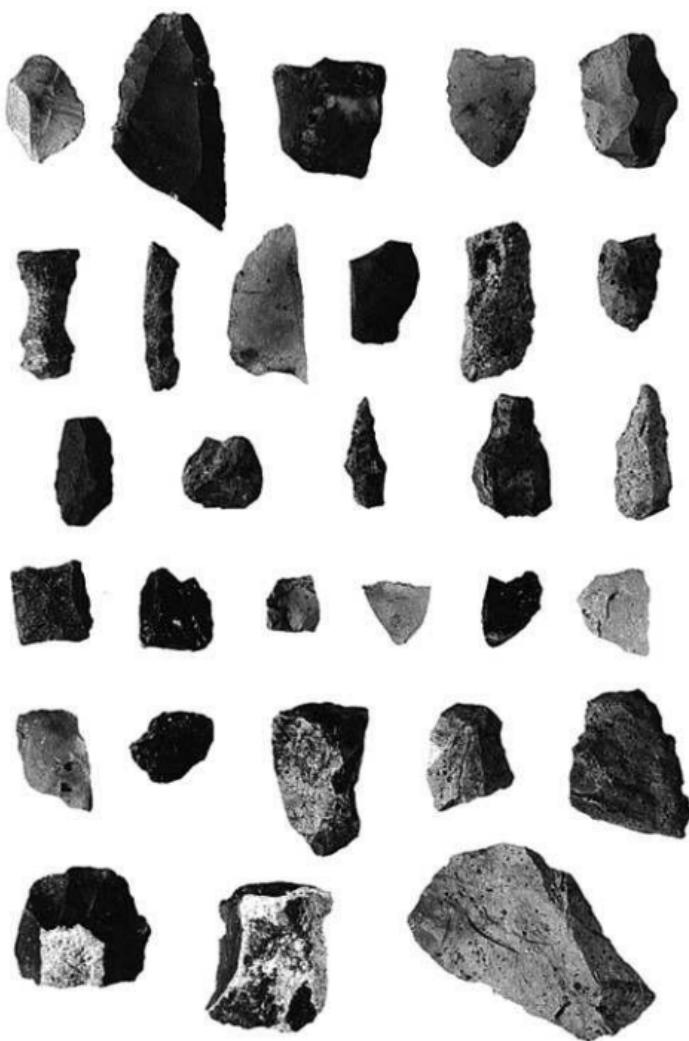
圖版18

圖版18



图版19

厘米

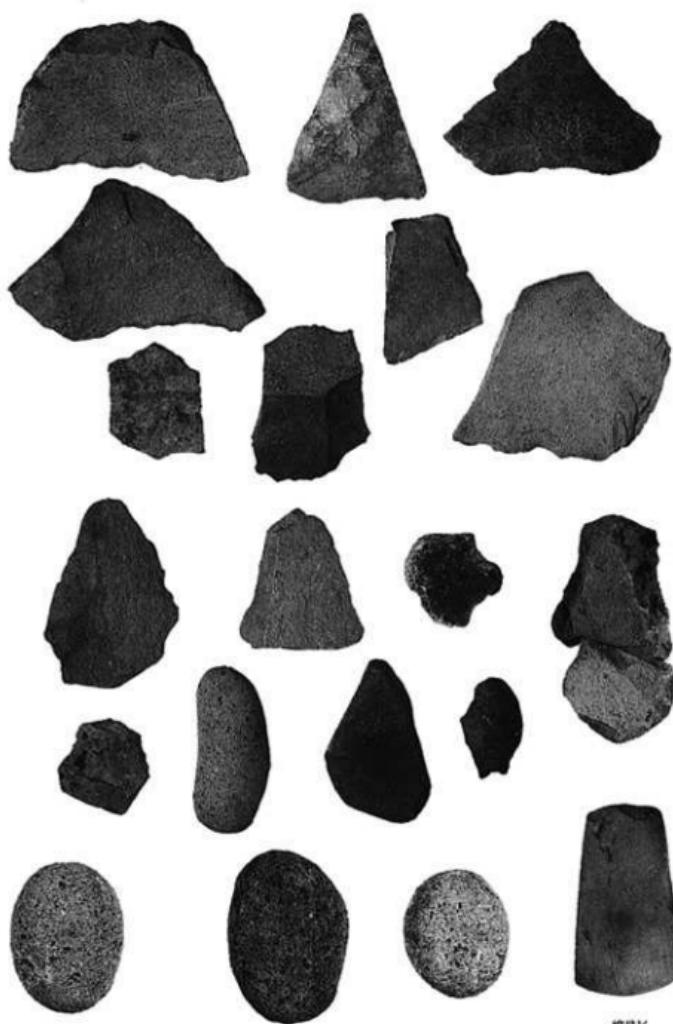


圖版20

縮尺2%

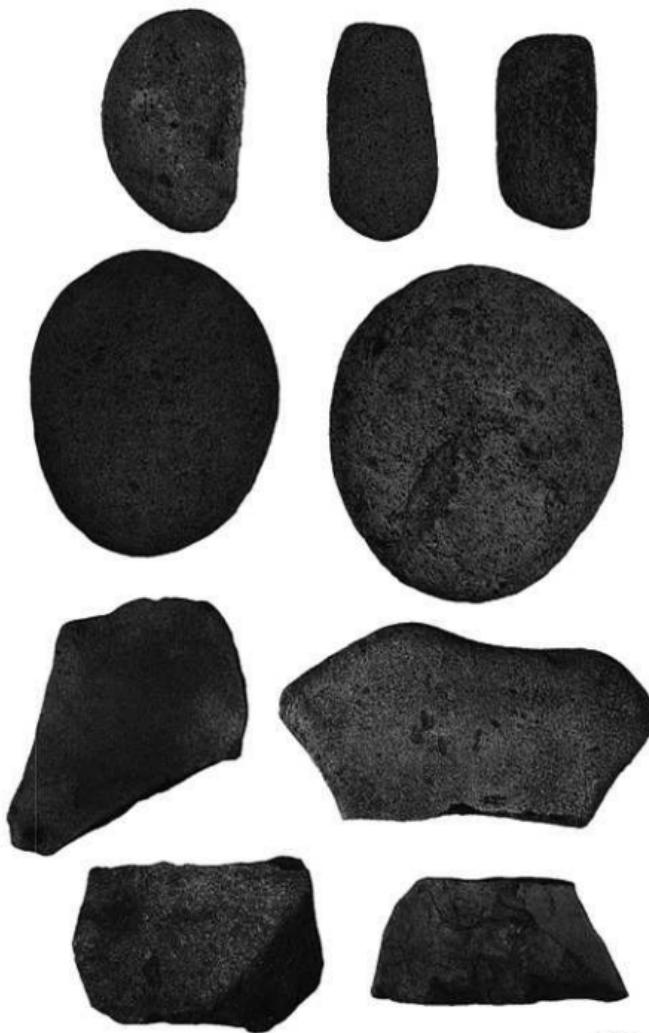


圖版21



編號22

圖版22



图版23

图版23



缩尺5

图版24